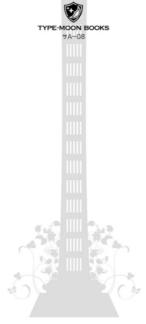




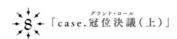


「case.冠位決議(上)」



Lord El-Melloi II Case Files

ロード・ エルメロイ Ⅱ世の 事件簿



目次 Contents

『夢一夜』 005

『第一章』 033

『第二章』 075

『第三章』 127

『第四章』 175

『第五章』 225

『あとがき』

306

ロード・エルメロイII世の

事件簿

8「case.冠位決議グランド・ロール(上)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時 に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次 Contents

夢一夜

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

あとがき



目が覚めて、少年はぎこちなく視線を動かした。

狭い、裏通りである。

饐すえた臭いが、鼻をつく。腐敗した生ゴミの臭いだ。錆びついた脳は動作せず、まともに立ち上がることさえかなわない。何度か壁に手をついては、無様に尻餅をつくきりだ。弱り切ったドブ鼠だって、もう少しマシだろう。

「......はぁ.......

呼吸さえ、ままならぬ。

あらゆる細胞から、精才気ドが極端に失われている。溺れた者がもがくようにして体内へ意識を集中し、魔術回路を駆動させる。いくら蛇口をひねっても、ほんの数滴ずつしか漏出しない水道のようだった。それでも必死に魔力を掻き集めて、強引にでも体を動かせるよう『強化』の術式を発動させようとする。

ひどく、長い時間がかかったように思えた。

自己に埋没してしまってる間に、枯こ死ししてしまってもおかしくなかった。それでも、ひたすら魔力を回し続けた。それだけしかできることがなかった。

数十分か、数時間か。

不意に、顔を上げた。

少しずつ感覚が戻ってきたところで、冷たい水滴が、額を叩いたのだ。

至極細い、ロンドンの雨粒。当時は傘を差すものすら見当たらぬ、絹糸のごときその水滴に、彼は痛切な感情を覚えていた。

名付けできない、しかし強烈なベクトルを抱え込んだ感情。

それは、最初は雨粒に、やがては少年の頭上へと向けられた。

「どうして、空があるんだ……」

ああ、そうだ。

ようやっと状況を吞み込む。

自分は、『外』に出たんだった。ずっと生きてきたあの迷宮──い や、あの世界から、遥かなる地上へと浮上したのだ。

喜びや感動よりも、恐怖の方が強かった。

なのに、力が入らない。

脱出の最後で、何もかも使い切ったのだろう。精才気ドはもちろんのこと、発掘用の装備も使い果たした。ああ、ぬるりと腹部のあたりで温かな感触は血が溢れているのだろう。どれほどの失血量かはわからないが、放置すれば死に至ることは間違いあるまい。

それでも、動かなきゃいけない。

指一本でも、ここから遠ざからねばならない。

でなければ報われない。救われない。這はい蹲つくばろうが何だ ろうが、自分は動かなければならない。

覚悟を決めたときだった。

「隠れたいんですか」

「----っ!」

かけられた声に、総毛立った。

路地裏の陰に、ひっそりと人影が佇んでいたのである。

冬だったのか、とふと思った。

硬質なモスグリーンの外套に、海のごとき蒼いスーツ。大理石を 思わせる白い肌に、燃えるような赤い髪のコントラストが特徴的 な、若い男だった。

だが、あれだけ迷宮で数多くの怪物を凌しのいできた自分に、こんな近距離までかすかな気配も感じさせないとは。

総毛立つと同時に、少年の体は条件反射的に、腰のアセイミーナイフを抜き放っていた。月の光を蓄えた儀礼用の刃に、実戦用の 『強化』を施した品。鋼鉄であろうと、とろけたバターのように貫けるという自信が、彼にはあった。

やっと一欠片だけ溜めた魔力と体力の全すべてを注ぎ込むように して、身体ごと突き込む。

相手は、ゆっくりとその刃を見下ろした。

「うん。残念ながら、それでは殺せません」

「.....つ」

ナイフは、外套の表面で停止してしまっていた。

おそらく防御の魔術だろうということは分かる。だが、それが何に起因した魔術であるかは読み解けなかった。空気を凝固させたのか、ベクトルそのものに干渉したのか、いずれにせよ自分を遥かに上回る魔術師であることだけは明らかだった。

「これでも、僕は現ノ代ー魔リ術ッ科ジの学部長なものでして」

言葉に、戦慄した。

地上の時計塔にて、メインとなる十二学科で、唯一君主ロードを置かない学科だと知識にはあった。歴史と伝統の浅さゆえ、君主ロードを輩出すべき名家のいずれもが、受け持つことを嫌がったのだ。

だとすれば、いくら小技を弄しようが、所詮は新世代ニューエイジの自分がどうこうできる相手ではない。

いや。

ナイフだけではなく、すでに少年の体は、すべて動かなくなっていた。

咄嗟に、魔術回路を駆動させようとしたが、それさえままならない。あらゆる神経が一本ずつ丁寧に切り離されたみたいだった。

硬直したままの少年を、悠然と赤髪の男が見下ろす。

「生還者サヴァイバーでしょう、君は。それも正規ルートじゃな い。そうですね?」

なぜ、と返すこともできぬ少年に、軽い微苦笑がこぼれる。

「推理にもなりません。君の装いは現代には似つかわしくなさすぎる」

指摘に、狼狽うろたえてしまった。

それだけ、発想の外だったからだ。あの世界と地上とが、まるで 違う場所だというのは知っていたが、致命的なほど服装も異なると は思っていなかった。

「加えて言えば、迷宮アルビオンにつながった魔力の乱れは感じていました。裂け目ポータルの出現は独特なものですから」

外套の袖とともに、相手の手が持ち上がる。

どんな魔術を使うかすら分からないが、それが発動すれば、自分 の意識などあっさり刈り取られるのだろう。

やっとのことで地上に出てきた、自分や仲間たちの想いも、何もかも。

消える。

終わる。

意味をなくす。

駄目だ。それだけは耐えられない。想像しただけで、死よりも遥かに恐ろしい。この眼をくりぬかれても、八つ裂きにされてもかまわない。だけど、ここで何も果たせずに終わってしまうことだけは

「ぅ......あ.....」

麻痺した体で、かろうじて、唇だけが震えた。

おそらく、学部長を名乗った男がこちらの口を割らせるため、そ こだけ呪縛を緩めていたのだろう。それでも魔術回路はろくに機能 しないままで、呪文スペルひとつままならない。反抗の術は先回り して潰されている。

熱い衝動だけが、喉元を駆け抜けた。

r

無我夢中で、叫んだ。

内容は、憶えていない。それほどに衝動的な、刹那的な、ただひたすらの叫びだった。何ひとつマシな結果を出せなかった愚かな自分が、愚かなままに発しただけの、哀れで粗雑な言葉の群れだった。

しかし。

終わりの瞬間は、いつまで経っても訪れなかった。

視線を、あげる。いつのまにか体が動くようになっていたのに も、少年は気づいた。

「捕まえる、気じゃ、なかったのか?」

「そうしようと思っていましたが」

なぜだか、男は困惑したような顔をしていた。自分のやっている ことがよく分からない、とでもいうような顔だった。

己の手を見つめ、やがてこんな風に訊いた。

「君は、どうして」

そこで、言葉が途切れた。

赤髪の男が、踵きびすを返したのだ。

「来たまえ」

どうしてだろう、逆らう気になれなかったのは。

もちろん相手がその気になれば、力ずくで従わせられたろうが、 今回の場合は自分からついていってしまったのだった。 一緒に歩きながら、少年は何度も街を見回していた。

美しい街だった。

月光に濡れたような石畳が整然と敷き詰められ、煉瓦造りの建物 はそれぞれが己の個性を十全に主張しつつ、同時にひとつの風景として馴染んでいる。要素としては矛盾している気もするのだが、それも街の歴史のなせる業なのだろうか。

看板の住所には、ソS□OホH□Oと書かれていた。

ロンドン・ソーホー地区。確か、昔の狩りの掛け声に由来する名前だったか。しかし、知識だけで触れてきた街と、実際に自らの足で歩む街の、なんと違うことだろう。

同時に、自分たちの世界の『天蓋』が、こうも煌びやかだったことに、少年はどこかしら切ない感情を覚えていた。

「……テムズからの、風がきついですね」

男が口にした単語は、確かロンドンの大動脈たる河川のはずだ。

実際、通りを吹き抜ける風は強い。

ちらちらと、雪も舞っている。電灯の光に白々と浮かび上がる破片は、迷宮の四季で稀に遭遇する、花粉流を思わせた。そんな中でも多くの人々とすれ違い、何人かは一瞬奇異な視線を向けつつも、まあこの街ではよくあることさと言わんばかりに、酒エール臭い息で鼻歌を口ずさみつつ離れていった。

そのほとんどが魔術師でもその関係者でもないのだということが、少年にとっては不思議だった。

「目新しいですか」

「いや……ああ、そうだよ」

一度否定しかけて、途中で取りやめ、少年が渋々うなずく。

「映像としては知ってたけど……地下ではこんなに分かりやすい夜は……ないから。睡眠や作業効率をあげるために光量は操作されてるけど……それだけだよ」

「ずいぶん長いこと潜っていたらしい」

「違う」

今度ははっきり、少年はかぶりを振っていた。

「潜ったんじゃない。あそこで生まれたんだ」

「へえ」

初めて、男の声音に、軽い驚きの響きが混じった。

「生還者サヴァイバーとは何人か話したことがありましたが、そも そも迷宮の出身という人間には初めて会いました。なるほど、それ でさっきのか」

呟きつつ、こちらを振り向きはしなかった。

それでいて、外套の背中にはまるで隙が窺えない。少年の衰弱しきった体で、逃げることなど叶わないだろう。このままついていくのを危ぶんでいようと、どの道選択肢はほかにない。

夜の光の狭間を彷徨い歩き、四角い煉瓦の建物のすぐそばで、男は足を止めた。

「これは……集フ合ラ住ッ宅ト?」

「ああ、現代魔術科はほかの学科に比べても、ずっと金がないですからね。大した後ろ盾もないから、屋敷なんて用意できません」

そう言って、門を開く。

正直に言えば、意識を保っていられたのはそこまでだ。軋きしむ 螺旋階段を登る途中で、無様にも、少年は気絶したのだった。 翌朝。

柔らかな朝の光で、少年を身をもたげた。

「太陽.....」

つい、呟いてしまう。なんて壮麗な響き。地下のどこにもなかっ た輝き。

身体には、清潔な毛布がかけてあった。そっとどけて畳んでおいてから、少年は隣の部屋に続く扉を開いた。

整ったリビングで、赤髪の男は楕円のテーブルについていた。

「寝心地は悪くなかったですか」

「あ.....はい」

完全に意識を失っていたが、おそらくそれだけ良いベッドだった ということだろう。

男の前では、テレビのアナウンサーが昨今の事件を報じていた。 地下にも一部でケーブルテレビは配置されているのだが、同じ放送 かどうかは、ぱっと見ただけでは分からない。

男の細い手が懐中時計を取り出し、テーブルに置かれていた珈琲のフレンチプレスをそっと押した。ゆっくりと押し下げられたプランジャーに伴って、部屋に芳かぐわしい香りが満ちていく。

「酒を出した方が魔術師らしいのかもしれないですが、飲まない性 た質ちでしてね。……ちょうど抽出の終わったところです。君も、 一杯どうかな?」

差し出された珈琲のカップから、先ほどの香気が立っていた。

おそるおそる受け取って、一口飲み込む。苦みのある液体が舌を 覆い、すぐに爽やかな香気となって、喉元から鼻腔をくすぐった。 味がまともにわかるような生活はしてこなかったが、今出された一 杯が、極めて上質なものだろうということだけは判断できた。

ずっと凝り固まっていた何かが、ほどけてしまうような味だった。

ぎゅ、と奥歯を嚙む。

まだ、そんな緊張を解いてはいけない。地上は自分にとって、迷宮よりもよほど危険な場所だ。何度でも肝に銘じて、いつだって冷静でなければならない。

口に残った珈琲を飲み込み、カップをテーブルに戻して、ぐっと 唇を拭ってから訊く。

「どうして、親切にする? 不正規で迷宮から出てきたと分かって るなら、俺を捕えるのが、時計塔の魔術師の仕事じゃないのか?」

「やめておきたまえ」

と、対する男は手をあげたのだ。

「僕もその理由を言語化してないのです。言語化した結果、君の不利に働かないとは限らない。だったら、互いにそっとしておいた方がいいでしょう」

奇妙な言い分だったが、そう返されると、追及することもできない。確かに、それで元の関係に戻って、拘束されでもしたら藪蛇どころではないからだ。

ぐっと押し黙った少年を見やり、男が続ける。

「ただ、あえて言えば、恩師だったらそうしたろうと思ったから、 が理由の三割ほどは占めているでしょう」

「恩師?」

「ええ。僕の恩師は時計塔の足長おじさんなんて呼ばれてるノー リッジ卿でしてね。とかく見込みのありそうな者を見つけては、面 白がって援助していたんですよ。この場合、見込みというのは才能 のことじゃなくて、単に恩師にとって面白かったかどうかという、 それだけのことなんですが」 自らの分の珈琲を淹れて、男はゆるりとカップを持ち上げた。

さざ波を立てる黒い液体の表面に、目を細めた。初めて、その黒い瞳が淡い紫の色を混じらせていることに、少年は気づいた。

「そう。僕も、僕がされたことを同じようにやっただけにすぎない。……つまるところは善意でもなんでもない。単なる好奇心による気の迷いというべきでしょう」

気の迷い。

まともな答えにはなってない言葉だったが、なんとなく少年には 腑に落ちた。

だから、ひとつ息を吸って、切り出したのだ。

「これを、見ていただけませんか」

懐から、小さな布の袋を取り出したのである。

その袋から慎重にテーブルへと並べられた品は、どこか子供のおもちゃ箱の中身に似ていた。あるいは宝石めいた結晶体であり、あるいは土さえこびりついたままの汚らしい植物であり、はたまた手の中に収まりそうなほど小さな化石たちであった。

「触れて構わないですか」

小さくうなずくと、男はゆっくり品のひとつずつを見定めていった。

「こちらの魔力結晶はおおよそDランクといったところですか。ついで、すでに枯死しているが精霊根。根毛の状態からすると、地よりは火に偏った地域に植わっていたんでしょう。いずれにせよ地上ではまず手に入らない代物です。こちらは幻想種の固着したカケラ……ケルピーの鬣たてがみに、幻蝶の鱗粉、ほう、キメラの幼生の牙ですか。本格的な狩りを始めるより前に、ほかの幻想種に狩られたと見える。それだけに表面の摩耗が少ないのは素晴らしい」

ほとんど一いち瞥べつしただけで、テーブルの品を鑑定してい く。

地上では希少なはずの呪体さえ、細かく状態を見極めていく眼力

に、内心少年も驚愕していた。それだけでも、十分魔術師の世界を 渡っていけるだろう。

さらに、少年が並べた品物の続きを丁寧に見やって、男はひとつうなずいた。

「大したものです。神秘としての純度といい、量といい申し分ない。どこに持っていっても、屋敷の三つほどは建つでしょう」

「あんたなら、買い取れないか」

一拍おいて、率直に尋ねる。

それこそが、少年の目的だった。

しばらく、男が黙り込む。こめかみに指を置き、赤毛の奥をまさ ぐるみたいに動かす。

「……迷宮での換金は、秘ひ骸がい解かい剖ぼう局きょくの仕切りでしたか」

と、口にした。

「当然、地上とは換金レートがずいぶん違うでしょう。解剖局はその落差によって利益を得ているわけですからね。だからこそ盗掘しようとするものは後を絶たないが、こちらも成功者はほぼゼロだ。なにしろ迷宮の入り口は数えるほどしかない。もしも、迷宮での発掘品を直接取引できれば、売った側にも買った側にも莫大な利益となるでしょうね」

「なら、買い取って―」

ごくり、と唾を飲み込んだ。

「ですが、この取引は断らせてもらいましょう」

「なぜ!」

つい、語調が強くなってしまった。

対して、男はもう一口珈琲を飲み、あくまで落ち着いた眼差しで 告げる。 「昨夜も似たことを言いましたけどね。現代魔術科は、資金の面でも権力の面でもほかの学科より遥かに劣ります。突然こんな呪体を手に入れたところで、活用するだけの設備も、売り抜けて目をつけられたときに対処する手段もない。別に不法を咎めているわけじゃなくて、その不法はリスクに見合わないんですよ」

Г......

見合わない。

テーブルの呪体を手早く袋に仕舞い直して、少年は頭を下げた。

「ありがとう。助けてもらったことは忘れない」

火の出るように顔が熱かった。相手のメリットとデメリットもき ちんと考えられなかった、自分への羞恥心だった。足早に立ち退こ うとした背中を、穏やかな声が引き止めた。

「待ちたまえ。……これを持って行くといい」

取り出したメモに、男がさらさらと万年筆を動かしたのだ。

小切手である。何より驚いたのは、おおよそ少年が思い描いてい た通りの額が、そこに書かれていたからだ。

「これ……って。呪体は買えないって」

「ええ、呪体を買うのはリスクが見合わない。ですが、それはあくまで、今このタイミングならという話だ。君との交流が続くなら、やりようはあります。さっきも話したでしょう。迷宮からの盗掘に成功した者はいない。なのに、一体どんな方法かはわからないが、あなたは確かに迷宮の発掘品を持ち出してきた。だったら、今後も期待できるんじゃないですか?」

したたかな政治家と、真摯な科学者とが混ざり合ったような、不 思議な面持ちだった。

テーブルの小切手と男とを交互に見つめて、少年はしばし押し 黙った。

それから、思い切ったように尋ねたのだ。

「だったら、俺をこの場で拘束しないのか。どうやって迷宮から出てこれたのか、尋問でもなんでもして調べるのが魔術師ってもんだろ」

それこそ、恐れていたことだったのに、訊かずにはいられなかった。

あれほど欲していた小切手の額面を、でなければ受け取れないと 思ったからだ。

すると、赤髪の男は困ったようにため息をついた。

「ノーリッジの悪い癖が、僕にもうつったようです。ええ、つまるところは面白そうだと思ったなら、その先を見ずにいられないというやつですが。代々そういう家とはいえ、恩師のあの癖は馬鹿馬鹿しいと思っていたのですが」

たゆたう珈琲の湯気に、苦笑を滲ませて続ける。

「先行投資と言ったでしょう。その小切手には条件がある。そう、 もしもまたここに戻ってきたならば──」

続く言葉を、少年は一生忘れない。

彼の人生を変えた言葉。

ふたりの人生を、つなげてしまった台詞。

「一君は、僕の弟子になるといい」

しん、と沈黙が落ちた。

少年の手が、小刻みに震えていた。

それでこぼさないよう、両手で珈琲のカップを持ち上げ、ぐっと飲み込んだ。複雑な苦味とカフェインが、意識を覚醒させてくれるのを待った。胸元からこみあげるなにかを堪こらえ、できうる限り冷静に申し出を検討しようとして、すぐにそんな小細工は諦めた。

こんなときの礼儀は分からない。

だから、せめてもと思って、深く頭を下げた。

「名前を、聞かせてもらえますか。先生」

敬語を使ったことも、無意識だった。

対して、

「ドクター・ハートレス。ドクターでもハートレスでも、好きによぶといい」

そんな風に、男は名乗ったのであった。

*

「.....つ」

そこで、彼女は目を覚ました。

ひどく長い夢を見ていた気がする。いや、その言い方は正確では ないのだが、肉体に残った感覚はおおよそ生前の夢と変わらぬもの だった。もっとも、生前なら他人の夢など見るはずもないのだが。

ベッドから、身を起こす。

近くのサイドテーブルに手を伸ばし、開けっ放しの瓶からグラスに赤ワインを注ぐ。

昨夜は、これで一杯きこしめしていたのだ。やたらと味の硬かったワインだが、一晩放置していたことで空気に触れて、ほどよく開いたらしい。柔らかな果実味とタンニンがあいまって、彼方の国で見た踊り子のごとき甘く切ないイメージを舌に残し、ゆっくりと暗がりに消えていく。

確か、スペイン産の赤ワインだそうだが、現界したときに得た現 代の知識にも、酒類の細かな薀うん蓄ちくまでは含まれていなかっ た。せっかくだし、それぐらいサービスしてくれてもいいのに。 瓶だけでなく、部屋の壁や柱にも、熟した葡萄の香りがこびりついている。

どうやら、この隠れ家は、地下の酒蔵を改造した場所らしい。現 代のワインはずいぶんと味が複雑化しているようで、残った香りか らも絶妙な味わいが窺えた。

彼女にしてみれば、そうした進化は好ましい。

(我が神の恩恵は、この時代にも生きている)

そう思う。

神の名を、ディオニュソスと言う。

ディオニュソス信仰。かつてギリシアとその近辺で──たとえばマケドニアで愛された、酒と豊穣の神だ。その名は若きゼウスを表し、秘教的側面を持ちつつ、さまざまな土地で熱狂的に愛されてきた神だった。

たとえば、彼女が仕えていた王の母オリュンピアスもそうした信者のひとりだ。

ディオニュソスという神格の魔力をもって、彼女はつくりあげられ、神しん代だいの魔術師として鍛え上げられて、偉大なる王イスカンダルに仕えることとなった。生前のことであり、彼女にとっても青春と呼んでいい時期の物語。

まさか、サーヴァントなどという器を得て、見苦しくも現世に舞 い戻ることになるとは。

「......ああ、死んでいられればよかった」

つい、本音がこぼれた。

そうすれば、こんな無様を晒さずに済んだ。かつての戦友が後継者ディアドコイ戦争などを引き起こし、老醜も露わに相争ったなどという歴史も知らずに済んだ。王を支えきれず、先に亡くなった自分と兄の無能も嘆かずに済んだ。

だからといって、召喚した魔術師を憎んでいるわけではないが、 かつての自分が誓った何事も成せなかったのだと、そんな結果を思 い知らされることは、ひどく虚むなしかった。

Г......

視線を移す。部屋の奥である。

古びた樽や蒸留器が、所狭しと置かれた一角だ。

こちらの独り言など、まるで聞こえなかったとでも言いたげに、 赤い髪の男はそこに佇んでいた。海を思わせる蒼いスーツも、年齢 の摑み難い面持ちも、さきほどの夢と変わらなかった。

「マスター」

そう呼ぶことに、不思議な心持ちがあった。

かつて、彼女が主人と仰ぐのは三人きりだった。彼女の兄と、仕 えるべき王と──彼女を作り出したオリュンピアスのみ。

いまだって、かつてのような忠誠を誓っているわけではない。彼 女とマスターの間にあるのは、あくまで魔術を介した契約と、互い の利益を重んじた取引に過ぎない。便宜上の立場。かりそめの関 係。

ドクター・ハートレス。

時計塔、現ノ代ー魔リ術ッ科ジの元学部長。

その背中に向けて、彼女は瓶を持ち上げ、語りかける。

「マスターは、一杯やらないのか」

振り返りもせず、彼は答えた。

「前も言いましたが、酒はやらない性質でして」

「ふうん。体質としてやれないのではなく、やらない? これだけ いいワインを勧められるのに、おかしな言い分だな」

まあ、わざわざ美味いワインの取り分を減らすこともない。グラスに勝手に注いで、些細な酩酊に心を揺らす。我が神の祝福はここにあり。

瞼を閉じ、鼻腔に広がる葡萄の香気を存分に味わいつつ、ハートレスを見やる。

いまだに、この主人の在り方は分からない。この時代の魔術師特有の偏屈さゆえかとも思うが、単にこの相手が他人との接触を苦手にしているからではないかという気もしてきている。

(あの痩せた魔術師は、エウメネスと似たようなものだったしな)

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで対峙した、ひとりの君主 ロード―エルメロイII世を思い出す。葉巻をくわえ、陰気そうに眉 を顰ひそめていた凡庸たる魔術師は、本人が歓迎しているようでは なくとも、他人との交流自体は多いようだった。生徒たちにも慕わ れているのだろう。

ただ、ひどく苛立つ相手であることは確かだが。

彼女の王をサーヴァントとして召喚し、ばかりか自らがその部下 だなどと思い上がった言葉を発した、三流魔術師。世界でもっとも 輝ける王の夢に、勝手に乗り合わせた愚か者。

「......苦いな」

「おや、ブショネはなかったと思いますが」

「いいや、酒の味にはこちらの気持ちが反映されるというだけだ。 どうやらサーヴァントなんて身の上になっても、それは変わらない らしい」

グラスを、くるくると揺らす。

部屋の隅にかかった蠟燭の光が、ビロウドに似たワインの色合いに重なって、溶けていくようだった。生前に飲んできた酒よりもはるかに洗練された代物だが、酒は酒だ。その一滴ずつに、造り手の誇りが垣間見える。

歴戦の戦士や王と語らってきた、かつての日々を思い出してしま う。

ひとつ息をつき、彼女はつらつらと言葉を重ねる。

「サーヴァントは、夢を見ない」

「.....そうらしいですね」

「夢とは、生きている者の特権だからだ。私たちはどこまで行って も、かつての英雄の残ざん滓しに過ぎず、かりそめの記録帯を再生 しているだけのモノに過ぎない」

当たり前のことを、彼女は言う。

英霊と言えば聞こえはいいが、それはつまり、現代の時間に生き ていないという意味だ。

「なのに、さきほど妙な幻視をした。あれは、お前の記憶だな?」 「.......

マスターは、答えなかった。

きっと答えないだろうとは、思っていた。

だから気にすることもなく、彼女は視線を外した。単に言いたかったことを言っただけのこと。ただ、マスターの記憶としては夢の中の視点など腑に落ちない点もあったのだが、それとてかりそめの客でしかない自分には、さほど引っかかるものでもない。別に、正確に記憶を再現するわけでもないのだから、そんなことだってあるだろう程度の感想にとどまる。

とりわけ、自分は正式な聖杯戦争のクラスですらない。

ハートレスがつくりだした、フェイカーなどというエクストラクラス。バグなんてあって当然と考えるべきだろう。

しかし。

一言だけ、声が届いた。

「生還者サヴァイバーは、どちらだったのでしょうね」

英霊たる彼女の耳は、密やかな呟きも聞き落とさなかったが、そ の意味を理解することはかなわなかった。

ハートレスは、再び自らの作業に没頭していた。

その前の壁に、地図が描かれている。

ロンドンを斜めに描いたと思しい、羊皮紙の地図。

古典的とも現代的ともつかないその構図で―都市の地下、星を丸 呑みにしそうなほど巨大な竜が、さらに奥深くへと潜ろうとしてい るのだった。



「ロード・エルメロイII世は、エルメロイ教室における担当授業を 一ヶ月停止する。その間、ロンドンおよびスラーにおける現代魔術 科の担当講義は、二級講師のシャルダン翁が代行する」

その内容が、師匠の署名付きで掲示板に貼り付けられたのは、昨日のことだった。

当然、生徒たちは大きく動揺し、普段教室の七割方を占める聴講生も含めて、発表直後教授室に押しかけたものだが、すでに師匠はスラーからもロンドンの時計塔本部からも行方をくらましており、当然残った講師たちにも居場所や理由を教えたりはしていなかったため、やむなくといった感じで、数時間遅れの授業が開始されたらしい。

はたして本日も抗議の声はさめやらず、授業そのものは進行しつつも、生徒たちの間ではさまざまな議論が勃発していた。結果、あちこちで師匠を対象にした捜索団が結成されたようだが、いつものフィールドワークなどならそこまでの騒ぎにならないことを考えると、彼らも今回の発表に、なんとなしの違いを感じ取っていたのかもしれない。

たとえば、こうだ。

時計塔ロンドン本部・学術棟のひとつ。

シャルダン翁による大教室での授業後に、騒然と飛び出した生徒 たちは、たちまちこんな会話を始めたのである。

「ドルイドストリートは不在。使い魔で一日監視してたけど、関係 者っぽい出入りなし」

「先生の隠身魔術はそこまで精度高くないから、じゃあ留守にして るのは間違いなしね。メルヴィンさんあたりが匿かくまってたらア ウトだけど……あー、ごめん。こっちの自動筆記も結局収穫なし。 そうだ、スヴィンくんだったら追えるんじゃない?」

「スヴィンもフラットも二日前から出席なしだよ」

「抜け駆けしやがったなあいつら!」

「だったら内弟子ちゃんは?」

「ダメ。見かけた人もいるんだけど、こっちが追いかけようとすると、さっと隠れちゃうみたい。あの子の『強化』半端ないわよ。本気で追いかけるなら、身体強化のほかに、豹の憑霊とか罠用のルーン魔術ぐらいは準備しないと。憑霊用の触媒準備はしてるけど、まだ三日はかかるわね」

「っ……先生よりよほど強者だな……! こうなったら倉庫の呪体 も洗いざらい引っ張り出して……」

どこのオカルトかぶれな探偵団か、はたまた諜報組織かという会話内容だが、実際エルメロイ教室の生徒たちが総出でかかれば、行方不明者の十人や二十人ぐらいは瞬く間に発見してしまいそうだ。むしろ、フランケンシュタイン博士よろしく、行方不明の人物を新たに『創造』しかねない。

わいわいがやがやと騒ぎながら、一団が学舎の廊下を通り過ぎていく。

完全に気配が失われてから、そ……っと、自分は隠れていた柱から出た。ずっと息を止めたままだったので、苦しくなってきた肺の痛みを堪えながら、ゆっくり、ゆっくりと空気を吸おうとする。

「グレイちゃん」

びくん、と肩が震える。

息を止めたまま振り返ると、ピンク色のツインテールがこちらを 見下ろしていた。

「あたしだってば」

「イヴェットさん」

イヴェット・L□レーマン。

自称中立主義派のスパイ。近頃流行りの魔眼少女がキャッチフレーズで、師匠の愛人になるのが目標だとか言ってはばからない眼帯娘だった。

「さ、早く早く」

小声で、イヴェットがこちらを手招きする。

なるたけ足音も殺しつつ、それについていく自分を見やり、イヴェットは嬉しそうに目を細めたものだった。

「いやあ、でも先生も二クいですよね! 内弟子ちゃんを通じてと はいえ、このイヴェットちゃんにだけ、特別に連絡とってくれるだ なんて!」

「イヴェットの目と、スヴィンの鼻は誤魔化せないから......と言ってました」

「そこは頼りになるから、と言ってほしいんですけどねー! 君のグラマラスボディが忘れられない、一夜のアバンチュールをともにしようとか! 早く正直な気持ちを態度と行動で身体で表現してよ先生!」

妄想たっぷりに瞳を潤ませて、少女が先を行く。

そのまま廊下の角を曲がって、ほかの生徒たちがいないのを十分 確かめてから、分厚い封筒を掲げた。

「はい、これよね。言ってた書類」

「ありがとうございます!」

封筒の中身は、たっぷりとした書類の束だった。

調査の結果、どうしても必要だから取ってきてくれ、と師匠に頼まれた品である。大量に書かれた文字列は、おおよそ時計塔の人事にまつわるものらしいが、詳しいことは分からない。といっても、別に機密資料というわけではなく、関係者ならば手に入るぐらいの

ものだと聞いていた。

「とりあえず言われてたとおり、現代魔術科まわりと時計塔本部の、ここ百年ほどの歴史を抜粋しておいたわよ。あ、もちろんスパイとして、同じ情報はメルアステア派にも流しておくからね」

悪びれもせず、自分のスパイ活動も公示しておくあたり、狡猾というべきか。はたまた良心的と評するべきだろうか。

なんとも言えずうなずいたきりの自分へ、イヴェットはことりと 首を傾げた。

「で、先生はどうしてるの?」

「近くのホテルを転々としてます。別にエルメロイ教室だけではなく、ほかの人間からも可能な限り姿を隠しておきたいそうで」

「ふうん」

ツインテールの少女が、つんつんと自分のこめかみを人差し指で触れる。

「みんなが落ち着かない気持ちも分かるのよね。ずっと、時計塔の お偉いさん方が騒がしいもの。みんながどこまで分かってるか知ら ないけれど、そういうのって言語化してなくても伝わるのよ。まし て、魔術師なら」

片目をつむり、イヴェットは口にする。

実際彼女の言う通りかもしれなかった。さっきも似たことを考えたが、エルメロイ教室のみんながここまでざわついているのは、単に師匠が行方をくらましたからだけではありえない。それぞれが優れた魔術師だからこそ、いまこの都市を覆いつつある影を感じ取っているのだろう。

直感こそは、魔術師に欠かせぬ才能だ、とは師匠の講義での言葉だったか。私にはあまり潤沢でない類だが、といつものような自虐もついていたが。

こちらが抱いた書類を興味深げに眺めつつ、イヴェットが尋ねて くる。 「で、一体なんで突然こんなことになったの? あなたなら、もう少し詳しく聞いているんでしょう?」

「それはー」

スパイを自称する彼女にどこまで話していいものか悩みつつ、自 分は今回の事件の発端を思い起こしていた。

時計塔を震撼させるに足る、その事件の始まりを。

その記憶は、数日前に遡る─。

*

ロンドンの、とあるビルの屋上だった。

このところ、イギリスではビルの緑化が進んでいて、屋上に庭をつくり、樹木を植えるのがトレンドらしい。もともと流行に敏感な土地柄なので、あちこちの建物でそうした人工緑地を見ることが増えていたのだが、今回、屋上で通された建物は格別だった。

なんでも、茶室というらしい。

ある意味では、魔術以上に、自分にとって奇妙な場所であった。 ごく狭い空間に、優美な棚や細い丸太、竹を切り落としたらしい花 瓶や掛け軸が設けられ、さまざまな意味を主張している。もちろ ん、ライネスの屋敷のティールームだって、けして劣らぬ品や調度 に溢れているはずなのだが、今の自分は異国エキゾチックな空気に あてられてしまっていた。

とりわけ、この部屋自体を構築している建材が、自分には驚き だった。

(.....木と、土と、紙でできている?)

壁にせよ柱にせよ畳にせよ、建築のほとんどはそうした素朴な材

料でできあがっているようだった。自分たちとは異なる歴史の積み 重ねが、こんなカタチを成していることに、ひそやかな感慨を抑え きれない。

すう、と目の前に湾曲した形の茶碗が差し出された。

かぐわしい香りとともに、薄く湯気が立っている。おおよそ歪といってもいい形の茶碗なのだけど、そうした湯気と一緒に見ると、なぜだか優美に思えた。あるいは、それもセットになったデザインなのかもしれない。

「足は崩していただいてかまいません」

と、奥の女性が告げた。

鮮やかな着物は、いつもの振袖とは少し違っていた。かすかに唇をほころばせ、柔らかな表情で、言葉を続ける。

「立りゅう礼れい式の方が気楽だったかもしれませんが、せっかく ですので雰囲気を味わっていただきたいと思いまして」

「あ.....はい」

彼女によれば、ずいぶん簡素にされた形式だそうだが、頭の良くない自分にはいっぱいいっぱいだ。すすめられたお茶の味もろくには分からない。確かお茶を喫のむときには、わざと音を立てるのだったかどうだったか。

一生懸命思い出そうとしてるところで、隣の気配が動いた。

「―化あだし野の菱ひし理り」

師匠が口を開いたのだ。

動められた通り、横向きに足を崩した自分と違って、正座のままだった。

茶碗を手にしたまま、ゆるりと視線をあげて、師匠は相手の魔術師を見やる。法政科の女魔術師・化野菱理。いままでの事件でも、何度となく関わり──時には敵対してきた彼女が、自分たちをこの茶室に招いたのだった。

その佇まいは、一輪の花のよう。

だけど、きっと、この花には棘がある。

しばし、彼女の瞳を見つめながら、師匠が続けて尋ねる。

「日本のお茶を紹介していただけるのは嬉しい限りだが、そろそろ呼びつけた用件をお伺いしても?」

「気の早いこと」

困ったように囁ささやいてから、菱理はとある地名を口にした。

「ウェールズではずいぶんご活躍されたそうですね」

何のことを言ってるかは明白だった。

自分の故郷のことだ。

あの故郷で、師匠はアトラス院の院長―ズェピア・エルトナム・アトラシアと出会い、自分とアーサー王に関わる事件を解き明かした。描かれた答えは自分の愚かさを露呈するものだったが、それでもあの村が自分にとって残酷なばかりではなかったと知れて、ずっと胸につかえていたものが取れたように思えた。

「法政科にご足労いただくようなものではなかったが」

「ご冗談を」

鈴を鳴らすように、ころころと女が笑った。

「アトラス院の院長に、聖堂教会の代行者まで鉢合わせして、そんなことを仰られても困ります。現代魔術科の君主ロードは立場もわきまえず、あまりに放ほう埒らつに動いているのではないか、という声も出てますのよ」

「それだけですか」

短く、師匠が返した。

言葉面だけ取れば喧嘩腰とも取れる対応だったが、ふたりの間に 通ったのはけして不穏なものではない。彼らにしてみれば、当たり 前の前提を確認しているだけらしかった。 時計塔の秩序を統制する法政科と、時計塔そのものを代表する君 主ロードとの会話とは、つまりこういうことなのだろう。

ずっ、と短く音が鳴った。

師匠が茶を飲み干した音だ。確か、吸い切りとか言って、極東だとそうして音を立てるのが礼儀らしい。不思議な風習だと思うけれど、自分もおそるおそる真似をしてみた。

そんなこちらを見やり、菱理が改めて口を開く。

「その上で、今日お呼びしましたのは、もちろん、兄──ドクター・ ハートレスのことですとも」

と、彼女は言葉にしたのだった。

びくりと肩が震えるのを、押しとどめるのに苦労した。今の自分たちにとって、それだけの意味がある名前だった。

「兄の足跡が、あの事件にもあったそうですね」

「ええ」

師匠がうなずく。

兄というのは、確か菱理もハートレスも、同じノーリッジ家の養子だったからだ。現代魔術科のスポンサーであり、時計塔の足長おじさんみたいなものだよと話していたのは師匠だが、そういう意味でも師匠と縁の深い相手なのだろう。

避けがたい、運命。

ずっと前からこうなると定められていたかのような、そんな妄想さえ浮かんでしまう。

いずれにせよ、師匠は菱理の質問について、かすかに目を細めた。

「ウェールズに、確かにハートレスの足跡はありました。どうやら、彼の実験にあの場所はふさわしかったらしい。細かなところは割愛させていただきますが」

「できれば、その細かなところをお聞かせ願いたく思います」 言いながら、菱理が着物の懐から、そっと封筒を差し出した。

「これは?」

「今度、ロードとしてあなたが動く参考になりますかと」 封筒を持ち上げ、師匠が片目をつむる。

「むしろ、レディの思い通りに動かされている気がしてきますが」

「お互い様でしょう」

澄ました顔で、菱理が言った。

それから、こう続けたのだ。

「兄は、第五次聖杯戦争を利用して、サーヴァントを召喚しました」

Г......

師匠は、何も言わなかった。

あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでのことだ。

菱理も乗っていた魔性の列車で、ハートレスはとある英霊を召喚 した。

いわく、偽の英霊フェイカー。歴史に名を刻みし英雄の影武者─本来の名を露わにせずとも、確かに英雄と寄り添い、あるいは英雄自身よりも大きな爪痕を時代に残した─そんな相手を呼び出すためのエクストラクラス規格外。

通常、いくら優れた魔術師といえど、そんな英霊を呼び出せるものではない。

しかし、ハートレスはもうすぐ勃発する第五次聖杯戦争とその術式の利用、日本からロンドンまで地球を横断する霊脈、さらには亜種聖杯や死徒の魔力による特異な現象などを重ね合わせて、不可能を覆したらしい。

だからこそ、師匠は第五次聖杯戦争に参加せず、ロンドンに居ることを決めた。

「その第五次聖杯戦争は、すでに四騎か五騎ほどが召喚されたそうです。おそらく、もう数日とたたずに総勢七騎が集まり、開幕するでしょう。そうなってしまえば、いままでのデータからして、二週間ほどで決着します」

いままでのデータ。

それはたとえば、師匠の参加したという、第四次聖杯戦争などだろう。さすがに法政科はかの極東の魔術儀式についても、細かなデータを用意しているらしかった。

「あのサーヴァントを召喚・維持しているのがハートレス自身がつくりだした亜種聖杯だとはいえ、その機能はオリジナルの影響を免れ得ません。わざわざ冬木の聖杯戦争近くになって召喚したのがその証拠でしょう。つまり、聖杯戦争が終了するタイミングになれば、フェイカーも退去するはずです。であれば、まず間違いなく、近い内にハートレスの動きがあるはずでしょう?」

「いえ」

菱理の言葉を、師匠が否定した。

「おそらく、もう事件は起きている」

落ち着いた声に、菱理はすぐ反応を返さなかった。

正座した彼女の姿は、そのまま一輪の花のようだ。遠く極東からイギリスへと運ばれた、凜としたたたずまい。こちらの言葉も感情も、その花弁が柔らかく包み込んでしまう。その柔らかさと曖昧さこそは東洋の神秘だろうか。

「心当たりはおありでしょうか」

「どうぞ、封筒をご確認ください」

と、さきほどの封筒を、菱理は手で指し示した。

それに従って封筒を開き、中身を一瞥して、師匠の眉間の皺が深くなった。

「……なぜだ。まだ時期じゃないだろう。私にも知らされてない上、こんな時期に開いて、一体何を決めるというんだ」

「時期の理由については、私にも知らされていません。もちろん、 上には上なりの事情があるのでしょうが」

穏やかに、法政科の女が言う。

「ただ、数日内には、あなたへも正式な通達が下りるはずです。この場合、数日の時間を稼げることは、兄──ハートレスの情報と、引き換えにするだけの価値があるかと思いますが」

Г......

師匠は、黙りこくっていた。

沈黙の重さは、さきほどのものに数倍していた。かすかに唇を震わせ、封筒の中身に据えられた視線はこゆるぎもしなかった。

「師匠、何が?」

たまりかねて訊いてしまった。

しばしの間をおいて、師匠が視線をあげた。

「ミス化野」

「よろしいですわ。そのつもりで連れてきた内弟子でしょう?」 と、女が促した。

石を吐き出すように、師匠が呟く。

「―冠位決議グランド・ロールの名を、聞いたことがあるか?」

知らない言葉だった。

だが、冠位グランドという単語自体には聞き覚えがあった。あの 人形師──蒼崎橙子が認められた、魔術師として最も優れた地位が冠 位グランドではなかったか。つまりそれは、魔術世界において、最 上位・最優先の出来事についての表現。

だからこそ、苦渋とともに師匠が言う。

「時計塔の運営において、学科と派閥の垣根を越えて審議するため、君主ロードおよびその代理人を呼びあつめる会議の名だ。ああ、時計塔における最高決定機関と思っていい。エルメロイにとって重要なのは……」

「……ええ、エルメロイにとって重要なのは、以前臨時で行われた 冠位決議グランド・ロールで、君主ロードを失ったエルメロイ派 を、鉱石科キシュアから外す決定がされたことでしょうね」

微笑とともに、菱理が説明を添えたのである。

「その後、現代魔術科にエルメロイ派を据えることに決めたのも、 冠位決議グランド・ロールでした。あれは前回の反発をとりなすた めの既定路線でしたので、君主ロードの集まりも悪かったですけれ ど」

「.....つ」

愕然と、自分は硬直していた。

師匠にとっても、エルメロイ教室にとっても、それはあまりにも 因縁深すぎる出来事ではないか。

そして、新たに師匠が言う。

「その冠位決議グランド・ロールが、再び開かれると、この女は伝 えてきたんだ」

強く、胸が鳴った。

なぜだか、来るべきときが来た、とそんな感慨があった。

多分、分かっていたのだと思う。まるで総決算のごとき、その時間について。

たとえ第五次聖杯戦争にあらずとも、自分と師匠が向かい合うべき何かはきっとやって来るだろうと、どこかで予感していたのだ

―そして、時間は現代へと戻る。

時計塔のロンドン学舎を出た後、自分は地下鉄に乗った。

あらかじめ言われていたように、追跡を避けるべく、電車を降りた後は可能な限り人の多い通路にまぎれこみつつ、目抜き通りのキングスウェイからキーリー・ストリートを曲がって、テムズ川の風を受けながら歩いていく。

この時季のロンドンは、まるで海の底に沈んでいるようだ。

寒いというよりも、積み重なった歴史の中に沈んでいくような心 地がある。時折馬に乗った警官が通りすがったりするあたりも、そ んな気持ちを後押ししていた。

近代的な車と自転車と騎馬が揃って行儀よく信号待ちしていたりすると、自分が過去にいるのか未来にいるのか分からなくなって、だけど確かに、誰かが重ねた足跡の上に自分は立っているのだと、ちっぽけな誇らしさに包まれたりもするのだった。

(.....おかしい、でしょうか)

以前は、この街がただ怖かった気がする。

こんなにも多くの人々が、こんなにも多くの歴史が今も街で生き ていることに、ずっと怯えていた。毎朝おびただしい人影が、何の 疑念も持たず、灰色のビルに吸い込まれるのが、古い死の世界に連 れて行かれるようにしか見えなかった。

しかし、今は。

たった数ヶ月前の自分は、まるで彼方の夢のようだ。

こんなにも大きく変わってしまうことに、ひどく静かな感慨だけ

があった。そして、それはきっと何かが終わっていくことにも通じているのだろうと―そんな意味のない切なさが胸をついて。

そこで、足が止まった。

なるたけ気配を殺しつつ裏口から入り、エレベーターで目的の階へと上る。

イヴェットと話していたように、ホテルの一室だった。

広さこそ担保しているが、時計塔に知られれば君主ロードがこんなところに、と目を剝かれるような、素朴な部屋である。いかにも安っぽいベッドとソファがいくつか、サイドテーブルを含むデスク一式、後は古ぼけたテレビに聖書が置いてあるきりだ。

ただ、ビニールテープで補強されたコーナーソファには、そんな 素朴さとあまり似つかわしくない、いかにも育ちの良さそうな金髪 碧眼の少年がふたり揃っていた。

「グレイちゃん、おかえりなさーい!」



「だから、お前がグレイたんに節操なく近づこうとするな!」

楽しげに、ソファの背から身を乗り出そうとするフラットと、ぐいぐいそのフラットを肘で押しながら、荒らげた息でこちらを牽制してくるスヴィン。

エルメロイ教室の、双璧だった。

「ええっ親愛の情だよ! 俺はいつだってエルメロイ教室のみんなを愛してるんだよ。グレイちゃんを仲間はずれにしたら駄目だろ!」

「だ、だから、僕は仲間はずれにしようとかそういうんじゃなく て!」

「ああ、ほら! グレイちゃんが顔を曇らせちゃったでしょ!」

「ちちち、違う違う違うったら! グレイたん、僕は.....」

「.....ふふっ」

つい、噴き出してしまった。

交互にフラットとこちらを見つつ、両手を上げ下げするスヴィンが、あまりにおかしかったからだ。

「大丈夫です。ちゃんと分かってます。スヴィンさんは拙を敬遠し てるかもしれませんけれど、けして仲間はずれにしようとか思って ません」

「そ、その、それもちょっと違……」

何かしら言いかけた少年を、ぱしんと手を叩く音が阻んだ。

「はいはい。三人ともじゃれ合うのはそこまでで」

もうひとりの登場人物が、部屋の奥から声をあげたのだ。

「この数日、みんなで居場所を転々としてたからね。どうも腰が落ち着かない。とりわけスヴィンは普段の寝床が変わるとダメなタイプだろう? ほら、たいてい犬小屋が替わるとマーキングが終わるまで、うろうろしてるじゃないか」

「人を犬扱いしないでください!」

「おっと失礼。他人の嫌なところをつくのがやめられなくてね」

堂々と言ってのけたのは、いかにも彼女らしい所業だった。

ひとりだけマシな椅子に座ったライネスが、ぺらぺらと本をめくりながら振り返ったのである。

隣には、いつもの水銀メイド―トリムマウも佇んでおり、ちょうど紅茶を淹れていたようだ。手元には焼き菓子も置いてあって、砂糖とバターの入り混じった美味しそうな香りが、紅茶のそれと混ざりあって、彼女の周囲だけ優美な空間に変えてしまっている。これもある種の結界かもしれない。

「で、グレイ。イヴェットはちゃんと資料くれた?」

「あ、はい。こちらです」

いくつか報告をしつつ、イヴェットからの資料を渡すと、

「ははは、これは大忙しだなあ」

と、ライネスは片目をつむった。

「あの、やはり、冠位決議グランド・ロールが課題ということなんですか。必ずしも、エルメロイのことで冠位決議グランド・ロールが開かれるとは思わないのですが.....」

無論、無視できないぐらいに因縁深いとは思う。

しかし、化野菱理も、冠位決議グランド・ロールの理由について は言及しなかった。自分が知る限りでも、エルメロイ派に決定的な 失敗はなかったように思う。師匠やライネスが取り越し苦労をして いるとは思わないのだけど、何かしらピンとこないのは本当だっ た。

すると、ライネスはかすかに眉根を寄せて、深く椅子に腰掛けてから口を開いた。

「いや、単純に現状がまずいんだよ。情報を十分握らず、冠位決議グランド・ロールに乗り込んでから、敵対的な君主ロードに切り出

されると、エルメロイ派にとってとどめになる可能性がある」

「どういうことですか」

因果がうまく摑めなくて、質問すると、ライネスはひとつうなず いた。

「ハートレスは、うちと同じ現ノ代ー魔リ術ッ科ジの元学部長だろう」

「.....あ」

とっくに明示されていた関係にやっと気がついて、自分の愚かさ に目眩がする。

「ドクター・ハートレスの計画がどういうものかは分からないが、 菱理が暗示してたように近い時期に動いてくるのはまず間違いない。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと君の故郷のことを合わせ て考えれば、それが魔術世界で無視できぬ影響をもたらすだろうこともね。

もちろん、今のエルメロイには一切関係ない。うちが現代魔術科におさまったのは、あくまで鉱石科キシュアを追い出された反動となしくずしで、空白の席を引き取っただけの話だから。だけど、それですまないのが時計塔だ」

どこか愉しげに、少女は言葉を紡ぐ。

「弱いものは叩け。溺れているなら好都合、二度と浮かび上がらないよう沈めてしまえ。この考え方が時計塔の基本というものだよ。だいたい、エルメロイ派なんてとっくに滅んでるはずだったのに……と歯嚙みしてる連中はたっぷりいるからね」

彼女にとっては、それが故郷なのかもしれない。

もはや食事のように他人と争い、空気を吸うように他人を蹴落とし、そうやって守ってきた城。けして同情したりすべきではない、 誇るべき居場所。

だけど、だから自分にとっては、少しだけ寂しい。

ひとりぼっちで、冷たい玉座にいる彼女の姿が見えるよう

で.....。

「紅茶のおかわりはいかがですか?」

「うん、ありがとう。淹れてくれ」

水銀メイドが注いだ紅茶を一口含みながら、小さく肩をすくめて、少女は言う。

「まあ、そういうことで可能な限りの情報を集めておく必要があるわけ。君主ロード全員が揃うことはまずないとして、出席に前向きな君主ロードの強み弱みは可能な限り握っておきたい。いやもちろん、常に情報はアップデートしてるんだけど、この段階で冠位決議グランド・ロールが起こるなんてビッグニュースから摑みそこねてたんじゃ、ほかにどんな見落としがあったか分かったもんじゃない」

まったく私も錆びついたもんだとこぼして、ライネスは視線をあげた。

「冠位決議グランド・ロールについて、イヴェットは何か言ってた かな?」

「ええと、そっちは聞いてなかったみたいで、何度か瞬きしてから、本当にあたしに言ってよかったのねって確認してました。それから、あたしが聞いてなかったということは八割方メルアステア派はこの話を摑んでないか、今回は棄権しようと考えてるはずだと」

「ああ、さすがはイヴェットだな。まあスパイとはいえ末端ではあるから、メルアステア派の内情についてどこまで正確かは分からないが、私の考えとは一致してる。資料の抜粋もコンパクトで、よくまとまってるよ」

ぱんと手の甲で、ライネスが紙の束を叩く。

彼女のそうした褒め方はわりと珍しい。なるほど、イヴェットの 洞察と提出した資料には、それだけの価値があったんだろう。

「その資料は、どういうものなんですか」

「うん。先に言ってたように、そんな極秘資料じゃないよ。ただ し、これはメルアステア派だからこその資料なんだよ」 「……あ、イヴェットさんにスパイをさせてる派閥の?」

「そうそう。同じ時計塔の基本資料でも、派閥が違えば中身は全然 違ってくる。メルアステア派から見たとき、ドクター・ハートレス はどういった人物だったかって話。これに現代魔術科の資料を加え ると、別の人物像が浮かび上がってくる」

素早く紙の束をめくりあげつつ、何枚かの写真が挟まった書類を ライネスが抜き出す。

「スヴィン」

「はい」

「先に整理してた資料と、これを突き合わせておいて。見当はつい たけど、君が確認してくれると楽ができるからね」

「わかりました」

案外素直に、スヴィンが資料を受け取る。

それを見てから、

「ところで、師匠は─」

自分が言いかけたところで、扉が開いた。

どうやら隣の部屋で、シャワーを浴びていたらしい。

バスローブ姿で、濡れた長い髪にタオルを巻いていた。白いうな じにまだ水滴が滴したたっていたが、そんなことよりも、一層こけ たように見える頰の方が、自分には印象的だった。

「ああ、グレイ。戻ってきてたのか」

目を細めて、ゆっくり椅子のひとつに座り込む。

倒れ込むようでもあった。実際、座り込んだ師匠はいつも以上の 渋面をつくっていた。

「大丈夫ですか」

「体調について言えば、最悪だ」

と、師匠は素直に吐露した。

顔色は青く、右手はそっと胃のあたりに触れている。すでに魔術薬は飲んでいるはずだが、胃痛を殺し切るには至らないのだろう。 タオルで乱暴に髪を乾かし、デスクに置かれた葉巻を手にとって、 念入りに炙あぶりつけるようにして火をつけてから、一服する。

いかにも苦々しげに煙を吐き出して、師匠は話を切り出した。

「さきほどライネスとも話していたがね。早速、手紙が二通ほど舞 い込んだ。ああ、他人に追われないよう、毎日ホテルを変えてるつ もりなのに、当たり前のようにこのホテルへ郵送されてきたとも」

言いながら、師匠がデスクから取り出したのは、二通の封筒だった。どちらも格式高い封筒に、それぞれの意匠を凝らした封ふう蠟るうが捺おしてある。

その右側に視線をやって、師匠は口を開く。

「片方は、メルヴィン経由で、民主主義派のロード・バリュエレー タから」

その名は、もちろん覚えていた。

イノライ・バリュエレータ・アトロホルム。

潔く、きっぱりとした老女だった。

双貌塔イゼルマで出会った、師匠以外では初めての君主ロード。 創造科バリュエを治める彼女は、一見穏和で、現代の技術にも通じ てる風に見えながら、その芯は自分が知っている中でも、最も魔術 師として完成してしまっているひとりだった。

あの蒼崎橙子の師匠というのもうなずける、魔術師の頂点。

「もうひとつは、降霊科の君主ロード。貴族主義派のロード・ユリフィスからだ」

「降霊科……」

こちらは、ほとんど接触のない科だった。

以前師匠の講義で聞いたとおりなら、それこそ死霊や英霊──たとえそのごく一部であるとしても──を利用した魔術を取り扱うはずだ。ある意味で、自分の故郷とも縁が近く、だからこそその恐ろしさも如実に伝わる名前だった。

エルメロイも貴族主義派のはずなので、本来は同じ派閥にあたる のだろう。ただ、だからといって単純に友好的な相手でないこと は、師匠の顔色を見ても明らかだった。

くく、とライネスが肩を震わせる。

「幸い、両方とも招待された時間はかぶっていない。民主主義派と 貴族主義派で踏み絵をやらされるような事態は避けられたがね。い やはや、これで踏み絵だったら、兄のさぞ面白い顔が見られたろう に」

「レディ。そこは一蓮托生というのを分かっていただけないか」

「もちろん分かってるとも。その点自分でも残念なんだが、どうやら私は、己の破滅と愉悦だと後者の方を重んじてしまう性質らしい」

「.....最悪だ」

「うん、いい褒め言葉だね」

くすくす笑い続ける彼女を前に、自分は沈思していた。

すでに、頭がいっぱいだ。

冠位決議グランド・ロールにせよ、それに絡んだ貴族主義派や民主主義派の思惑にせよ、師匠やライネスたちが危惧しているドクター・ハートレスの暗躍にせよ、自分には何ひとつ思い及ばない領域にある。普段ライネスが言っている通り、時計塔で常に張り巡らされている権謀術数を凌いできたからこそ、そうした領域にも対処できるのだろう。

Г......

一旦、思考を打ち切る。

自分にできないことを数えても仕方ない。今できて、確実に師匠

の役に立つことはなんだろう、とそれだけに思考を絞り込む。あ あ、結局自分ができるのは、信頼できる相手にこの身体を預けるぐ らいだ。

だから、

「一拙は、何をすればいいですか」

「おやおや」

と、ライネスが片眉をあげる。

「いい意気込みだなあ。ちょっと兄には出来すぎの内弟子じゃないか?」

「黙れ。……よく分かってる」

ぼそり、と師匠の付け足した言葉で、顔が熱くなる。火を噴いたかと思った。

耳まで真っ赤になっているのを自覚しながら、言葉を探す。

「その、あの……不甲斐ない内弟子なのが、拙だと、思います。ですけど、何か、できることぐらいはあるんじゃないか、って」

「うん。なので、適性に応じてチーム分けをしよう」

と言って、ライネスが手元の菓子を持ち上げた。

焼き色の綺麗な、小さなサブレーを五つ。

トリムマウを除くと、自分たちと同じ数だった。

「まず、兄と一緒に手紙を送ってきたお偉方と会うチーム。まあこれは兄と私のふたり以外ありえないな。このクラスになると、ちょっとしたマナーのミスでもここぞと追い詰めてくるし、君たちは表情に出過ぎるからね」

取り分けられたサブレーふたつに、自分も納得する。

自分もフラットも、間違いなく不向きだろう。スヴィンならばある程度対応できそうな気もするが、だからといって海千山千の政治力を保つ時計塔の上層部とやりあえるほどではない。

残った三つのサブレーを、ライネスは小皿に載せて、こちらの方へと置いた。

「で、さっきの資料とかをもとに調査するチーム。こちらは冠位決議グランド・ロールにそなえて、現代魔術科前学部長―ハートレスの足跡を追うことになる。チームはグレイとフラットとスヴィンで。スヴィンの鼻なら追跡は任せられるし、分析はフラットがお手の物だろう。グレイはとにかくこいつらの手綱を握っていてほしい」

「ただし、万が一、ハートレス本人やフェイカーと接触しそうに なった場合、ただちに撤退するように。これは君たちを関わらせる ための絶対条件だ」

ついで師匠がつけたしたのは、順当なところだった。本来なら、 エルメロイ教室を停止したように、そもそも生徒たちを関わらせた くもないのだろうが、ことフラットやスヴィンを放置するとどうな るかは、これまでの事件で身にしみている。

「は……はい。頑張ります」

「も、もちろん、グレイたんに握られてます!」

妙に力の入ったスヴィンの隣で、ぽんとフラットが手を叩く。

「あ、ル・シアンくん。ひょっとして鼻輪とか首輪とかに興味ある? 俺、今からグレイちゃんとスヴィンくんに似合うの探してこようか!」

「さっき、ライネスさんにも犬扱いしないでって言ったところだろう! というかなんで鼻輪が先なんだ!」

ぎゃあぎゃあ、と嚙み付くように、争い合うフラットとスヴィン。

このふたりは本当に仲が良いのだと思う。

「イッヒヒヒ、いつもうるさいなコイツら!」

固フ定ッ具クで据え付けられたアッドの声音も、どこか愉快そうだった。

「そうですね。少しだけ――いえ、とても羨ましいです」

「へえ、正直になったもんだな!」

「そう、ありたいと思ってます」

小声で返す。

それから、ひとつだけ気になるところを、ライネスに訊いた。

「しかし、師匠がいなくては調査の要が欠けているのでは? それに、どなたかから話を訊く場合でも、師匠がいなければ専門的な話を伺えない可能性があります」

探偵ではないにせよ、事件で推理の役目を担っていたのは、いつだって師匠に違いない。そもそも、魔術に関する知識量では、フラットでもスヴィンでもまだ師匠には遠く及ばないだろう。

すると、

「まあ、そこはちょっと考えてる。君には気に入ってもらえるん じゃないかな?」

にんまりと、ライネスが唇の端を歪めた。

悪戯っぽい笑顔だった。

一大魔術回路・第七十八層。

迷宮における、最小行動人数は五人とされる。

発掘用の人員がふたり、警戒用の人員がひとり、幻想種など好戦的な生物と遭遇した場合の戦闘用の人員がふたりということだ。もちろん、これより多い数もありうるし、複数の役割を兼ねることもあるが、より少ない数での行動は基本的に許可されない。

少年は、発掘を得意としていた。

属性は地。

新世代ニューエイジだった母からは大した魔術を教われなかったが、少なくともこの迷宮の探索には適していた。希少な鉱石や呪体を発見、採掘するのに必要な術式はすべて伝えられていたからだ。

今、彼らが探索している七十八層は、地表からだと三万メートル ほどにあたる。地ソ上ラでは、一番高い山でも九千メートルに届か ないらしい。なんてちっぽけな世界。

だけど、なんて綺麗な夜空だったろう。

「おい、ぼうっとしてるな坊主! 喰われたいのか!」

一喝したのは、チームでも年長者の、ふくよかな体型の魔術師 だった。

少年と同じく、発掘用メンバーである。属性は火。錬金術によってさまざまな魔術薬をつくりあげ、状況によってはその場で岩盤を溶かしたり、鉱物だけを浮き上がらせたりするのが彼の仕事だった。

「ああ、ああ、すっきり死んでくれるならそれでいいが、でなけれ

ばクソ高い魔術薬を使わされるのはこちらなんだ! 製薬の時間 だって馬鹿にならん! _

大魔術回路のじめっとした空気の中で、錬金術師は地団駄を踏む みたいに言い募る。

もっとも、回路と言っても、このあたりの地面は死せる竜の因子が薄く、普通の洞窟とそんなには変わらない。もちろん、淡く発光する巨大な魔術回路が走っているのなんて、この迷宮ぐらいだろうし、ちょっと気を抜くと殺人胞子やら火喰い鼠やらが出てくるのは本当だけど。

「まーまー、同じ発掘班なんだから許してやれよ、ゲセルツ」

「地上で換金までしてくれたんだからさ」

とりなしてくれたのは、戦闘用メンバーのタッグだ。

こちらは兄弟で、一攫千金を夢に、数年前地表から降りてきたらしい。もっとまともな魔術師の家系なら魔術刻印の継承で殺しあってたぜ、というのが鉄板ネタで、酒の席ではよく笑いながら話してた。

「いや実際、地上でよく売ってこれたなあれ」

「目ん玉飛び出るかと思ったっつの。解剖局がどんだけボッタクリ かだぜ! 結局誰に売ったんだあれ?」

「いや、その、いろいろあって」

言葉を濁す。

実際のところ、売ったのではなく貰ったのだとか、ハートレスと 名乗った現代魔術科の学部長に師事したんだとか、そういうことは まだ伝えてない。自分だって、なんでそんなことになったのかよく 分かってないので、うまく説明できそうにないからだ。

「お前らはこの餓鬼にクソ甘すぎる!」

不満たらたらのゲセルツを、兄弟は冗談めかしつつ相手をしていて、それでもどこか和気あいあいとした雰囲気があった。チームを組んでそれなりに経つからだろう。なんだかんだと、都市シティで

もよくつるんでいるのを、少年も知っている。

それから、最後のチームメイトが、隣に寄り添った。

少年と同年代の、黒い肌の少女だった。

警戒用メンバーである。

肌と同じように黒い瞳、形の良い唇。その吸い込まれそうな色に似つかわしく、属性は水で、自動制御による元素変換魔術を得意としていた。うなじのあたりで髪を切りそろえており、いつもクールに遠くを見据えた横顔が、少年にはひどく眩しかった。

隣に並んで、口を開く。

「よかったわね。ご家族のことも」

短くても、心底案じてくれていたことが、はっきりと伝わる囁き だった。

それだけで、少年にとっては十分だった。

だから、つい、もう一言加えてしまったのだ。

「あの」

「何?」

続く言葉を吐き出すのには、地上に出ると決めた時と同じぐらい の勇気が必要だった。腰にぶら下げた採掘用のツールを握りしめ、 少女の目ではなく、かすかに発光する地面を見つめながら、打ち明 けた。

「都市シティに帰ったら、一緒に食事とか、どうかな?」

回路の先で、ゲセルツと兄弟の交わす声も、今だけは百万光年より遠かった。

やがて、

「.....ええ」

かすかな恥じらいとともに、黒い肌の少女はうなずいた。

回路を走る光はほんのかすかだったが、しかし美しかった。たとえ空が見えなくても、これで十分と胸を張れるだけの輝きが、彼の瞳には見えていた。

――もう、十数年も前のこと。

少年にとって、それは間違いなく黄金時代だった。



―私にとって。

冠位決議グランド・ロールという言葉は、特別な響きを伴っている。

あのとき、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテの運命は決定されたからだ。

先代の君主ロードであったケイネスが死亡して、その欠落がどれ ほどのものか、突きつけられた会議。長らく治めていた鉱石科キ シュアからエルメロイ派が引き摺り下ろされ、その代理となるもの を探すべしと多数決により決定づけられた日。

それから二度目の冠位決議グランド・ロールまでに、私は無理やり新君主ロード候補として擁立され、もう思い返したくない数の暗殺未遂に巻き込まれることとなった。生き残ることができたのは、当時の執事の教育やそれなりに努力した結果と思ってはいるが……結局のところ、最後に生死をわけたのは、幸運以外にあるまい。

だからこそ、兄に目をつけたのだ。

以前から、ファンではあった。義ケイ兄ネスが死んだ第四次聖杯戦争での生存者。単に戦闘力や生存力だけを問うならば、集つどったマスターの中で最下位を争うほどに低かったはずなのに、なぜだか生き残ったあげく、義兄のエルメロイ教室までいつのまにか引き取っていたという異端児。

普通なら、恨むところかもしれない。

記録によると、直接魔術師同士の戦闘はしていないにせよ、義兄と戦ったひとりには違いない。そうでなくても、義兄から聖遺物を奪ったなんて情報もある。物心ついてからの接触は数える程だったため、義兄にさしたる感慨はなかったが、普段の私であれば、あれ

これと恩讐を利用しつつ搾れるものを搾り取るあたりの行動を取っていただろう。

そうしなかったのは、やはり魅入られたのだ。

一介の──それも新世代ニューエイジとしてもイマイチな生徒が、 君主ロードをさしおいて生き残るという、図抜けた幸運。その幸運 を取り込めたなら、ひょっとしたら私はこの先も生きていけるので はないかと、できの悪い魔術みたいなことを考えながら、この兄を 自分の椅子に縛り付けたのだ。

「兄も、冠位決議グランド・ロールは一度出たきりだったか」

「あのときも出席した君主ロードは、代理人を含めても最低限の四人きりだったがな。どこも君主ロードは腰が重い。間違いなく、私は時計塔で会えても自慢にならない君主ロードの筆頭だろう」

「親しまれてるということで、そこは帳消しにすべきじゃないかな。いやもちろん、格も威厳もあったものじゃないけどね?」

顔をしかめた兄に、充足感を得てしまう。

もう結構な付き合いなのに、いつまでもコンプレックスを晒け出したままの君は実に哀れだし、できればそのままずっといてほしい。

ふるり、と視線を移す。

今、私たちがいるのは、ロード・バリュエレータが寄越した馬車の中だった。

トランベリオなんかも馬車を用意してくるのだが、もちろん彼らがリムジンを持っていないわけではない。どういう場合にどういう案内を寄越すかは、互いの関係や立場によって、くっきりとしたメッセージを浮かび上がらせているのだ。

今回の場合、御者のやたらと丁寧な態度からしても、「オレたちは君らを重視しているぞ、どうかな貴族主義派からこっちに寝返らないか」ということだろう。こういう小憎らしい伝え方は、なんともお貴族らしくていつかやり返したい。あと、ほとんど振動が尻に伝わらないのは、どんな魔術を使ってるのか教えてほしい。

「まあ、なんにせよ、こちらは手札不足だ。向こうがわざわざ事前 に呼びつけてくれてるんだから、それにかこつけて情報収集するし かあるまい。後は調査チームの成果次第さ」

うんうんとうなずきをいれつつ、もうひとつ問いかけてみる。

「で、調査チームの方はどうかな、兄上?」

尋ねる声が弾んでしまったのだが、責めてくれるな我が兄よ。

正直、あのアイディアがあそこまでハマるとは考えてなかったのだ。こうして思い出しただけでも、頬がにやけてくるし、初めて見たときのグレイの目の輝きぶりに、おや一生分の善行を施してしまったかななんて、らしくもない感慨を抱いてしまったぐらいである。

ますます眉間の皺をきつくして、兄は大きくため息をついた。

「今のところ問題ない。フラットとスヴィンがいる以上、気は抜けないが」

「ふふふ。グレイはどうかな?」

「それも、今一緒にバスで揺られてる。ひとまずハートレスの情報から整理してるところだ」

おお、答える我が兄の苦々しそうなこと。

同じ馬車に同乗したトリムマウは、いつもと同じ冷たい表情で、 そんな私たちを見つめていた。 ロンドンにおけるバスの歴史は長い、らしい。

赤く塗られて、ずんぐりとした二階建て車両ダブルデッカーは、かつての自分のようにロンドンに住まうものでなくても、映画やドラマなどでお馴染みだろう。

もとは馬車による輸送だったものが、二十世紀初頭には自動車が 導入され、以来地下鉄とともにロンドンの交通網を担ってきたそう で、師匠とともにロンドンにやってきた直後、最近導入されたとか いう連接ベンディーバスを見たときには大いに驚いたものだった。 ふたつの車両が前後で繋がれたカタチは、いろいろ無理がありそう に見えるのだが、それだけロンドンっ子にバスが愛されているとい うことだろう。

本日の自分たちも、そんな二階建て車両の一台に乗っていた。

窓の向こうで、穏やかなエンジン音とともに、街の風景が流れていく。

あるいは、やたらと多い博物館や美術館。

あるいは、車道を行儀よく並んで走る自転車たち。

いずれも街に馴染んで楽しげだ。つい、目的を忘れて見入ってしまう。

もちろん、今回バスを選んだのは、追跡を避けるためだ。師匠の車も、公務用とプライベート用がそれぞれ用意されているが、今回はそれらは使わず、駅もなるべくバラバラにしつつ、バスの中で集合したものである。なんでも、熱心なファンの生徒には車種やナンバーはおろか、タイヤの擦り切れ方やちょっとした小物まで把握されているから、魔術的な探知の対象になりやすく危険であるというのがスヴィンの言い分だった。

ともあれ、そんなバスの二階で、今回の調査について話していた

ときに、その単語は出てきたのだ。

「ハートレスの弟子……?」

「ああ、そうだ」

と、師匠の声が肯定する。

自分がバス最後部のあたりで、フラットとスヴィンがひとつ前の 座席。互いに小声でも、聴覚を強化すれば問題ないから、会話に支 障はない。

当然、ほかの乗客に聞かれないようフラットが偽装の魔術もかけていた。自分たちが物騒な魔術の話をしていても、周囲からはどうでもいい学校生活などの内容に変換されてしまうのだとか。ひょっとして普段の授業中でも、こうした魔術を使ってエンジョイしてるのではないかと思ったが、そこは追及しないでおいた。

こほん、と咳払いをしてから、師匠の声が続ける。

「何しろ、もともと現代魔術科の学部長だ。単に指導を受けたという相手だけなら無数にいる。しかし、はっきり弟子といえるレベルの関係を持つ魔術師はそう多くない」

言われてみれば、その通りだ。

聴講生まで含めると、師匠の指導を受けた魔術師は数多い。だが、人となりがわかるほどの距離で触れ合ってきた生徒はごくわずかだろう。エルメロイ教室の正式な生徒でも、さらに限られてくるはずだ。

まして、そこまで人が寄り付かなかった頃の現代魔術科となれば、

「現代魔術科の方の記録からは念入りに消されていたが、メルアステアの方の資料にはあれこれ残っていてな。まあ突き合わせないと分からないようになっていたが、菱理から流してもらった情報もあって、五人ほど弟子の居場所が把握できた。君たちには彼らの居場所をあたっていってもらう」

「はーい!」

「……フラット、お前はなるべく後ろでいろ。スヴィン、おおよその交渉は任せる。必要な時は私が補佐するから、ひとつでもふたつでもハートレスにつながる手がかりがつかめればいい。だいたい、こうして調査はしているが、ハートレスの動きが冠位決議グランド・ロールとまったく関係ない可能性だってある」

そうは言いつつ、師匠もあまり信じてない風だった。

降って湧いたような冠位決議グランド・ロールではあるが、だからこそこれまでの事件とまるで関連性がないだとか、そんな確率は極小だろうと見ている。いや、仮に関係ないとしても、双方とも師匠が立ち向かうべき障害なのは確かなのだから。

「分かりました」

と、スヴィンがうなずいた。

「でも、先生はそれだと人前には出られないのでは」

「む.....っ」

師匠が、ぐっと口ごもる。

ついで、前の座席から振り返ったフラットが、再び師匠の姿を目 にしてしまい、口元を押さえたのである。

「ぶ、っぷぷぶ……!」

「笑うなフラット! 先生に失礼だぞ!」

「だ、だって! こんな教授ってあまりにもビッグベン☆ロンドンスターというか! こうなってしまうとリトルベン☆ロンドンスターというか! あ、いやメタルベン☆ロンドンスターかな!」

座席は二人がけなのだが、この席には自分ひとりしかいない。

師匠の声音は、自分の膝下でしているのだ。

問題は、そのサイズだった。

「……レディ。笑わないでくれるのは嬉しいが、どうしてそんなに困ったような表情をして、小鼻をひくつかせているのかな?」

「い、いえ。その、まさか、その、こんなに師匠が可愛くなってしまうだなんて......」

「イッヒヒヒヒ! これじゃ俺の同類だよな!」

アッドの感想もむべなるかな、自分も吹き出すのを堪えるのが精 一杯だった。

ふんぞりかえった師匠は、手乗りサイズなのだ。

キラキラと、表面に金属の光沢を波打たせている。長い髪も服 も、すべてが十分の一サイズになって、同じ色に統一されているの だ。なんでもトリムマウの一部を加工して、師匠の使い魔として再 定義したものらしい。

笑い声に反応して、じろっと振り返った何人かの客に会釈する。 師匠の姿や会話の概要は、フラットの魔術で偽装しているが、自分 たちの笑い声までは誤魔化していなかったらしい。

それから、

「緊急として仕方ないだろう」

憮然とした顔で、ミニ師匠が言った。

「会議が忙しくなれば、こちらの返答がなくなるかもしれんが、ひとまず五感は共有できる。こういうフィードバックを計算する機能は、もともと月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムに備わっているものだからな。私にも使い魔がいないわけじゃないが、これほどの感覚共有精度が望めないし、行動補正を細かく演算するほどの魔術回路がない。ライネスから借りるのは癪しゃくだが、最も効率的な手段である以上、採用しないのは愚か者の所業だ」

いかにも師匠らしい言い分ではあった。

「ともあれレディ。どうしてもエルメロイII世としての言葉が必要な時は、君を私の使い魔にしていることにして、そのポケットから話す。かまわないかね」

「.....は、はい。それはもちろんかまいません」

「ありがとう」

紳士的に、ミニ師匠がお辞儀する。

「で、話を戻そう。ハートレスの弟子についてだ。今回会うのは、 ゲセルツ・トールマン。魔術薬で有名な相手だ。属性は火。最近は 時計塔とあまり接触していないが、世俗ではそれなりに評価が高 い。好戦的だとの情報は入ってないが、もしも戦闘が避けられな かった場合.....」

そのほか、いくつか確認を受けたところで、バスが目的の駅についた。

閑静な地域だった。

公園と隣接した住宅地で、見かける通行人もほんの数人ばかり。

もちろん、自分の故郷に比べれば遥かに都会だが、中心部からバスでおよそ二十分も離れると、ロンドンでもこんな景色が立ち現れてくる。お隣に本物の魔術師が住んでいると、誰が思うだろう。幽霊などが大好きなイギリスの土地柄だと、むしろ評判はあがるかもしれない。

「工房はすぐ西だ」

と、ポケットの中の師匠が指示した。

歩き出すと、少し離れた公園の屋台からは、フィッシュアンドチップスの匂いがした。たいていの店でたくさんの調味料がおいてあるのだが、自分はマスタードやケチャップをたっぷり、モルトビネガーを少なめにかけるのが好きだった。頰張ると、口の中にからっとした衣と調味料が迸り、白身魚の淡くもしっかりした旨みとあいまって、何度食べても飽きない味わいを演出してくれる。

この街に来てから、覚えた香り。

師匠が教えてくれた味。

一瞬、そんな記憶を追っていると、隣を行く少年が足を止めたの だ。

「スヴィンさん?」

「いくつか、臭いが、入り混じってます」

「え」

さきほどの、フィッシュアンドチップスでないのは明らかだった。

「魔術の臭いです。青と紫の濁った感じと。元は錬金術で使う薬品で、いくつかは見当がつきますが、混じってるのはもっと新しい― 赤色というか」

眉根を寄せたスヴィンの言葉に、自分のポケットから師匠が新たな指揮を下す。

「フラット、観測を」

「オッケー教授! 干渉開始ゲームセレクト!」

師匠の言葉に従って、フラットの指がくるりと翻り、金属箔を飛び立たせる。

日本の折り紙に似たカタチだった。

はたまた、ゲームのワイヤーフレームのようとでも言えばいいのか。鳥とも蝶ともつかない魔術の結晶は、本物の生き物のごとく、 金属箔でできあがった薄っぺらい羽を羽ばたかせて、とある家の上 空で旋回したのである。

「あそこの、煙突がある家ですよね。うーん、確かに工房になって ますね……ここからハッキングしましょうか?」

「いいや、ハッキングから入って見つかった場合、正当防衛で敵対されても文句を言えないだろう。今回は、あくまで過去の恩師の話を聞くだけだ。正面から訪ねてみよう。……ただし、万が一の場合、すぐに撤退する。警戒を怠らずに」

かすかに緊張した、小さな師匠の声音に、自分もしんと体の内側 で刃が研ぎ澄まされるのを感じた。

スヴィンとうなずきあい、家の正面へと近づく。

ごくり、と唾を飲み込んでから深呼吸。

二度、ノックをする。

「こんにちは」

返事はなかった。

すぐに、もう一度ノックしたい衝動にかられたが、しばらく待った。そっとポケットの内側の師匠を庇かばうようにして、密やかに身体の内側の魔力を回す。必要なら、瞬時に『強化』して戦闘態勢に入れるよう、集中を高める。

やがて、反応があった。

特に隠すこともなく、無造作な足音。近づいてくる。

扉と壁の間で糸のような線が生まれ、ゆっくりと押し広げられる

「──はぁい、元気?」

と、その内側から問いかけられたのだ。

自分と師匠は小さく息を吞み、背後では、こちらより聴覚の鋭い スヴィンが身体を強張らせた。誰にとっても、聞き覚えのある声音 だったからだ。あまりにも忘れがたい、鮮烈な印象を自分たちに刻 みつけた相手。

フラットだけは小さく手を叩き、わあっと楽しそうな歓声をあげ た。

「お久しぶりです! え、どうしてこんなところにいるんですか! ひょっとしてハートレスさんのお弟子だったんですか! いやでもそれっておかしいですよね、年代はなんだか合いそうな気もするし、橙子さんなら掛け持ちしまくりそうですけど、おふたりの術式にそういう感じないですよね! ストリートなファイターと、バンダナの潜入工作員ぐらいは別のジャンルというか! あ、いや、意外と未来には一緒のゲームに出そう?」

「あなたは変わらないみたいね。うん、私としてはそういう態度嫌いじゃないわ。ただ、ゲーム分野は詳しいわけじゃないので悪しからず。……で、君主ロードまでずいぶん可愛らしい姿になっちゃって」

くすくすと笑ったのは、眼鏡をかけた、東洋人の女性だった。

瑞々しい肌は二十代後半ほどに思えるが、定かではない。その髪の色と同じく、赤色が似合う。純色ではなく派生色。どこかくすんだ印象こそが、彼女には似つかわしかった。

その名は、フラットの告げた通り。

冠位決議グランド・ロールと言われたときから、彼女の訪れを予期しておくべきであったか。

「蒼崎橙子……」

ポケットの中で、師匠の呻うめきがこぼれた。

冠位の人形師が、扉の向こう側で微笑していた。

*

一瞬躊躇ったが、招かれたとおりに、全員で家へと入った。

スヴィンの鼻が看破していたように、壁の棚には多くの薬品が置かれている。うずたかく積まれた壜の中にはさまざまな虫や草が漬けられており、ポケットから見やったミニ師匠が「ほう.....」と呟きを漏らした。

淹れてくれた珈琲を飲むと、橙子は小さくうなずき、こちらの質問に答えた。

「ええ、もちろんドクター・ハートレスは存じてます。私の知って る頃の、現ノ代ー魔リ術ッ科ジは彼が指揮していたもの。いまだ に、エルメロイが現代魔術科と言われても馴染みがないぐらい」

「……没落して押し付けられた結果ですからね」

「生徒たちを見る限り、結果は上々だったんじゃない?」

椅子の肘掛けに腰掛けたミニ師匠を、楽しげに橙子は見やる。

彼女自身も珈琲を飲みながら、ゆったりと木製の椅子の背にもたれかかっていた。そうした姿は、まるで探偵事務所かなにかの所長

のようだ。彼女の経歴なら、本当にそんな時代もあったかもしれない。

「で、もちろん私はハートレスの弟子というわけじゃありません。というより、あなたたちと同じ用件で、ここに来たというべきね」

「拙たちと、同じ用件ですか?」

尋ねると、にこりとしつつ、女はうなずいた。

「うん。ここは他人の家だもの。家主となんか会ったこともありませんし、もちろん了解も得てないです。珈琲もそこにあったのから 適当に選んだのだけど、なかなかいい趣味みたいね」

「ちょっと橙子さん?!」

思わずつっこんでしまった。

笑みを深めて口元のカップを傾けた橙子に対して、肘掛けのミニ師匠もまた、ぎゅっと眉根を寄せる。

「他人の工房を、すでに手懐けてるのか……」

「そんな大それたことはしてません。敵対行為をしてないだけ。何 が工房にとっての禁忌に引っかかるかは見たら分かるでしょう?」

その所業がどれほどのものか、自分には理解できない。

だいたい勝手に侵入したあげく、貯蔵していた珈琲まで淹れておいて、なお敵対的でないとか意味が分からない。

ただ、小さくなった師匠は、ひどく絶望的な顔をしていた。とっくに体力など尽き果てているのに、自分が完走しなければならない 距離を改めて確認してしまったマラソンランナーのようだった。

それから、

「……さて、本題に行こうか」

眼鏡を外すと、橙子の声が不意に低くなった。

前も同じことがあったが、その行為を境として橙子の性格は変わる。何かのスイッチのようだった。人格というよりは、社会に対す

るための仮ペル面ソナのチェンジ。いわば善悪の優先順位の切り替えだ。人間的な彼女と非人間的な彼女。そのどちらもが蒼崎橙子であり、そのどちらかが真という訳ではない。

「まあ、私の用件は消化不良というやつだ。双貌塔イゼルマでのことは十分楽しんだが、いささか残り滓かすがあったのはわかっていたからな。強制的に退場させられたし、先約を片付けてはいたが、時々暇つぶしぐらいの気持ちで追ってもいた」

ハートレスのことだ。

あの事件でも、密やかにかの魔術師は絡んでいた。事件の核となった呪体が出てきた闇オークションについて、おそらく資金を融通したのがハートレスだろうと、師匠とライネスは判断していたのである。

都合よく利用された形になる冠位人形師が、その足跡を追っていたとしても不思議はあるまい。実際のところ、利用されたこと自体を彼女が気にしているかというとだいぶ怪しいが、なるほど消化不良という言い方はふさわしいように思えた。

「で、さっきの生徒の物言いからすると、君らはハートレスを追ってきたのだろう? どこまで摑んでいる?」

「ひとまず、五人ほど弟子がいるところは」

「はん。さすが時計塔で地位があると、そういう調査は早いな。名 簿を見せてもらってかまわないか?」

「ええ。スヴィン、見せてあげてくれ」

師匠がうなずいたので、素直にスヴィンが懐のメモを取り出した。

その名前を見ると、橙子の指がすうと動いて、こう言ったのだ。

「ああ、このふたりは行くだけ無駄だ」

「どういうことですか?」

「ここの家主と同じく、行方不明だからだよ。私はもともと、別件から失踪した魔術師の話を追っているところで、ハートレスの話と

ぶつかったんだ。ああ、つまりこいつは連続失踪事件というわけだ な」

橙子の答えに、戦慄が走った。手元の珈琲の香りが、消え失せたようだった。

連続失踪事件。

魔術師たちの異能の世界から、突然現実的なミステリに放り込まれた気分。急転直下の展開が、自分の知る最高位の魔術師から伝えられたことで、口の中にいがらっぽいものが広がった。

師匠もまた、かすかに強張った声で問う。

「失踪、ですって」

「ふむ。君たちはまだそこには辿り着いてなかったか」

こちらの様子を窺いながら、橙子が言った。

「そう、驚くことでもあるまい。一般人がいなくなれば騒ぎにもなるが、魔術師はもともと世界の異分子だ。消えたところで気づかれる率は低い。まして、時計塔との接触が少ない相手ならな」

私もそうだろう、と本気だか冗談だか分からないことを付け加える。

「で、周囲の証言と工房の状況を加味したところ、ここの魔術師―ゲセルツ・トールマンは、おおよそ三日ほど前から行方不明になっている。すでに失踪したふたりを合わせて、これで三人。ハートレスの弟子の残りふたりは、私もチェックできていなかったが、この名簿を見て共通点に確信ができた。というか、残った二人はそっちでは有名人だからな。……つまり、迷宮の生還者サヴァイバーとして」

「うわ。本当ですか!」

「僕も初めて聞きましたよ、迷宮の生還者サヴァイバーの話。現代 魔術科じゃほとんど見ないですもん」

フラットもスヴィンもそれぞれに反応する中、自分はきょとんと 首を傾げてしまった。 「……迷宮って、なんのことですか?」

ふたりともが、ぱちぱちと瞬きした。

ついで、小さな師匠が、同じく小さな水銀の手を口元にあてて、 片目をつむったのだ。

「そうだな。グレイだとそこからか」

「あー、グレイちゃん、時計塔の授業は受けていても魔術師じゃな いもんね」

フラットの言葉に、つい恐縮してしまう。

「す……すみません」

「いや、私の問題だ。確かに現代魔術としてはまったく関係ないから、授業では扱わない項目だったが、君のようなものも皆無ではない」

それだけ時計塔の住人にとっては常識ということなのだろう。ますます申しわけない。

しかし、そんな自分への失望はおくびにも出さず、師匠は落ち着 いた声で口を開く。

「ミス蒼崎。弟子への説明で、少し長くなりますが、構いませんか」

「もちろん。私も一度、現代魔術科の君主ロードの講義を受けたい と思っていたんだ」

みぞおちに手を置いて、ゆったりとした姿勢で、橙子が促したのであった。

「はは、あの冠位の人形師に会ったとは」

苦笑が浮かぶのを、私も堪えられなかった。

さすがに、あの女性ばかりは苦手だった。こちらと動く論理が違いすぎる。単に根源を求めてやまない魔術師であればまだ御しようもあるが、彼女の欲望はいまいち理解できない。正直なところ、向こうのチームでなくて良かった、といま思っているところである。

「で、迷宮の説明か。それはまあ必要だな。……とりあえず、経パ路スは良好なようで何より。なかなか器用なものだな。アトラス院の思考分割さながらじゃないか」

ねぎらったつもりの私だが、兄は複雑な表情で、こちらを見つめていた。

「……わざとらしく褒めなくていい。別に人格を複数起動してるわけじゃない。こんなのは、私自身の思考を並列化しているだけで、アトラス院の思考分割とはまるで別物だ。だいたい、少々思考や行動が雑になっても、ケイネス師謹製の月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムが補正してくれるんだ。それこそ、一般人だろうがちょっと慣れればやってのける」

まあ、もちろんその通りだ。

グレイの故郷で出会ったアトラス院の院長ズェピア・エルトナム・アトラシア―おお、考えただけで寒気がする名前だな!―なら、人格構築もコミで、軽く七つほどは思考分割してのけるだろう。だからこそ限定的な未来視のごとき発言もしてみせる。

今回兄にやらせたのは、あのときの体験をもとにして、変則的な 使い魔をつくれないかという試みだった。いや、兄をふたりにすれ ば、虐いじめ甲斐が倍になるからではないかとつっこまれれば、 少々返答に窮するのだがね? そこまで話したところで、軽い慣性がかかった。

馬車が、止まったのだ。

丸く切り取られた窓から、目的の屋敷が見えた。今回はバリュエレータの別宅のひとつである。屋敷の入り口では、すでにずらりと並んだ使用人たちが、こちらを出迎える準備をしていた。

「さて、こっちも冠位決議グランド・ロール前に、根回しの会議 か」

すう、と腕を持ち上げる。

もちろん、兄上にエスコートしてもらうためだ。

渋々私の手を取った兄とともに馬車を降りて、バリュエレータの 使用人たちに屋敷を先導してもらうと、はたして応接室のソファで 見知った顔が待っていた。

「メルヴィン」

「やあ、大親友! はるばるご苦労! ロード・バリュエレータより先に顔を見たくて、ここで待ってたよ!」

メルヴィン・ウェインズ。自称兄の大親友のクズ筆頭。

相変わらず朗らかかつ胡散臭く、顔だけはいい笑みで、メルヴィンはこちらを出迎えてくれた。いつも吐血してるんだから、そろそろ死ねと思うのだが、なかなか終末おわりに至ってくれない。いや今死なれると、源流刻印を治療するあてが真面目になくなって詰むのだが、時折こっそりと祈願してしまうのはやむを得ないだろう。

「そろそろ死んでくれないか」

あ、思考がだだ漏れてしまった。

「ははは、この妹御の口の悪さは今日も格別だな! そんなところはちょっとだけママに似てるけれど、佇まいの優雅さは似ても似つかなおげろおおおおおおっ!」

私が懲罰を加えるまでもなく、相槌とばかりに吐血してくれた調 律師から身を避ける。 そのまま頭頂から踏んづけてやりたくなる衝動を堪えていると、 ハンカチで口元を押さえたメルヴィンが上目遣いに尋ねたのであ る。

「おや、どうも反応が薄いが、我が大親友たるウェイバーはどうかしたのかな? 私の心配をしてくれてもいいんだよ。さあさあ、いかなる宝石よりも気高く美しいこの関係を詠うたうための詩を編んでくれたまえ。なんなら、このままうちが経営してる病院まで付き添ってくれてもかまわないぞ!」

「別に。……あと、しれっと美しい関係とか、捏造しないでほしい のだが」

「いやいや、これは自然の理じゃないか! 百万年は前から決まっていた事実で、九年半前に確定した真実だよ! ああウェイバー、いまさらこんなことを語らねばならないなんて私は悲しい!」

大げさに身振り手振りしつつ、いかに自分が多大な衝撃と悲痛で 死にかけているのかを熱弁する自称親友から、嫌そうに我が兄は身 をもぎはなして、

「……ちょうど、講義の最中なんだ」

難しそうに、唇を引き結んだのだった。

テーブルの上に、師匠がひょいと飛び乗った。

こうしてみると、本来の師匠より、身体性能は向上しているように思う。おそらく、計算の大部分を受け持っているというトリムマウのなせるものだろう。……ちょっとだけ、うんしょうんしょと机をよじのぼる師匠も見たかった気がするけれど。

そうしてから、これも水銀製のジャケットの胸元を押さえ、口を 開いたのだ。

「……説明する前に、ひとつ講義をしよう」

サイズを確認してるのか、二度踵を踏み鳴らしてから、こう続けた。

「君は、迷宮というものをどう思う?」

「迷宮、ですか」

ぱっと頭に浮かんだのは、ギリシャ神話でも有名な故事だった。

とある王の妃きさきが、神の怒りによって雄牛に恋慕の情を抱いてしまい、子供をもうけた。牛頭人身の怪物となりはてたこの子供を閉じ込めるため、王は当時の大科学者ダイダロスに命じて、誰も出てこられない迷宮をつくりあげたのだという。

「……ミノタウロスの迷宮、とか。あの、複雑で、入り乱れていて、誰も外に出られなくなるような」

「そうだな。神話や伝説に出てくる多くの迷宮において、最もスタンダードな位置を占めるのが、かの怪物ミノタウロスを封じ込めた ラビュリントスだ。ほかにも、エジプトはアメンエムハトによる大 迷宮やエピダウロスのトロス迷宮なんかもこの類例だろう」

師匠が水銀製の頭を上下させる。

長い髪が揺れると、彼方の海のようだった。

「しかし、本来、迷路メイズと迷宮ラビリンスとは別物だ。迷路は君の言うように、複雑怪奇に入り乱れ、多くの行き止まりも設けられて、探索者を迷わせることを目的とする。しかし、これに対して、原義的な迷宮は一本道しかない」

「.....え?」

意外なことを言われて、声音に疑問符がついてしまった。

「これは図画だと顕著でね。十五世紀あたりまで、さまざまに描かれてきた迷宮画では、ひたすら曲がりくねって、脳のひだのようになってはいるものの、いずれも一本道の迷宮ばかりが描かれている。つまり、探索者を迷わせることが目的なのではなく、何度も方向転換させて、ひたすら長い道を歩かせることによって、普段の外界での感覚を取り除くことの方が目的なんだ」

普段の感覚を、取り除く。

「一本道しかないことにも理由はある。余計な脇道がないことによって、探索者は常に最奥部を意識し続けることになる。取り除かれた平常の感覚は、自然と自分自身へ向かう。迷宮をひた進むことは、つまり自分の内側へずっと潜っていくことにほかならない。ならば、彼らが迷宮の最奥で出会う怪物ミノタウロスは、死をもたらす、もうひとりの己の姿だ」

師匠の言葉に、自分は雷に打たれたみたいに、呼吸も止めてしまっていた。

だって、そうだろう。

「それって、まるで……拙の故郷の」

一本道というわけではない。

しかし、あそこの地下で最後に待っていたのは、まさしくもうひとりの自分だった。仮面をつけて、自分と同じ体で、自分と同じ 『槍』を手にして、宝具としての性能まで使いこなして、牙を剝い てきた。

「─あの故郷は、まさしく君にとっての迷宮だった」

と、師匠は断言する。

「そして、一度最奥部に至れば引き返さねばならない。なにしろ一本道だ。引き返せば、迷宮に入ってきたときの過去を踏みしめていくことになる。最奥部に至って一度死んだはずの探索者は、一歩ずつ過去を認識して再生していく。……つまり、迷宮とはただの迷路ではなく、死と再生の通過儀礼イニシエーションなんだ」



師匠の言葉が、自分の内側へ雪のように降り積もる。

自分にとって、あの故郷とはそういう場所だった。洞窟もさることながら、アトラス院の七大兵器によって再現された過去そのものへと潜り、母とともに生きて帰ってきた。なんてそれは、象徴的で、神話のような時間だったことか。

「イヒヒヒッ、ちょっと泣いてたもんなお前!」

小声で、固フ定ッ具クにひっかけられたアッドが囁いてくる。気 恥ずかしくなるので、本当にやめてほしい。

師匠が、言葉を続ける。

「こうした通過儀礼の方法論は、時代が移ると、宗教によって用いられるようになった。教会迷宮などと呼ばれるが、あちこちの宗教施設で床や壁に描かれた迷宮でね。曲がりくねった通路の重ね方で、クレタ型の七重周回および、十一重周回になってるものが多いことが特徴だ。この場合、『十一』とは十戒を逸脱してしまい、十二使徒には足りぬ不完全な罪の数。世俗を表現する数と言おうか」

テーブルに立った師匠が屈んで、自分の足元をすうと撫でる。

そんな風に、教会の床などへ迷路が刻まれていたということなの だろう。

「教会迷宮の目的は、罪の浄化だ。世俗の数である十一を採用したように、世間で生きていくことによって受けた罪や穢れと、その形象である迷宮で対峙し、死と再生の通過儀礼によって魂を浄化しようとしたわけだ。この場合、迷宮の奥底で待ち構えるミノタウロスは、誰の奥底にも眠るサタンの呼び声に読み換えるのが正しいだろう」

言葉は難しいが、なんとなくはわかる。

おおよそは、欲望とか衝動とか、そういうことだろう。誰の胸に も秘められていて、打ち明けることなどできない浅ましい欲の 数々。そうした欲望と向かい合う場所が、かつての教会における迷 宮の立ち位置だったのだ。

「同様に、魔術師も、自分の内側に迷宮を持つ。誰だろうが自分の

ことを完全に解き明かすことなどできず、だからこそ、この精神の 迷宮から、より多くのなにかを汲み出すことができた者こそ、有能 な魔術師となりえる。汲み出すだけの才能があれば、だが」

そう言って、密やかに唇を嚙んだのが師匠らしかった。

人によっては滑稽と言うのだろう。自分にとっては、少しだけ哀しかった。師匠はどんな気持ちだろうか。

「─なるほど、これがエルメロイ教室の授業か」

隣で聞いていた橙子が、楽しげに片眉をつりあげる。

「基礎的な話ばかりで申し訳ありません」

「いやいや、丁寧でいい授業だ。私たち魔術師は、うかつに神秘そのものに触れられてしまうからね。その背後に横たわっている歴史ももちろん学んでいるが、歴史と魔術の概念を結び合わせることについては、つい怠りがちだ。なるほど、そういう授業を受けているなら、ほかでは扱いきれない生徒でも成長するだろう。無論、教師によってはなんという無駄な時間を、と怒るものもいるだろうがね」

その言葉に何の裏もないことが、自分には恐ろしかった。

だってそうだ。冠位グランドたる彼女からすれば、時計塔の高位の魔術師も、才能の欠如に苦しむ師匠も同じことだろう。どちらも彼女より劣っていることに違いはない。だからこそ、蒼崎橙子は透徹した視点で、師匠の講義を見つめている。

こほん、と咳払いの音がした。

テーブルの師匠だった。この体で咳の必要があるとは思えないから、こちらの注意を引きずり戻すための音だろう。申し訳なさを感じつつ振り向くと、師匠は小さくうなずいて、軽く踵を鳴らす。金属と木材が相打つ、硬い音がした。

「だが、今は形而上の話ではない。もとより、時計塔には名高い迷宮があるんだ」

「ええと、それが、さっきから言っている、生還者サヴァイバーが出たという?」

ようやっと、話が中核に進むのを感じた。

長く彷徨っていた地底で、遠くに光を見たかのような。

しかし、

「いや、順番が逆か」

と、師匠は訂正したのだ。

「逆?」

「ああ。この迷宮ゆえに、時計塔がここにつくられたと言ってもいい」

その言葉の意味が、すぐには分からなかった。

自分の頭脳の程度に少なからず失望しながら、改めて訊いてみる。

「どういうことです?」

「西暦に入り、神代の魔術は失われた。真なる古き魔術は世界から 姿を消し、地上にはかりそめが残された」

以前、そんな話を聞いた。

本来の魔術からすれば、現代のそれは抜け殻みたいなものだと。 西暦以降と以前の神代では、絶対的にかけ離れており、比較にもな らないのだと。

だからこそ、フェイカーは恐ろしかった。

英雄イスカンダルが駆け抜けた時代の、古き魔術師のサーヴァント。

あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの戦いでも、たったひとつでも彼女に魔術を行使することを許せば、そのまま全員が殺されるという恐怖があった。

「だが、時計塔の地下―いいや、ロンドンの地下には、いまだはかりしれぬ、巨大な神秘の亡なき骸がらが眠っている」

床を指差して、師匠が言ったのだ。

「亡骸、っていうと」

「もとより、地下は、地上に比べると人智による人類版図テクスチャの影響が弱い。だからこそ地表ではすでに失われてしまったものの欠片が残っている。だが、そんな言葉では到底言い表せないほどの品々が、時計塔の地下には埋まっているんだ」

落ち着いた師匠の言葉の底に、ひどく恐ろしいものが潜んでいる 気がした。

それこそが地下に埋まった秘宝であるかのように、自分の耳には 聞こえたのだ。

「それは、その、迷宮に、ですか」

「そうだ。たとえば竜種の牙や鱗、たとえば失われた霊石、たとえば琥珀に閉じ込められた死せるヒドラの幼生体、今となっては地上ではほぼ得られない呪体だらけだ。かの迷宮こそは時計塔の屋台骨を支えていると言ってもいい」

「うーん、ハック&スラッシュ! やっぱりウィザードリィはRPGの華ですよ! キャラは即二ンジャになれるぐらいの初期ボーナスまでつくりなおすし、デーモンは何十体でも養殖するし、最強の魔術師は営業時間書いて、お部屋で待っててくれないと!」

フラットが、嬉しげにガッツポーズを取る。

なんとなくそういうことだろうと、自分も察していたが、口に出されるとやはり衝撃的ではあった。なるほど師匠も言うように、そんな迷宮があるからこそ、時計塔がロンドンにつくられたのだというのも理解できる。

しかし、根本的なところが謎のままだった。

「……なんで、そんな迷宮がロンドンの地下に?」

Г......

少しの間、師匠は黙り込んだ。

いつも立て板に水といった印象の強い師匠だが、今回はどこから 話したものか、迷っている雰囲気だった。

それだけ話しにくいことなのだろうかと思っていたら、やがて師 匠がゆっくりと口を開いた。

「時計塔の迷宮を知る者でも、こちらは知らなかったりするが…… ひとつ、古い伝説があるにはある」

重々しく、興味の惹かれる言葉だった。

時計塔の伝説。そもそも本人たちが神秘に生きている魔術師たちが、長い時を経て囁き交わす伝承とは、一体どんなものだろうか。

しかし、その切り出し方は、思いもかけない方向だった。

「古代において、とある巨大な竜種が存在した。かの威容は山より も大きく、爪の一本ずつが塔ほどもあったという」

「.....え?」

突然、夢物語を聞かされたみたいで、瞼を何度も閉じたり開いたりしてしまった。

地下に迷宮がある……までは、なんとなく吞み込むことができたが、なぜそこで、突然古代やら巨大な竜種やらの、非現実的な単語が出てくるのか。

「あの、師匠? いまは迷宮の話だったんじゃ」

「いいから聞きたまえ。これは時計塔に伝わる御お伽とぎ話ばなしのようなものだが、少なくともある程度のカタチは現代にも残っている。ああ、神秘の名残を手にした君にとってさえ、馬鹿馬鹿しい子供だましと思えるかもしれないが」

気まずそうに咳払いして、師匠は言葉を続ける。

「多くの竜種は神代の終わりを察して、幻想が失われる前に世界の 裏側に移動した。しかし……その巨大な竜種はこちらに長く留まっ た。自分ほど強力な竜であればあるいは、と考えたのかもしれない し、もっと別の理由が彼にはあったのかもしれない」 炎を前にした語り部にも似て、竜が語られる。

彼と呼んだのは、何か共感するものがあったからだろう。それが 失われゆく神秘へと傾倒した魔術師としての本能ではないか、と考 えたのは、いささか穿ち過ぎだろうか。

「だが、回り始めた世界のうねりは、ついに巨大な竜種でさえ屈服させた。もうここは人間の世界だ、と受け容れた竜はようやく世界の裏側へ移動しようとしたが、機を逸した。すでに神秘の薄まった地上では『世界の裏側』に抜ける孔あななんて開きようがなかったんだ。

竜は自らの傲慢さに咆吼した。それでもなお絶望も諦めもしなかった。神秘による転移ができないのなら、物理的に移動する、と。その巨体を使って、いまだ神秘を残し続けている地底へと潜っていった」

講義というよりも、やはり御伽話のように聞こえた。

それも、どこか物悲しい類のそれだ。

なんとなく、恐竜を想像してしまったのも、無理からぬことだろう。この地上で繁栄し、あるいは生態系の頂点さえ恣ほしいままにして、しかしあまりにもその時代に適応しすぎたがため、消えていった生物たち。

あるいは、自分だって、それと同じようなものかもしれないけれ ど。

「しかし」

と、師匠が口にした。

「しかし、竜種は地下に潜る途中で息絶えたんだ」

「それで、どうなったんですか」

「どうもこうも。……結果、地中には死体がまるまる残ったんだよ。ひとつの山にも匹敵しようという巨大な竜種の死体がね。やがて、この死体は地中のうねりによっていくつにも引き裂かれ、もとより巨大であった竜種の身体をなおさら大規模にした迷宮となった」

「迷、宮……」

やっと、最初の話とつながった。

茫然と呟いた自分に合わせて、師匠が続けた。

「時計塔の地下のさらに地下。かの大迷宮の名を、霊墓アルビオン と呼ぶ」

幕。

その言葉を聞いた途端、総身に震えが走った。故郷の事件で、あれほどに因縁を振り払ったと思った単語が、こんなところで舞い戻ってくるとは。

しかし、それだけで吞み込むには、あまりに荒唐無稽な話でも あった。

いままでだって、何度となく信じられないような目に遭ってきたし、そうした現象に立ち向かってきたという自負も、少しぐらいは持っている。だが、今回ばかりはとどめをさされた趣があった。

「.....あの」

と、やっとのことで、口にした。

「あの、まさか、その霊墓アルビオンが、拙たちの足下にあるって いうんですか?」

「言ったろう。御伽噺のようなものだと。だが、伝承の真偽はともかくとして、現在に残ったカタチは存在する。巨大な迷宮──いや、もはやひとつの新世界と言ってもいいだろうが──は私たちの足下に実在して、今も時計塔に莫大な利益を生み出している」

師匠の言葉が、薬品の並んだ部屋に、淡々と響く。

ここも魔術師の工房とはいえ、晒された言葉に比すれば、あまり に凡庸な舞台だった。あるいは、だからこそ相応しかったかもしれ ない。おそらく、一定以上の時計塔の魔術師にとっては、すでに親 しんできた、常識的な事柄なのだろうから。

「一ふふ、実に荒唐無稽だろう」

聞いていた橙子が、混ぜっ返すように唇の端を吊り上げる。

「私も最初に聞いたときは啞然としたものだ。そんなものが存在しておいて、神秘は現世から後退したとか言われても困る」

「僕も、竜の遺骸について知らされた時は戸惑いました」

これは、スヴィンが感想を口にした。

自分のそれと近かったことに、少しだけ救われた気もした。この ふたりにとってさえ驚愕に値するなら、自分がすぐさま受け容れら れなくても仕方ないだろう。

「俺は信じてましたよ! だって時計塔ですよ? 金持ちのお屋敷の地下にだって謎のダンジョンがあるぐらいなんですから時計塔に無い方がおかしいじゃないですか! 閉まる扉! 謎の金庫! もんすたあさぷらいずどゆう!!」

「よし、いいから黙れフラット。──今言った通り、霊墓アルビオンから得られる利益は莫大だ。だから、時計塔では、この迷宮からさまざまな呪体を発掘・管理するため、専属の組織をつくっている。十二家のどこかが迷宮の利権を独占して、圧倒的な優位に立つのを防ぐための、完全に独立した運営組織だ」

突然、利権だとか独占だとか、話が現実じみてきた。

まるで、ジェットコースターだ。あまりに幻想じみた単語と、地 に足をつけすぎた単語が、ワルツみたいに腕を組んで、くるくると 回っている。

なんだか目眩までしてしまって、自分はそっとフードの上からこめかみを押さえた。

「ちょ、ちょっと待ってください」

「どうかしたかね」

「いえ、その、うまく、咀嚼できなくて.....」

正直なところを、自分は打ち明けた。

自分の出来の悪い頭には、いささか情報量が多すぎた。それも、

単に多いというだけでなく、情報の組み合わせが特殊かつ複雑で、うまく整理できていない。

「なるほど」

と、師匠はうなずいた。

「だったら、図にしてみよう。スヴィン、授業でもやっただろう。 あの図をもう一度書いてみたまえ」

「あ、わかりました」



管理

霊墓アルビオン

・採掘都市マギスフェア

大魔術回路 (静脈回廊オドベナ)

古色心服

一天文台カリオン



と、スヴィンが懐から万年筆を取り出した。

まず、最初に霊墓アルビオンと名を書いた。迷宮の概略図として ピラミッドをふたつ合わせたような菱形の図形が描かれ、さらに内 部もいくつかの層にわかれているらしくて、区分けした線のそばに 名前があてはめられていく。浅い方から採掘都市、大魔術回路、古 き心臓、天文台......というように。

そして最後に、図解の上部に、さきほど聞いた組織の名が書き込まれた。

秘ひ骸がい解かい剖ぼう局きょく、と。

「これが……霊墓アルビオンと、その迷宮を発掘するための組織ですか」

「そうだ。秘骸解剖局が、迷宮における一切を取り仕切っている。 たとえ貴族主義派第一位のバルトメロイだろうが、民主主義派第一 位のトランベリオだろうが、彼らの采配に口を挟むことはできな い。ある意味、時計塔に属しているが、時計塔ではないと言っても いい。だから、君が時計塔に半年ほど通いながら、知らないまま過 ごしてきたとしても責められるところではあるまい」

時計塔にありながら、時計塔ではない。

十二家のいずれにも与くみさない、迷宮専門の組織。まだきちんと理解できたわけではないが、それがいかに重要なものかは、なんとなく分かってきた。

「じゃあ先生。……この工房の魔術師が、霊墓アルビオンの生還者 サヴァイバーだというのは、どういうことになるんです?」

書き終わったスヴィンが尋ねる。

やっと、話が最初に戻ってきた。あまりに前提となる説明ばかりが多く、はるばる旅をしてきた趣すらあって、つい大きくため息をついてしまった。

時計塔の大迷宮・霊墓アルビオン。

ハートレスの弟子たちが、皆、その迷宮の生還者サヴァイバーで

あるという橙子の証言。

そのことが、一体どのような真実へと繋がっているのか。

ごくり、と唾を吞み込む。

しかし、そのとき、テーブルの上の師匠がむむ、と唸りをあげた のだ。

「師匠?」

「すまない。どうやら、向こうの準備もできたらしい。少し、集中 させてもらう」

そのまま、水銀製の小さな師匠の表情が消えて、電源の切れたロボットみたいに沈黙したのである。

「......講義は終わったのかな?」

私が尋ねると、兄は不服げに視線をあげた。

いささか顔色が悪いのは、それだけ向こう側の体に集中していたからだろう。

乗り物酔いみたいなもので、遠隔の使い魔と五感のメインどころを入れ替えた際には発生しやすい。もちろん一定以上の魔術師なら慣れたものだが、我が兄にそんな耐性がつくほどの経験があるはずもない。

「終わってはいないが、バリュエレータの準備が整ったとなれば、こちらに戻らざるを得ないだろう」

「忙しいみたいだねえ、ウェイバー」

ぬけぬけとメルヴィンが言う。

もちろん、バリュエレータについて伝えて、兄の体を揺さぶった のは彼である。使い魔酔いからの回復を待とうなんて、殊勝な素振 りはさっぱり見せず、

「さ、行こうか」

と、形の良い顎をしゃくって、屋敷の廊下へと歩き出した。

それを見やりつつ、しゃがみこんだままの兄へと尋ねる。

「大丈夫かね、我が兄」

「問題ないとも。君だって、いちいち待ってくれたりはしないだろ う」

「ふふ。私は、大事な兄に無理はさせたくないと思ってるよ? ほんのちょっぴり苦しんでる顔が好きなだけの、可愛い可愛い義いも

妹うとだからね?」

「……友達を大切にしたいなら、その性格は早く直せ」

「んむ」

余計な反撃を覚えたものだ。だいたい、いまさら直るような性格 じゃないのは兄が一番よく知ってるだろうに。

そんな文句を飲み込みつつ、トリムマウと一緒に、私たちもメルヴィンの背を追った。

廊下の壁には、さまざまな絵画がかかっていた。

いくつかは私の知識にもあるような名画で、主人の権勢をまざまざと見せつける代物だった。当然すべて本物だろう。バリュエレータは創造科を治める家だけあって、芸術を愛し、いくつも美術館を経営している。成金的な不自然さなど皆無、むしろ絵の流れや揃え方が、こちらの審美眼を試してくるようで嫌らしい。今回の場合は、ルソーの小品など、バルビゾン派から印象派までを押さえた配置ということだろうか。

やがて、一際立派な扉の近くで、メルヴィンが足を止め、振り 返った。

「ところでウェイバー」

「なんだ?」

「もちろんわかっていると思うが、民主主義の多数は、不確定要素のエルメロイ派を排除したいと常々思っている。なにしろ十二家中十二位。この際取り潰してしまってもさほど問題のない家だからね」

悪びれもせず、潰されそうな家の君主ロードへ、にこにこしながら言ってくる。

「ただ、バリュエレータは別だ。なにしろ、君はロード・バリュエレータのお気に入りだからね」

Г......

メルヴィンの言葉は、私にとっても実に重かった。

気に入られているというのが、別にいいことだけではないからだ。仮にも貴族主義であるエルメロイの君主ロードが、民主主義のバリュエレータの君主ロードから贔ひい屓きされているなどというのが、聞こえがいいはずもない。ただでさえ、味方の貴族主義からは侮られているわけで、むしろ一触即発の爆弾も同然だ。……もちるん、そんなことなど重々承知の上で、バリュエレータはこっちに誘いをかけてくるし、メルヴィンも楽しげに話しかけてくるのだから、どっちも私と同じぐらいいい性格をしているな。

兄はずっと難しい顔で、胃のあたりを押さえたまま、尋ね返す。

「そんな分かりきったことを、言いたいわけではないだろう」

「ああ、もちろんさ。だけど君の綱渡りも、ずいぶん突き詰まったところまでやってきただろう? 貴族主義には受け容れられず、さりとて民主主義や中立主義になびくわけでもない独立独歩の地位なんて、本来長くもつものじゃない。おかげでね、ちょっと前からママが気にしているんだよ」

「母上か」

「そうそう。だから、君らのことを売り飛ばしたぞ」

「.....は?」

「何を言ってるこのクズ!」

思わず、私の方が反応してしまった。

筋金入りの人間のクズを汚泥で煮しめたような相手だと常々思っていたが、まさか兄を売り出すとは。

すると、対するクズは大いに肩をそびやかして、

「はは、安心したまえ。大親友の君のチップだけを売ったりしない。私のこの首も綺麗に賭けてきたからね。けふっ!」

小さく咳き込み、再び口元にあてたハンカチーフを赤く染めたものである。

その合図とともに、使用人の手で、扉が開かれる。

広い応接室には、似つかわしい紫し檀たんの長卓が配されていた。すでに屋敷の主人はその一席に座っており、皺だらけの手をあげた。

「よう、エルメロイの」

「おひさしぶりです。ロード・バリュエレータ」

「おいおい。そいつはご老人とは時間感覚が違うんだぞって嫌みの つもりか? たかだか数ヶ月ぶりだろ?」

鮮やかに、老女─イノライがウィンクしてみせる。

手元には灰皿も置かれていて、その指には煙草が挟まれている。 部屋に広がる香りからすると、ハーブ系の品だろうか。

だが、問題となる相手はその奥だ。

長卓で、イノライと同じ側の席に、もうひとりの人物が座っていた。私の頭は一瞬真っ白に染め上げられ、兄の目はすうと剝きあげられた。

「.....まさか、あなたまでいらっしゃるとは」

「ははは、ロード・バリュエレータから君たちの話をよく聞いていてね。あつかましくもメルヴィンくんに口を利いてもらったんだ」

筋肉質の男だった。

外見から想像できる年齢はおおよそ四十半ばから五十ほど。もっとも魔術師にとって、容貌から年齢が推し量れるかというと、かなり怪しい。身を押し包んだスーツは間違いなくフルオーダーで、上質の生地を肩や背中の盛り上がった線に見事に沿わせている。

今回の場合、私たちが絶句したのには、別の理由があった。

「……マグダネル・トランベリオ・エルロッド」

かろうじて、兄が名を呼んだ。

そう。

トランベリオ、だ。

(……民主主義派第一位・トランベリオの君主ロードだと……!) 瞬時に、私の喉は干上がった。

→ 第三章 →



貴族主義派第一位・バルトメロイ。

民主主義派第一位・トランベリオ。

時計塔において、最も権力を握っている組織はどれかと問われれば、このどちらかとなるだろう。もちろん、創立時より栄えある伝承科のブリシサンや、中立主義のトップであるメルアステアにもそれぞれの強みはある。だが、至極単純な権勢において先のふたつを凌ぐかと言われれば、その答えはノーだ。

トランベリオ。

魔術協会の『方向性』そのものを決定してしまう、三大派閥の頂点のひとつにして、三大貴族の一角。学科においても第一科・全体基礎ミスティールを支配する、押しも押されぬ時計塔の重鎮。

その君主ロード―マグダネル・トランベリオ・エルロッドが、目の前に座っていたのだった。

「メルヴィンくんも、僕のわがままを聞いてくれてありがとう」

にこやかに、壮漢マクダネルは笑いかけてきた。

実に爽やかな、政治家向きの笑顔だった。テレビCMあたりに出てくれば、これ見よがしに白い歯を煌めかせそうだ。存在感がありすぎて、瀟洒なバリュエレータの応接室では、縮尺がおかしく感じられてくる。

「いえいえ、ママとマグダネルさんの両方にお願いされては断れません。我が親友にとっても、悪いお話じゃないでしょうから。なあウェイバー?」

「もちろん、お会いできて光栄です」

粛々と頭を下げた兄についで、私もかなうだけ丁寧にドレスをつ

まみ、片足を斜め後ろに引いて、お辞儀カーテシーを行う。家庭教師にさんざっぱら仕込まれたマナーは、こちらの精神状態などおかまいなしに、今回も正確な動作をしてくれた。

「ライネス・エルメロイ・アーチゾルテです。兄の付き添いで、私 も参加させていただきました。お目汚しをお許しください」

「ははは。ふたりとも気楽にしてくれ。聞いた限りでは、アトラス院の院長とも友ゆう誼ぎを結んだんだろう? 今更、たかが一君主ロードである僕なんかに緊張することもあるまい」

(よく言う)

苦虫を嚙み潰したような顔にならぬよう、堪えるのに苦労した。

確かに、立場だけでいえば、アトラス院の院長は時計塔そのもののトップにも匹敵する。ロード・トランベリオーマグダネルはその部下ぐらいの位置になるだろう。

だが、それは現実社会における位置ではない。

考えてみればいい。

いかに権威があれども、アトラス院は、時計塔との関係が薄い別 組織に過ぎない。

対して、トランベリオは直接の上司にも等しい。この場合は、対立派閥の長と言ったほうが正確だろうか。いずれにせよ、向こうは、気まぐれひとつでエルメロイ派そのものを押しつぶせるほどの大権力者。それがわざわざこちらを招いてきたとあっては、緊張せずに対峙できるはずもない。

(.....もうひとつ)

もうひとつ、今のは「アトラス院のことも知ってるぞ」という念押しだ。

情報において、どこまで摑んでるかという武器をチラつかせてき たわけである。

ついで、ちら、と兄の頭から靴先までを見下ろして、陽気にマグダネルは言う。

「しかし君、相変わらず軽装だね」

言葉通りの意味とは、少し違う。兄の装いはコートと暖かそうなマフラーで、冬のロンドンでも問題なく、それなりのフォーマルな場でも通る程度の品で固めている。

指しているのは、魔術師としての装備だ。

君主ロードやそれに準ずるような魔術師ならば、常に霊的・物理 的な危険から身を守るための礼装を多数準備している。高位の魔術 師であることは、ほぼ同時に誰からいつ狙われてもおかしくないと いうことだからだ。あまりに多重の強大な礼装を持ち合わせ、単身 で要塞に匹敵するとまで言わしめた魔術師も存在するぐらいだ。

無論、兄も私に分からないような礼装のひとつやふたつぐらいは 持ち合わせているのだろうが、時計塔の重鎮からすれば、考えがた いほどの軽装なのは確かだった。

「あなた方のような一流を前に、少々小細工を施したところで、どうなるものではありませんから」

「ははは。だからって、ライオンの群れの前に、オモチャのピストルを持って出てくるかね? その自信がどこから来ているのかは僕も知りたいな。うまくいくようなら、模倣させてもらおう」

目を輝かせて、マグダネルが賞賛する。

厄介なのは、これが半分だけ本気ということだ。

時計塔は陰謀の巣窟だ。いついかなるときにだって、複雑怪奇な 権謀術数が張り巡らされ、どんな間抜けが罠にかかるかと、誰もが 舌なめずりして待っている。

だが、恐ろしいことには、そこに善意や敬意がないわけではないのだ。人々の親愛も、魔術への情熱も取り込んで、陰謀や権力劇の糧とするからこそ、時計塔の夜はいつまでも続くのである。

ましてや君主ロード。

ましてやトランベリオ。

ほとんど、現代の時計塔の象徴と言うべき相手を前に、私は小さ

く息を吸った。

(.....私もそのひとりだからな)

否が応でも、そのことを考えさせられる。

生まれたときから、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテもそうした陰謀劇の登場人物として組み込まれていた。本来なら早々に退場するか、一族の隅で密やかに飼い殺されていただろう身の上が、こんなところまで来たのはいささかの幸運と才覚によるものと自負しているが……今回ばかりは、相手が悪い。

さきほどのアトラス院のことからすれば、どんな醜聞が続けて出てくるか、知れたものではない。正直、兄は君主ロードとしては限りなく真っ白だが、対する私は真っ黒という自負がある。叩けば埃ほこりが出るどころか、触れただけでどす黒い煤すすを撒き散らす勢いだ。

無論、それなりに隠蔽工作は徹底してるつもりだが、トランベリオにそれがどこまで通じるか……通じなかったなら、一体どんな方法でくぐりぬければいい? ことによったら、ここで民主主義派に乗り換えてしまうことも考慮に入れてしまった方がいいのか? いいや、それではこれまでずっと打ち続けてきた政治的な布石が、逆に私の方へ牙を剝くことだって……

「……レディ、落ち着きたまえ」

と、兄が囁いたのだ。

ついさきほどまで、みっともないぐらいに動揺していたのに、今のその眼差しは誰にも消しきれない光を宿していた。

(.....まったく、不利な立場ほど慣れてるらしい)

私も、思わず呆れてしまった。

つまりは、ドブネズミのごとき根性だ。どうせー流魔術師相手なら、誰と戦っても殺されるのは当たり前。だったら、とっておきの相手が出てしまった方が、かえって肝も据わるらしい。

軽く肩をすくめて、私は同じく小声で返した。

「……ずっと落ち着いてるとも。悪巧みはいつだって絶好調だから任せたまえ」

「……もちろん任せるとも。私ひとりでは、すぐに生徒ごと溺れ死ぬ。この命は君に委ねるしかない」

これを殺し文句のつもりで言ってないのは、本当にどうかと思うがね? いつか生徒に後ろから刺されることも覚悟したまえよ、我が愛しの兄上。

使用人が引いた椅子へと座り、兄は対外向けの笑顔をつくりあげた。

「しかし、これでは、もはやこの場が冠位決議グランド・ロールのようですね」

「いやいや、事前に、意見の取りまとめは必要だろう? 会議は踊るされど進まずでは、あまりにもったいない。時は金なりタイムイズマネーというやつだ。新世代ニューエイジに絶大な人気を誇るロード・エルメロイの意見は是非聞いておきたい」

器用に片目をつむり、マグダネルは鷹揚に手を広げてみせる。

「で、今のは冠位決議グランド・ロールの開催についてはもう摑んでるということだね。さすが耳が早い。正式な通達はもう少し先になるはずだったんだけど。うん、君たちのコネクションは実に興味深い」

「ロード・トランベリオ」

と、近くの椅子から、声があがったのだ。

「あんまり前置きばかりで話が先に進まないが、これはオレにさっさと帰れということかな? 時は金なり、が聞いて呆れるぞ」

「いや、すまない。つい楽しくなってしまってね。それに、今日は 食事をしながらゆっくり話そうということだったんだから、これぐ らいいいだろう?」

獅子を思わせて、壮漢は快活に笑った。

そのまま使用人に合図しつつ、こちらに向かって説明する。

「今言ったように、今日は僕のわがままで、料理人を連れて来させてもらった。まあ、ふたりともゆっくり食べながら話そうじゃないか。ロード・バリュエレータも健啖家ぶりは変わってないだろう?」

「料理は現代が生んだ美のひとつだからな。まともに食えないようになったら、魔術師も引退さ」

「ははは、頼もしいパートナーに去られてはたまらない」

穏やかさと真剣さをミックスした口調で、マグダネルが肩をすくめる。

着席した兄と私を、ふたりの君主ロードの視線が捉えた。

なお、メルヴィンは私たちをここに通した段階で役目は果たした とばかりに、長卓の手前にちょこんと座っている。

(......手札が足りない)

冠位決議グランド・ロールのことすら知らない、という最悪の初 手は免れたものの、ここからどう展開したものか。

私たちが押さえているのは、三つだけだ。

なんらかの形で、ハートレスが関与している可能性が高いということ。

そのハートレスの弟子が、連続で失踪事件を起こしているということ。

そして、蒼崎橙子の発言によれば、それらの弟子は時計塔地下の 大迷宮──霊墓アルビオンの生還者サヴァイバーであるということ。

(......最低でも、もうひとつは手札がいる)

相手から情報を引きずり出すために、取引材料や囮おとりとなる 手札。ハッタリだけで引き出すことも不可能ではないが、さすがに このふたり相手では厳しい。

「ライネス」

と、兄が囁いた。

「向こうの情報収集と、こちらの会議を同時にやるぞ」

同時に、兄の瞳がかすかに集中を欠くのを感じた。

こちらのテーブルで最低限の会話をこなしつつ、向こうの現場で 細やかな情報収集をやるとすれば、いくらトリムマウが補助したと ころで、兄の脳は焼け付く寸前まで迫られるだろう。

「……やれやれ、困った兄だ」

呟くと、なぜだか闘争心が湧いた。

使用人の手でシャンパンが運ばれてくるのを確認しながら、私は可能な限りの時間稼ぎわるあがきをする決意を固めた。

ハートレスの弟子の工房で、自分たちはそれぞれに調査してい た。

フラットは、なんとなく橙子の言っていた──工房を敵に回さないやりかたというのが分かるようで、「ああなるほど。こういうことか!」などとひとりで相槌を打ちながら、スヴィンと一緒にあちこちを見て回っている。

橙子は、のんびりと珈琲を飲みながら、時々こちらの質問に答えてくれていた。魔術師にしてみれば基本的なつまらない質問ばかりだと思うのだが、律儀に返してくれるあたり、師匠と性根が似ているところがあるのかもしれない。

「つまり、霊墓アルビオンは、ある種の魔術師にとって、最後の チャンスなんだ」

と、橙子は語る。

「たとえ新世代ニューエイジだろうが、貴重な呪体を大量に手に入れれば、成り上がれる可能性がある。政治的な方面はもちろんのこと、呪体を使いたい放題に使えるなら、いささか魔術回路で劣っていても、新たな術式の研究で成果をあげられるかもしれないからね。

しかし、秘骸解剖局も簡単に人の出入りを許すわけじゃない。発掘できた呪体を、うかうかと密輸されてしまうリスクも増えるわけだから。このため、特別な許可を受けた者か、内部組織のスタッフでもなければ、一度迷宮に潜れば出ることはなかなか敵わない。なにしろ、霊墓アルビオンにはそこで生活するための採掘都市まで完備されているんだ。まあ現代の魔術師の奴隷制度にも等しいんだが」

たとえば、それはゴールドラッシュの発掘者に似るだろうか。

黄金が採れるとの噂を聞きつけ、新大陸のカリフォルニア州へと

集まってきた三十万もの人々。しかし、同時にゴールドラッシュで 一番儲けたのは彼らにつるはしなどの道具を売りつけた商人たちだ という話も思い出された。

「生還者サヴァイバーというのは、そんな霊墓アルビオンで呪体を 発掘し、地上に出てこられた者の総称だよ。正規に任期を終えた者 にせよ、金を積んで任期を縮めてもらった者にせよ、ごくごく少数 しかいないがね」

「ここの工房の魔術師も、そうだったんですか」

「ああ、金を積んで任期を縮めた方だね。以来、時計塔とは距離をおいていたはずだ。同じロンドンにいても、別に挨拶しなきゃならないわけじゃない。もっとも、私ならそんな窮屈な生活は真っ平御免だが……と」

橙子の視線が、テーブルへと向けられた。

ふっ、と水銀製の師匠が息を吹き返し、きょろきょろと周囲を見回したのだ。

「師匠」

「おやおや、会議とやらは良くなったのかな?」

橙子の質問に、ミニ師匠が眉間の皺を深くする。こんな表情ひとつまで丁寧に再現してるあたり、トリムマウの演算能力を褒め称えるべきなのだろうか。

「まったく良くなっていません。だが、こちらの話も同時に聞く必要が出てきました。申し訳ないが、いささかお時間をいただいてもかまいませんか?」

「これはずいぶん忙しそうだ。一体どんなことかな?」

興味津々といった風情で、橙子が身を乗り出す。

「まず、生還者サヴァイバーばかりが、ハートレスの弟子というの はどういうことですか?」

「さて。私も君の名簿を見て、生還者サヴァイバーという確信を 持ったところでね。ただ、残るふたりについては以前話を聞いたこ とがある。確か、迷宮に潜っていた頃は、同じチームだったんじゃないか?」

「同じチーム.....」

切迫した師匠の表情に、自分も質問は避ける。

だが、なんとなく意味は分かった。言葉通り、発掘のためのチームのことだろう。ハートレスの弟子たちが、かつて霊墓アルビオンでチームを組み、呪体の発掘に挑んでいたというならば、偶然とは思えない。

だが、そこにどんな意味がある?

「ここの壜の中身にも、地上では珍しいものがいくつもあります ね」

棚に並んだ壜を、テーブルの上から師匠が睨ねめつける。

沈んでいるのは、牙のようなカタチの化石だったり、見たこともない発光する結晶だったり、さまざまだ。ただ、詳しいところは分からなくても、それらの壜から、ただならぬ魔力の気配を感じるのは確かだった。

橙子も、そっとうなずく。

「まあ、まず間違いなく迷宮アルビオンから持ってきたものだろうが……ふむ、そうすると疑念はあるな。自分の発掘した呪体を自分で買い上げることも可能だが、それではなおさら巨額が必要になる。任期を縮めるのと同時には難しいだろう」

橙子が呟き、師匠がしばし間をおいて、結論に辿り着いた。

「……つまり、霊墓アルビオンに、密輸の可能性があると? ハートレスが、それを手に入れていた可能性も?」

「なるほど、それは面白い仮説だ。彼は君主ロードではなかったにせよ、メイン学科の汚職としては実に楽しい。というか、今の現代魔術科の君主ロードが、私のいる場で、そんなことを話してよかったのかな?」

「どうせ、こんな推論はすぐに辿り着くでしょう」

「はは、なるほど。それは理屈だ。とはいえ、割り切りすぎなのは、人によっては警戒されるから考えものだがね? 君は一足飛びに成果を求めすぎるきらいがないかな?」

「……私ごとき凡人では、割り切って一足飛びでなければ、追いつけないからです」

誰に、追いつけないのか。

それを師匠はけして口にしようとしなかったけれど、あまりにも 本音が剝き出しになった台詞に思えた。

そんなときだった。

突然、小さな爆発音が聞こえたのだ。

「フラット! スヴィン?!」

はっ、と師匠が振り返る。

自分も、咄嗟にアッドを解放すべく、右肩の固フ定ッ具クへと触れていた。

はたして、奥の部屋の扉からぶすぶすと煙があがってきて、

「─あ、教授! 工房のハッキング成功しました!」

煤で顔を汚したフラットが現れ、水兵さんよろしくばしっと敬礼 したのである。

「お前は! 勝手にそういうことをするなと言っただろうが!」

「いや、ほら、ル・シアンくんが多分このへんが工房の中心だなって、鼻をくんくんやるからつい!」

「待てフラット! だから触らないようにって忠告したはずなの に、そこを飛ばして思い切りなすりつけるな! というか、ル・シアン犬って言うのやめろ!」

後ろから、ごほごほと咳き込みつつ出てきたスヴィンも抗議する。

「だって、目の前に良さげなパズルゲームがあったら解いてみたく

なるでしょ! 壁に焼き付いてた術式の影を追うだけでも面白かったし、ちょっと試してみたかったし。……あ、でも、誰かが先にこの工房をハッキングしてたみたいで、結局中核の術式に触れただけで自壊しちゃったんですけど」

「.....誰かが、すでにハッキングしていた?」

師匠の口調が硬くなり、橙子がかすかに目を細めた。

くいと形の良い顎をしゃくって、彼女が質問したのである。

「君、術式の影って、どういうことだい?」

「はい! ええと、ル・シアンくんの言ったところを観察していると、術式の跡が壁とかに焼き付いてたんで、それを追っていたんです。ほら、シャドウアートってあるじゃないですか。ぐしゃぐしゃのワイヤーに光をあてると、影が犬とかりんごとかのカタチになったりするやつ。橙子さんが工房の禁忌なんて見たら分かるでしょって言うから、つまりあの影みたいなものかなと思ってみたら、うまくいっちゃって!」

「……ああ、君はあれか少年。設計図なしで人形を作れるタイプかと思っていたが、人形を見て設計図を逆算できるタイプだったか」

納得半分、呆れ半分といった感じで、橙子が肩をすくめる。

フラットの説明は、なんとも曖昧だったが彼女には十分理解できたらしい。同時に、師匠は不機嫌そうに、可愛らしい唇をへの字にしていた。

それから、フラットはこう続けたのだ。

「で、その術式の癖って、グレイちゃんの故郷で見たことがあったんですよ。といっても、ズェピアさんの水晶球越しだったんですけど」

師匠が、ぴくりと水銀でできた眉を動かした。

「グレイの故郷? ひょっとしてそれはあの小屋の」

「はい。ハートレスさんの術式と、同じ癖でした」

「ハートレスが、弟子の工房をハッキングしていた?」

どういうことだろう?

それは、失踪事件と関係しているのか?

思考を深めるより先に、師匠がこめかみに触れた。

「すまない。マグダネルに質問された。一度、会議に集中する」

*

私たちに配膳される料理は、順調に進んでいた。

まず、食前酒から。

ソムリエの言う細かな銘柄なんぞは覚えてられないが、シャンパンの香りや喉越しが変わるわけでもない。

その後口を楽しみつつ、テーブルクロスに載せられたのは、鮮やかな彩りの先付けアミューズだった。野菜を裏ごししたと思しい二色のソースを基調に、ごく小さなマカロン風の料理が並んでいる。その生地の間にはキャビアやクリームなどが挟まれ、ひとつずつがこちらの目を飽きさせないように、色彩まで配慮されていた。

「モダン・ブリティッシュというやつですか」

「ああ。こいつは指でつまんで食べるそうだ。ぱくっとやってほしい」

おおらかに笑ったマグダネルに従って、私も指でつまんで口元へ 運びつつ、そのパリッとした食感と内側の味覚とのハーモニーに、 つい舌鼓を打ってしまう。

イギリス料理、と一口に言ってもさまざまだ。

なにしろ、世界に冠たる海洋帝国だったのだ。インド料理にせよ 中華料理にせよ、無数に雪崩込んでくるし、それらを自分たちの好 みに組み立て直すこともある。悪しざまに言われることもあるが、 ここしばらくは汚名返上とばかりにフレンチやスペインあたりの技 法を大胆に取り込み、モダン・ブリティッシュとして売り出してい る。

つまるところ、そうした歴史とともに、自分の思想を見せつけようとしているのが、ロード・トランベリオのメニューである。

(なんというか、アメリカ的なパワーランチの作法だがな)

貴族主義のロード・ユリフィスあたりが見れば、さぞ苦々しい顔 をするだろう。

だが、同時にこれこそが民主主義派の勢いの源でもある。より合理的で、より効率的であれば、平然と取り込んでいく。目指すところは、社会をより豊かに導くこと。そのために必要なものなら遠慮はしない、というのが彼らの方針だ。

なるほど、現代魔術科は貴族主義よりも民主主義寄りだと見られるのも当然だろう。

(.....もっとも、兄のやり方とは少し違うな)

うまく言語化できないが、似て非なる、という印象があった。魚と鯨。昆虫と蜘蛛。どちらがどちらかは分からないが。

「そういえば、マグダネル卿はダンスも嗜まれてましたね」

ふと思い出して、尋ねてみる。

「ん? ああ、一通りは習ったさ。妻と娘の全員に合わせて踊れないと失礼だろう?」

「いまは妻が五人でしたか」

「いや、先月増えて六人さ。娘が十三人。おかげで大忙しだよ。僕に可能な限りは、彼女たちの在り方に応じて愛さなくてはならないからね」

軽く法律は無視してこの通りだ。後継者はどうするのだろうと 思っているが、トランベリオにはトランベリオなりのやり方がある のだろう。 ともあれ、社交界に絡めつつ、話題を連ねていく。

兄に現場の調査を優先させるならば、可能な限り、会話から切り離していく必要がある。二次的な目的としては、冠位決議グランド・ロールについての情報を引き出すことだが、これはうっかりするとやぶ蛇となりかねない。

シャンパンを飲み干したところで、次の皿になった。

チーズとパンが運ばれ、さらに前菜へと。

甲殻類の殻を裏ごししたビスクをソースに用いて、海鮮物を主体 に、花のようなカタチを陶磁の皿の上に描いている。

舌に載せ、ゆっくり嚙み裂くと、口腔に多幸感が炸裂した。

食前酒と先付けアミューズの鮮烈さから、一気に心を奪う濃厚さ。憎々しいほどに巧みで、わざわざ連れてきたという料理人の腕が窺い知れる。

ナイフで自らの料理を切り裂きながら、マグダネルが言う。

「そうそう。ロード・エルメロイには聞いてみたいことがあって ね」

「.....できれば、II世をつけていただければ」

兄がいつもの注釈をいれた。



もっとも、口調はいささか精彩に欠ける。

こちらの身体と向こうの身体を並行で動かすだけで、脳が焼け付きそうになっているのだろう。右手で知恵の輪を解きながら、左手で油絵を描こうとするようなものだ。もう少し魔術回路に演算を任せられればよいのだろうが、そんな才能があれば苦労しない。

「かまわないとも。ではエルメロイII世。君は現代魔術科を率いるにあたって、新しい指針を据えたりはしたのかね?」

ご指名で、兄の方へ話題を突きつけられた。これはさすがに口を挟めない。兄もいくらかのろのろした感じではあったが、フォークをそっと置いて、視線をあげる。

「以前と変わりません。自分が教えられる限りのことを、生徒たちに伝えたいと考えてます。もちろん、我が師には遠く及びませんが」

「ほほう。君の師であるケイネスは筋金入りの貴族主義だったが、 そうすると魔術としても選ばれた者への教導という基本は変えない つもりかね。より魔術を大衆向けにするつもり、ではない?」

「……どうでしょう。結果としてそうなる可能性は否定できませんが」

「ふむ。僕としては、もっとアカデミックに進めたいのだがね」

このあたりのマグダネルの言い分は、典型的な時計塔のものだ。

貴族主義はひたすら選ばれた少数を絞り出すための理屈、対して 民主主義は有益なものを取り込んでいく実力主義──といっても、両 者が完全に隔絶しているわけではないのだ。

結局のところ、優秀な魔術回路を持つ人間にしか魔術を操れない以上、開かれた魔術という概念には無理があるからだ。これはいかに兄が優秀な教師であろうが、ひっくりかえしがたい道理である。

そして、民主主義派第一位であるトランベリオといっても、別に 無差別に魔術の範囲を広げたいわけではないのだ。

しばらく、それぞれに食事を楽しみつつ、

「フラット・エスカルドスと、スヴィン・グラシュエートは掘り出し物だった」

不意に、話が生徒へ飛んだ。

「ほかの講師たちは皆匙さじを投げたが、君だけは彼らの才能を輝かせた。それぞれに方向性は違うが、むしろあれだけ方向性の違う生徒が、同じ現代魔術科という場所で花開かせたことが素晴らしい」

「私の生徒を、もののように言わないでいただきたい」

「おっと、これは失礼」

前菜を食べ終わり、マグダネルがナプキンで口元を拭く。

「だが、同時に、君ならもっとやれてしまうかもしれない、という 危惧もある。フラットくんもスヴィンくんも素晴らしい。まず間違 いなく、魔術の歴史を一歩進めてくれるだろう。しかし、その才能 の発揮場所は限られるべきだ。神秘は数多くでシェアすれば衰える 理屈だよ。通常の魔術世界で発掘しえない希少な宝石を発掘するの は素晴らしいが、大量の石ころを磨き上げて宝石まがいに仕立て上 げるのはいささか害が大きい」

おっと、地雷ひとつ踏んだか。

マグダネル氏の憂慮は、こちらが思っていたよりも深いらしい。 テーブル下で、やりすごせ、と兄にサインを投げたが、きちんと通 じてるかどうか。

「……もちろん、魔術のあるべき姿はわきまえているつもりです」

よし。無難に、兄が受けた。迂闊な言質を与えなかったことで七十点あげよう。

石ころの方面について、具体的な生徒名が出なかったことにも感謝する。そうなると、兄もヒートアップしかねないからだ。いや、そんなものにマグダネルが脳の容量を割くとは思えないが。

皿が片付けられてから、マグダネルがずいと乗り出した。

「では、率直に尋ねようか。君は計画に賛成かね?」

「──計画、だと?」

水銀製の師匠が、こめかみに指をあてたまま呻いた。

ミニサイズではあっても、苦悩ははっきりと伝わってくる。むしる、いつもと違って全身を俯ふ瞰かんできるだけに、その切実さが胸に迫った。

「これはこれは。君主ロード同士のパワーランチとは、実に面白い。なるほど、トランベリオならやるだろう」

師匠の説明はほとんどなかったが、橙子には十分理解できたらしい。

しかし、状況はなお錯綜している。

トランベリオが師匠につきつけた会話の内容。

フラットとスヴィンが見つけた──この工房を、師であるはずの ハートレスがハッキングしていたという事実。

一体、ここから何が見出せるのか。

「……ハートレスの弟子たちは、迷宮からの生還者サヴァイバーだった」

誰ともなく、師匠が呟く。

「おそらくだが、迷宮を採掘していたときは全員同じチームの可能性が高い。さらに、失踪した者を除く残りふたりは、秘骸解剖局の有力者だ。それぞれ管理部門と資材部門で、名を馳せているな。さすがにこのあたりが失踪すれば、すぐさま私の耳に入るはずだ」

立ち尽くしたまま、小さな師匠の指先が自らの頰に触れる。

本当なら、葉巻の一本でも吸いたいところだったろうが、さすが

に水銀のミニチュアな身体ではかなうまい。

「ハートレスの行動が、冠位決議グランド・ロールに関係している としたら、どういう形を取る?」

しばらく黙りこくり、

「……いいや、もしも、私がマグダネルの立場なら」

ミニ師匠の視線が、部屋をぐるりと見回した。

かすかに、水銀の表情が乱れたのだ。

さきほどの、壜のいくつかを指し示す。

「スヴィン、これらの呪体について、十年前、五年前、最近の相場 を調べられるか?!」

「……え、いや、少し時間がかかりますが、時計塔に連絡を取れば」

「それだと間に合わん。このあたりに詳しいのは、ロッコ翁かシャルダン翁だが……」

「ん? 呪体の相場か」

聞いていた橙子が、片眉をあげた。

「私ならだいたい分かるぞ? なにしろ、このへんの呪体は、見つかった端から妹の金で散財したからな」

*

計画、と来た。

つまり、まともに知らないようなら、ここでオシマイと話を終わられても仕方のない情報というわけだ。こちらをどう値踏みするかの、第一段階。

数秒、兄が黙り込む。

(一無理か)

もう二秒だけ待って、覚悟を決めた。

賭けになるが、私が横槍を入れる。

「霊墓アルビオンの、ですね」

「もちろん。さすがにエルメロイの姫も聞いてらっしゃったか」

うなずいたマグダネルに、ほっ、と息をつきたくなるのを堪える。

ひとつは関門突破。

とはいえ、これだけ情報が重なって、冠位決議グランド・ロールと霊墓アルビオンが無関係というのはまずありえない。我が兄だってその程度のことは分かってるだろう。問題はここから、どういう風に話が展開していくかだ。

陽気な口調で、マグダネルは言葉を連ねる。

「計画については、結構前から進展していたんだけどね。ようやく 最近、君たちと席を設けるだけの段階に至って、嬉しい限りだ」

結構前。

最近段階が進んだ。

ここから何か見いだせるものがあるかと、思考を加速させる。駄目だ。決定打が足りない。どうやって、会話を誘導すればいいのか。こちらが知らない前提でなら、素直に話を聞けばいいのか。いや、もとが対等の立場ならいいが、エルメロイ派の立場が遥かに低い以上、それではずっと風下に立たされ続けることになる。権威が下な分、どこかで相手を上回らなければ、対等の席には座れないのだ。

声なく、兄の唇が動く。

ちょうど今、現場で何か情報収集しているのか。しかし、続くマ グダネルとの会話に間に合うのか。

新たに注いでもらった白ワインをくるりと回して、私は問う。

「トランベリオがそれだけ引っ張るとは、ずいぶん大掛かりだった のですね」

「いやいや、僕らを大げさに見積もられても困る。バルトメロイにしる、秘骸解剖局にせよ、一筋縄では行かせてくれないだろう? この場合は秘儀裁示局――天文台カリオンにも話を通す必要があったしね」

秘儀裁示局・天文台カリオン。

地表の特出した魔術を測定し、封印指定となるべき魔術師を選別する、これまた時計塔でありながら時計塔とは逸脱した組織である。あの蒼崎橙子を封印指定にして、後には解除することになった……と言えば、分かりやすいか。かの組織も、その本部施設は迷宮に在している。

だとすれば、計画とは?

(……霊墓アルビオンに何をするつもりだ? 新たな人員の派遣? 秘骸解剖局の切り崩し? それとも封印指定の見直しか?)

まだいくつも候補が考えられる。安易に絞りきれない。

考える間に、スープが運ばれてきた。

濁りなく美しい琥珀色の表面から、食欲をそそるコンソメの香りが漂ってくる。余計な飾り付けはなし。シンプルな料理に見せつつ、かすかに含まれたシェリー酒のフレーバーとともに、一口含めば官能的な味が舌に広がった。

鮮烈な先付けアミューズ、濃厚な前菜で揺さぶられた客の舌を、一気にフラットに戻してやろうというシェフのほくそ笑みが見えてくる一皿だった。

「うん。今日のスープもいい出来だ。皆様方にもご満足いただける といいが」 もちろん、マグダネルの意向もあるだろう。

今の美食の流れは、そのままマグダネルの話の流れでもある。予告なしの登場、兄の指針や現代魔術科の指針を聞いて揺さぶりつつ、本題である計画とやらを切り出す。こちらに正当性はあるがまだ争う気かね、と味覚を通じて訴えてきている。ある意味で、これも魔術的ではある。

だが、その本題こそがこちらを追い詰めてるとなれば、なんと苦い美味か。

Г......

汗が、こめかみを伝うのを感じた。

時間稼ぎも、これが限度。

そう思った時、スプーンを動かしつつ、兄が呟いたのだ。

「……霊墓アルビオンの、再開発計画ですね」

「ほう」

マグダネルの、眉が動いた。

「うん。もちろん、そのことだよ。少し意地悪をしたつもりだったけど、こうもあっさり紐解かれるといっそ清すが々すがしいな。……内々の話なのだけど、現在アルビオンの再開発計画が持ち上がっている」

「.....つ」

対して、正直、私はポーカーフェイスを保つのがやっとだった。

それだけの衝撃に、値する言葉だったのだから。

同時に、なるほど、と思わせる内容でもあった。霊墓アルビオンは時計塔の土台である。それを再開発するということは、ある意味で時計塔をつくりなおすという計画にも等しい。であれば、冠位決議グランド・ロールをもって採択するという行為も、まったく大袈裟ではない。

「迷宮で採れる、主な呪体の相場について調べました。ここ十年でもずいぶん高騰しています。つまり、迷宮での採掘量が減少していると見るのが自然でしょう。だったら、減少を補うべく再開発を行うというのは当然出てくる発想です」

「なるほど。それは筋が通っている。ほかにもあるかな?」

「あの迷宮で、密輸の可能性が出ていると聞きました。であれば、 こちらを防止するためにも施設の再開発は有効な手段です。冠位決 議グランド・ロールを通さなければ、いかなトランベリオといえど 霊墓アルビオンには手出しできないでしょう」

景気良く、兄が現場の調査で得た手札を切っていく。それは七十 点。押しどきなら押すのは正解だ。

聞いたマグダネルも、手元のワインを一口含んで、うなずいた。

「うん。それも以前から、時々話題になってたね。霊墓アルビオンの構造を考えれば、原理的には不可能なはず……だけど、僕たちもあの大迷宮を隅から隅まで知っているわけじゃあない。どこかで密輸が行われている可能性を、完全に否定できるものじゃあないさ」

そう言って、ワインをもう一口。

しばし、その美味に酔いしれるかのごとく瞼を閉じて、言う。

「だからこそ、あれこれ施設を見直す必要があるだろう。同時に再開発を進めて、呪体自体の供給を増やせば、研究も弾みがつく。一石二鳥だと思わないか?」

「歴史を紐解けば、霊墓アルビオンの再開発は何度か検討されていたはずです。私たちよりも以前の世代の君主ロードたちとなりますが、それだけ昔から、再開発によるメリットを期待されていたのでしょう」

兄も、その計画の趣旨を肯定した。そんな話は私も知らなかった のだが、どうせお勉強大好きな兄のことだ。せこせこ時計塔の細か な歴史も学んでいたのだろう。

「しかし、迷宮を枯らす可能性もあるからと、そのたび見送られていたはずです。そもそも迷宮自体の危険性が極めて高い。再開発を期して、深部の未踏領域に至るほど危険性も増すでしょう。再開発

と力んでも、うまくいくかどうかさえ判断しきれません」

ここが山場だ、という予感があった。

どうして、見送るのをやめたのか。

今回こそはと決心して、冠位決議グランド・ロールに盛り込もうとまで考えたのか。

「もちろん、今ならいけると思ったからさ。というより、今がベストのタイミングだ。我々の保持する神秘はどうしても時代の流れとともに衰えていく。いいかい、この時代であれば、我々は迷宮に挑めるだけの神秘を保持しつつ、時計塔全体で地上からの十分なバックアップを準備できる。これが次の世代にかなうかというと、疑問を覚えるね。ああ、時計塔の民主主義としては、霊墓アルビオンの再開発を、このタイミングでこそ推したいと思っている!」

そう、マグダネルがのたまわったときだった。

「おいおい。今の話を民主主義全体の方針でまとめてしまうのはや りすぎじゃないか、マグダネル?」

これまで黙っていたバリュエレータに冠たる老女──イノライが口を挟んだのだ。

普通なら、これはトランベリオの失点とすべきだろう。

身内ぐらいはとりまとめておけ、というところだからだ。しかし、マグダネルの表情からは一切焦りも怒りも窺えなかった。単なる交渉術かもしれないが、ここまで見事に動揺を消し切れるなら同じことだ。

「困ったな。麗しきロード・バリュエレータは私の意見に賛成して くれていると思っていたのだが」

「反対してるわけじゃないよ、マグダネル坊や」

諭すように、イノライが言った。

さすがに料理が運ばれてからは煙草はしまっており、その手元のグラスでは私と同じ白ワインがくるくると回っている。料理とペアリングされているだけあって、実にスープの香りと合う。味もさることながら、その芳しさの相性を重視されているのだろう。

「ただ、バリュエレータの長としてはもう少しデータが欲しいと 思っているだけだ。時計塔の方針として、現代の魔術師の方向性と して何が正しいか、オレたちは怠りなく見定める必要がある。そう だろう?」

「怠惰と言われてはかないませんな」

大げさに、マグダネルが首をすくめる。大柄で筋肉質な彼がそうすると、妙にユーモラスな雰囲気が醸し出された。もっとも、それが周到に計算されたユーモラスさだということも明らかだが。

和やかな空気に、密やかな緊張が混じる中、

「あ、ママからはロード・バリュエレータの意志に従う、と伝えられてますよ」

今度は、メルヴィンが気楽に声をあげたのだ。

普段おしゃべり極まりない男が、まるで死んだかのように気配を 潜めていたのに、口を開くとこれだ。荒れかけた水面に、思い切り 石をぶんなげるごとき所業。その結果は吉と出るか、凶と出るか。

はたして、マグダネルの方が、深く椅子に腰掛け直した。

「ウェインズの長がそう言うんじゃな。ああ、もちろん、僕だって イノライの言葉は分かるとも。データの収集は現在進行形だ。冠位 決議グランド・ロールまでには必要十分な量を揃えるとお約束しよ う」

「さすが、ロード・トランベリオ」

ここぞとばかりに、私も尻馬に乗った。

一瞬、隣の兄が息を吞むのが分かったが、この際かまっていられない。相手が言質を差し出してくれたのだから、どんな形だろうが食いつくしかあるまい。イノライとメルヴィンに借りをつくる格好となっても、凌ぎ方を選べるほどの余裕はないのだから。

「でしたら、ロード・バリュエレータの仰るように、そのデータを 拝見させていただいてから、こちらも判断させていただきます。冠 位決議グランド・ロールで拝見できるのであれば、ほかの君主ロー ドの方々にとっても、有益な材料となるでしょう」

「……まあ、当然そうくるか」

仕方なさそうに、マグダネルが頰を撫でる。

「だけどね、これはひとつの契機だよ。霊墓アルビオンは文字通り時計塔の土台だ。そこが変わるとなれば、自然と私たちも変化せざるを得ない。そして、いい変化を望むなら、今こそが最高のタイミングだ」

マグダネルの言葉には、けして単なる利己主義と断じられぬ重みがあった。

さきほどからの、彼の話は大げさではない。

神秘は今この瞬間だって劣化している。魔術師が根源へと至る可

能性なんて刻一刻とすり減り、もはや芥け子し粒にも等しい。それでもなお求めようとするならば、大胆な逆転の一手を打つしかなく、時計塔全体で霊墓アルビオンの再開発を推し進めるというのは、十分に魅力的な案だった。

次の世代になれば、もう不可能かもしれない。

それも、まったくその通りだ。私たちは滅びゆく種族なのだと、 そんな風に考えなかった魔術師などひとりもいないだろう。それか ら逃れられるというならば、きっと魂だって簡単に売るだろう。

こちらの思考を読み取ったのか、マグダネルは鷹揚に微笑した。

「とりあえず、今回はその流れを知っておいてもらいたかった。冠 位決議グランド・ロールでいきなり伝えられても困るだろうから ね?」

薄く毛の生えた人差し指を振って、恩着せがましく言った。

「冠位決議グランド・ロールの日取りは、すぐに決定されるだろう。どうせ、どこの君主ロードもすでに知っている。一週間も待たされることはないさ」

おまけに、さらっと、エルメロイうちが情報弱者であるという事実を晒さないでいただきたい。あの化野菱理のリークがなければ、今回どれだけの譲歩を迫られたことか。くそ、屈辱にもほどがある。

「楽しみにしていよう」

と、イノライが言って、ぐいとワインを飲み干した。

「どうぞ、手心を加えていただければ」

我が兄も、眉間の皺を深めて、軽く腹部のあたりを撫でた。こちらのワインがまるで減ってないあたり、今晩の胃痛用の魔術薬は倍量必要だろう。

それから、

「さあ、ここからコースのメインだ! 長々付き合っていただいだ お礼というわけではないが、是非こちらも楽しんでくれたまえ」 野太いウィンクとともに、マグダネルは大きな手を開いて、続く 料理を使用人に催促したのだった。 しばらく経って、私たちは屋敷の別室に移動していた。

メルヴィンが用意してくれた部屋である。監視用の魔術も仕掛け も施されてないのを確認してから、私は手近なソファに思い切り倒 れ込んだ。

「やあ、死んだ! 死んだぞ私! 会議の間だけで三回ぐらい死んだぞ! ライネス・エルメロイ・アーチゾルテの墓がまとめてーダース建っちゃうぞ!」

冗談でなく、体中のありとあらゆる力が奪われたようだった。

気を抜けば、今にも死んでしまいそう。細胞のひとつずつが一秒でも早く解放してくれと叫んでいる。もちろん自身のメンタルに作用するタイプの魔術もあるが、そんなものを使うだけの気力さえも惜しかった。

あの後は、特筆するようなイベントはなかった。

ひとまず同等の情報カードはあるぞと見せたことで、買い叩かれるのは避けられた、というあたりだろう。採点でいけば六十点。どう見ても落ちこぼれなれど、かろうじて赤点にはならなかった程度だ。

さしもの美味も、低温調理した赤身肉だとか、分子ガストロノミーで甘みを凝縮したデザートだとか、輪郭だけを残して頭から揮発している。

このまま死ぬまで横たわっていたかったが、にこにこといい笑みを浮かべたままのメルヴィンが、いち早く吐血の色で染まったハンカチを優雅に仕舞いつつ、こちらに話しかけてきたのである。

「あはは、お疲れ様。ライネスもそんな顔するんだねえ」

「メルヴィン.....」

うざったさに心底吐き気がしたが、その吐き気に任せて八つ当たりする元気さえない。大魔術に参加させられた方がまだマシというレベルだ。

代わりに、同じく椅子にもたれかかった我が兄が、疲れで濁った 声で訊いた。

「メルヴィン。お前、私たちを売ったというのは、さっきのマグダ ネルのことだな?」

「もちろん。最高に高く売っただろう? さあ感謝してくれたまえ。感激の涙でこの部屋を濡らしてくれてかまわないぞ」

「不満はたっぷりあるがな。ああ、礼は言っておく」

ため息の内側に、二割ほどは真実の感謝が混じっていたが、これ は私も同感だった。

実際、確実な情報を得るためには、あれほどの場はなかった。いくつもの綱渡りと、死にたくなるような疲労や屈辱と引き換えに、ぐっと手札は増えたと言えるだろう。少なくとも、冠位決議グランド・ロールの現場で、ひとりだけ何を話してるかも分からないなんて醜態は避けられた……と思いたい。

しばし、間をおいてから、兄がメルヴィンに持ちかける。

「少し、席を外してもらっていいか」

「ふむ。まあ大親友同士とはいえ、互いの立場があっては仕方ないか。あれだけのことがあったんだから、兄妹の語らいも必要だろうしね」

このあたり、メルヴィンでも──というか、メルヴィンの生まれと育ちだからこそ、立場の重要性は身にしみているのだろう。

さっさと踵を返し、部屋を出ていったのを見送ってから、兄が ぐったりした声で呼びかけてきた。

「ライネス、状況は分かるな」

のろのろと上半身を起こして、私も口を開く。

「……ああ。民主主義派が、私たちを呼び出した目的自体は想像通りだったが」

冠位決議グランド・ロールに備えて、こちらを取り込んでおこう という目的は、第一候補として兄と話していた通りだ。

ただ、それに至る理由や思想はまるで違っていた。

霊墓アルビオンの再開発。

なるほど、民主主義派としては本気度をあげざるを得まい。これまでロード・バリュエレータ以外は無視していた私たちを取り込もうと、あのマグダネルが腰をあげたのも無理からぬ。

「何より……ハートレスとのことを合わせて考えれば」

言いかけて、兄は唇を引き結んだ。

陰鬱に寄った眉根は私としては好みなのだが、その意味はなんともこちらの胃の腑をも抉ってくれた。くそ、兄の業病だけは感う染つしてほしくなかった。

「ああ、分かっている。もちろん分かっているとも。まったく最悪 だが、同じ結論に至っていると思うよ」

諦めて、肩をすくめる。

魔術の解体となれば兄の独擅場だが、陰謀沙汰となれば、こちらの領域である。物心づいてからひたすら暗殺の恐怖に晒されていた脳は、いかに疲れていようが、他人が仕掛けてきそうな罠ならダース単位で浮かべてくる。

「ハートレスの弟子にして生還者サヴァイバーの連続失踪事件。霊墓アルビオンの再開発計画。このふたつが同時期に勃発して、まったくの偶然のはずはない。だいたいアルビオンの計画についていえば、下準備は一年や二年でも難しい。最低でも五年以上、できれば十年は欲しいところだ。それに、以前ズェピアはこう言っていた。……ハートレスは君の敵かもしれないが、時計塔の敵とは限らないと」

グレイの故郷でのこと。

あのズェピアが、おそらくは己の仕事を手伝った報酬代わりに、 投げていった忠告を思い出す。あまりにも露骨すぎる言葉だし、こ うなってしまえばもはや呪いのようだが。

「つまり、兄はこう言いたいのだろう?」

と、私は続けた。

「ハートレスと通じた共犯者というべき存在──ああ、犯人は冠位決 議の中にいる、と」

考えたくはなかった。

だが、それが一番つじつまが合う。

もとよりハートレスは、現代魔術科の元学部長だ。以前の事件では、天体科の君主ロードであるマリスビリーと組んでいたことも明らかになっている。今回も同様に、君主ロードの誰かと手を結んでいたとして、何が不思議だろう。ましてや冠位決議グランド・ロールなんて大舞台なら、どんな犯罪行為だろうが咎めるほうが馬鹿げてる。……ああ、私だって、この兄がいなければ、きっとその程度の毒は平然と飲むからだ。

ため息を、吞み込む。

見えない敵ばかりが増えていくこの感覚に、どうやって耐えたらいいんだろう。体の内側で蛆虫が湧いているかのようで、いくら深呼吸しても、落ち着かない。

だから、苦し紛れに、兄に問う。

「なあ、我が兄。ハートレスの共犯者は、アルビオン再開発の賛成派だと思うか? 反対派だと思うか?」

「それを判断するには情報が少なすぎる。ずっと妨害工作を働いていた可能性もある。この冠位決議グランド・ロールをもって、再開発の流れを完全に断ち切ろうとしている、という見方もありえるからね」

「同感だ」

内部からだろうが外部からだろうが、合法だろうが非合法だろうが、こういう大きな計画は簡単に止めたり進めたりできるものではない。現に、トランベリオからしてこれまでずっと私たちにも明かさぬほど慎重に進めてきたのだから。

しかし、そうすると―

「一手紙は、もう一通あったな」

と、兄が苦虫を嚙み潰したような顔で言う。

もう一通は、貴族主義の降霊科、ロード・ユリフィスからの招待 状だ。裏切らぬよう釘を刺しに来たのだと考えていたが、こうなる とまるで意味が変わってくる。当然、ロード・ユリフィスもまた、 ハートレスの共犯者である可能性が浮上するからだ。

仮に、ほかの君主ロードや代理人が共犯者だったにせよ、我がエルメロイより家格が下なんてことだけはありえない。

「ああ、実に最悪だね、我が兄よ」

部屋にしんと張り詰めた静寂が、私と兄の分かち合った絶望の重さを示していた。

→ 第四章 →



「うわ、先生ってばバッチリ死んでらっしゃいます?!」

開口一番、ホテルの部屋に入ってきたイヴェット・L□レーマンが、ソファに寝転んだ師匠を見やって叫んだのである。

あれから翌日の、昼前となっていた。

これまでと同じ要領でホテルを変えて、自分と師匠は合流してい た。

ライネスは、フラットとスヴィンとともに、引き続きハートレスや冠位決議グランド・ロールの調査に出ている。あと、エルメロイ教室の生徒たちを放置しておくとうっかり暴走しかねないので、そちらの見張りも兼ねてということらしかった。もちろん、何かしらやることを与えておかないと、誰よりフラットとスヴィンが暴走する、ということでもあろう。

なお、橙子はしばし師匠の報告を楽しんだ後に、姿を消していた。向こうがどのような依頼で動いているのかはよく分からなかったが、それもあの人らしい気がした。

胡う乱ろんげに、師匠はこめかみのあたりに手をあてて、

「いささか、会議で疲れてな」

べったりと疲労の張り付いた声で釈明しつつ、上半身を持ち上げる。

対するイヴェットはにんまり笑って、あだっぽい目つきで師匠を 見つめたものである。

「なんでしたら精気回復のため、ベッドの中でもご協力させていただきますけど? 魔術師同士で魔術回路をつないでの精才気ド供給は、ちょっと刺激的な薬と性的体験を通じてがトレンドですよ? ぜひ現代魔術科でも取り入れてみては?」

「冗談はそこまでにしておいてくれ。......もともとの、頼みはどうなった?」

「む、先生はいまどきの魔眼女子の気持ちがわからないですねえ! でも、律儀でスパイでお買い得なイヴェットちゃんは答えちゃいます! メルアステア含む中立主義は、今回の冠位決議グランド・ロールに出席しないそうです」

「……そうか」

彼女の言葉に、師匠がほっと息をついた。

「もとより、アルビオンから採掘できる呪体を真っ先に購入するのは、比較的資金に余裕のある貴族主義と民主主義だ。貧乏所帯とは言わぬまでも、研究以外に興味の薄い中立主義にしてみれば、いまさら利権に食い込むのは難しい。八割がたはそちらだろうとは思っていたが、確証が取れたならひとまず喜ぶところか」

「でしたら、師匠とイヴェットさんに、いまお茶を出します」

師匠の安堵に、自分も少し嬉しくなって、テーブルを振り返った。

すでにポットで蒸らしてあるから、あとはカップへと注ぐだけだ。ティーバッグから抽出しただけの怠けた仕事ではあるが、緊急時だし許してもらえるだろう。

うっかりこぼさないよう、ゆっくり注いでいると、

「あ、先生にはもうひとつ報告が」

と、イヴェットが付け加えた。

「第五次聖杯戦争に参加すべく、極東に飛んだアトラム・ガリアスタが死んだそうです」

ティーポットを取り落とさないのに、相当の忍耐が必要だった。

見上げれば、背中越しにも、師匠の肩が強張っていた。

数秒も間をあけてから、

「……そうか」

と、重たい息とともに吐き出したのだ。

双貌塔イゼルマの事件以来、日本に旅立つまでは、なにかと押しかけて礼装やら呪体やらを自慢していた中東の魔術師。

聖杯戦争をなめるなと言っていたが、あれは師匠からの精一杯の 忠告ではなかったか。

しかし、その結果は......

「まだ、七騎は揃ってないはずだな。正式な聖杯戦争が始まるまで に退場か。.....では、彼が召喚したサーヴァントも?」

「報告はありませんが、おそらく消滅したと思います。なにしろ極 東だけあって、細かいところはこちらでも分からないんですが」

イヴェットの言葉に、師匠の顔に浮いた沈鬱な色が、濃さを増したように思われた。

「師匠」

「いや、覚悟していたことだ。そも、聖杯戦争である以上、彼の敗 北を悲しむことは、ほかの誰かの死を喜ぶことに他ならない。そん なことはできないとも」

サイドテーブルに置いてあった葉巻を、師匠は持ち上げた。

とっくに消えている火に、いまさら気づいたかのように、マッチの火を炙りつける。いつもなら湿し気けないようシガーケースに入れているところだが、それさえ忘れるほど昨夜は疲れ果てていたのだ。

すぐ、くたびれた紫煙がホテルの部屋を漂い、嗅ぎ慣れた香りが 鼻孔をくすぐった。

「……それでも、拙には辛いです」

「魔術師ならざる君がそう言ってくれることが、彼にとっても救いだろう」

いつも以上に眉間へ皺を寄せたまま、師匠が言った。目の下に落ちている影が、ただ自分には悲しかった。

アトラム・ガリアスタはけして良心的な人間ではなかっただろう。

そも双貌塔イゼルマでは、多勢をもってこちらに襲いかかってきた人物だ。高慢な人柄も、貴族を自認した振る舞いも、けして万人に受け容れられるものではない。自分が認めた貴族以外は人間とさえ考えない性質は、どれほど闇で悪逆な行為を働いていたとしても不思議ではないと思える。

それでも、師匠に近しい人のひとりだったのは間違いない。

師匠の何かを、幾ばくかでも共有していた人ではあっただろう。 それを悲しんでもならないというのなら、あまりにもそんな生き方 は息苦しいのではないだろうか。言葉を持たない葉巻の煙が、自分 にはひどく饒舌に感じられた。もちろん、そんな想像自体、自分の 傲慢な思い込みかもしれないが、この胸の痛みだけは本当だった。

しばし置いて、今度こそ葉巻をケースにしまってから、師匠が立 ち上がった。

ぼさぼさの髪を一後で時間をかけて梳かさなければならないだろう一片手で掻き上げて、口を開く。

「そろそろ行こう。情報に礼を言う、イヴェット」

「あれ、先生。どちらに?」

ー瞬悩んでから、隠しても仕方ないと考えたのか、師匠は打ち明 けた。

「秘骸解剖局だ。面会にOKが出た」

「秘骸解剖局? アルビオンの?」

短く、イヴェットが口笛を吹く。

それから、桃色の唇に人差し指をあてて、

「じゃあ先生! さっきの情報代として、メルアステア派のスパイ

が、突然ひとりぐらい追加されても問題ないですよね!」 さも当然のように、眼帯の魔眼少女がアピールしたのであった。 おおよその大きな港町と同様、ロンドンにも中華街がある。

とりわけ、ソーホー地区の中華街は世界的にも突出した規模だそうで、百を超える数の中華料理屋で賑わっていた。所狭しと並べられた漢字の看板に、独特な赤色と白色の入り混じった提灯。行き交う人々もいつも以上の多様性に満ちていて、しばらく彷徨っていれば、自分がどの国にいるのかも、分からなくなってしまいそうだ。

そんな中華街から北東、チャリング・クロスロードを行くと、中国の建物からヴィクトリアンスタイルのタウンハウス、そして近代的な街並みがグラデーションを伴いつつ、次々と立ち現れてくる。

国と国、時代と時代の境も混交した、いかにもロンドンらしい風景。

師匠は、さらにチャリング・クロスロードを北上して、とある建物に行き当たった。

巨大な、ミラービルだった。

円柱形の未来的な構造は、いやでも目を惹く。おおよそ時計塔が神秘を隠匿するために、大学や政府機関などの目立ちにくい偽装をしていることを考えると、なるほど秘骸解剖局は時計塔でありながら外部の存在なのだと思い知らされた。

ホールの受付で名前を告げて、向こうの確認が済むのを待ちながら、

「このビルは、すべて秘骸解剖局の関連組織で占められている。構成員全員が魔術師というわけではないが、少なくとも魔術や神秘の存在は知っている」

と、師匠が言った。

わざわざ注釈をいれた理由は単純で、さきほどから出入りしてい

る人々が、スーツやネクタイに身を固めたビジネスマンたちばかり だからだ。

こうした場所にも慣れているのか、師匠は堂々とした振る舞いだったが、自分はついそわそわしてしまう。ロンドンに来たばかりの頃と同じで、冷たくなった指でフードを深く下ろし、じっと大理石らしき床を見つめているしかなかった。

「──お待たせしました」

やがて、受付の女性が、師匠に一枚のカードを差し出した。

「カードキー、ですか」

最近電車の駅なんかで導入された、非接触IDカードに似ている。

はたしてエレベーターに入ってから、さきほどのカードキーをかざすと、階層のボタンの下にさらなる隠しパネルが現れたのだ。

おびただしいボタンからひとつを選ぶと、ぐっと慣性がかかった。

「上じゃ、ないんですか」

「地下四十五階だ」

しれっと凄い数字を言って、師匠が腕を組んだまま、指を曲げた り伸ばしたりする。

「深度的にも地下数百メートル、時計塔自体の最深部とほぼ等しい。そして、かの最深部と同様に、現在四つしか存在しない霊墓アルビオンへの入り口でもある」

「四つ、ですか」

「ああ。それだけしかないから、秘骸解剖局がアルビオンへの出入りをすべて管理することがかなうわけだ」

それから、隣にちらと視線を動かして、尋ねた。

「君も、これで満足かね?」

「はい! ありがとうございます! 秘骸解剖局ってあたしも経験がなくて!」

んっふふふ、と嬉しそうにイヴェットが唇をほころばせる。

ホテルでの宣言どおり、ちゃっかりとついてきていたのである。 ここまでくると、ある種の人徳かもしれない。人見知りの激しい自 分にしてからが、彼女に苦手意識を持たないのは本当だった。

「情報代と言われては仕方ない。向こうもどういう風の吹き回しか、入局を許可するとか言ってきたしな」

と、師匠も渋い顔をして、返す。

エレベーターの浮遊感は長いこと続き、やがて、すうと金属の扉が開いた。

広い、円形の部屋だった。

ちょっとしたホテルの、ロビーほどはある空間だ。

吸い込まれそうな、淡い光を発する巨大な水晶が、天井の中央に据えられている。おそらく科学によるものではないと直感できた。かといって魔術にちなむものとも少し違うように思える。神秘に数えられる品ではあろうが、その透き通った光は、より神聖で高貴なものに感じられたからだ。

だとすれば---

(一霊墓アルビオンの、発掘物?)

改めて、かの地に想いを馳せる。

このような物体が採掘できる迷宮とは、一体どのような異界なのだろうか? 滴り落ちるような光の中で、自分は静かな感慨に浸されていた。

「ふうん。これだけ大きな輝石は珍しいわね」

「イヴェットさんは、見たことがあるんですか」

彼女の感想に、つられて尋ねてしまった。

「うん。といっても、あたしが見たことあるのは、せいぜい小石程度の代物だけど。それでも込めた魔力によってはいろんな使い方があるし、よほど神秘の濃いところでしか採掘できない結構な貴重品だったはずよ。まあさすがは秘骸解剖局ってところよね」

うんうんとうなずき、改めてイヴェットが周囲を見回す。

何かと興味深そうなのは、自称スパイの性さがだろうか。師匠に 無理を言ってまでついてきたわけだから、魔術師にとってもこの秘 骸解剖局は珍しい場所なのだろう。

しばし、間をおいてから、

「.....おかしい」

と、師匠が呟いたのだ。

「ん、どうしたんです先生?」

「迎えが来ない。アポをとった相手が、すぐに出てくると言ってい たんだが」

視線が、曲面の壁にいくつか設けられた扉のひとつに吸いつく。

シュッと音を立ててその扉が開き、駆け出したふくよかな体の職 員が、たたらを踏んで、蹴躓いたのだ。

尻餅をついたまま、彼は後ろを向いていた。

「――っ!」

奇怪な悪臭が、鼻をついた。

続いて、轟音が壁から発した。なにかが激突する音だった。

連続で五度。そのたびに扉がひしゃげ、内側から無理やり現れたのは、体高二メートル半はあろうかという巨軀の獣だった。

だが、そんな獣が現実にいるはずもない。

正面でこちらを見据えるのは獅子の顔。だが、その両脇についたのは蝙こう蝠もりと鶏の頭、さらに両腕から生えているのは蟷かま螂きりの鎌ではあるまいか。単なる複キ合メ獣ラにはあるまじき組

み合わせに目を剝くと、顔のひとつがこちらへと向いた。

「師匠っ!」

咄嗟に前へ出て、右手を振るう。

「イッヒヒヒヒ、大した歓迎だぜ!」

固フ定ッ具クを解放され、刹那でアッドが大鎌へと変化した。

ほぼ同時に、三つ首の獣がつっかけた。

突撃を受けては吹き飛ばされると判断し、斜めに位置どる。

ごお、と風を巻いて巨大な蟷螂の刃が振り落とされた。その鎌を、アッドの刃が捉え──確かにベクトルを逸らしたはずなのに、 『強化』された腕が、衝撃で芯まで痺れる。

(何、この一)

これまでも、多くの魔術師や彼らがつくりだした異形と出遭って きたが、その手触りはまったく違っていた。

世界が違う、とでも言おうか。

いずれも超常の存在には違いないのに、明らかに別の理屈で生まれてきたモノ。

霊墓アルビオン。再び、その名が脳裏に浮かんだ。幻想の世界に 踏み込んでしまったアリスのような違和感。肌を粟立てる猛烈な恐 怖を吞み込み、ぐっと奥歯を嚙みしめる。

「グレイちゃん!」

そこで、イヴェットが叫んだのだ。

一瞬視線をやると、こちらの斜め後ろに駆け込んだ少女が、ぐい と眼帯をずらした。

露わとなった内側へ、躊躇なくイヴェットが指を突き入れる。左の眼窩へ新たに嵌め込まれた宝石は、緋色も鮮やかな紅玉ルビーであった。

「さあ、異議なく余儀なく燃えつきろ!」

炎焼の魔眼。

すべてを焼き尽くす、彼女の加工魔眼。

イヴェットの眼窩で入れ替えられる宝石は、それぞれが魔眼の高位たるノウブルカラーに匹敵するのだと、あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで話していた。実際、三つ首の獣さえその炎はたちまち包み込み、苦鳴の叫びをあげさせたのだ。

「師匠、後ろに!」

近づかぬよう警告しながら、自分は床を蹴った。

魔眼の炎に包まれた──それでも、戦意を失わぬ獣の注意をこちらに引き寄せるべく、わざと足音高く移動しつつ、部屋の隅で急制動をかけた。

斜めに跳躍。

壁を蹴り、魔獣の背後を捉えて、大きく鎌を振りかぶる。



しかし、獣は振り向きもせず、炎を纏った体の内側から、新たな 虎の顔を生まれさせたのだ。

「――っ?!」

こちらの鎌を、虎の牙が嚙み止めた。

ぎし、と嫌な音が鳴った。

「アッド!」

「痛つつつつつつ!」

悲鳴をあげたアッドを、横に引き抜く。鎌はロンゴミニアドそのものではなく、かの宝具を封印するための外装だとはいえ、この獣の牙はその神秘を傷つけうるのか。

ぐるんとその首が回った。

アッドごと吹き飛ばされた自分が、壁に激突する―!

そう思われた刹那、もっと柔らかな何かが、優しくこちらを受け 止めたのだ。

「……大丈夫か、グレイ」

苦しそうな声が、あがる。

師匠が、支えてくれたのだった。おそらく『強化』した身体によるものだろうが、師匠の魔術の力量では衝撃すべてを打ち消しきれなかったのだろう。

「す、すみません、師匠!」

「……問題ない。あれを、黙らせられるか」

「はい!」

アッドを、持ち上げる。

第一段階応用限定解除。

光の渦とともに変形したアッドの外装が、たちまち槍へと変じた。ロンゴミニアドではなく、一部形状のみを模した鉤槍。相手の正体が分からぬ以上、間合いが必要だ。

突撃とともに繰り出した片手での突きを、獣がぴたりと見切って、紙一重で身をひねった。やはり知恵があるとしか思えぬ。もしくは、知恵にも劣らぬ闘争本能。

三合突いた槍の刃が、二度身を躱かわされ、一度は蟷螂の鎌で弾かれた。

続いて、槍を振るいかけた刹那、獣が大きく跳び離れたのだ。

(──距離を、取った?!)

同時、ひゅう、と獣の──右脇の鶏の顔が一瞬息を吐き、大きく 吸ったのだ。

そこにかすかに含まれた成分が、少し離れた観葉植物をみるみる 萎しなびさせたのである。

(一吐息ブレス?!)

毒の吐息を放とうとしてるのだと悟って、自分の身体が硬直した。

威力は間違いない。ほんの一瞬の吐息で、あの観葉植物のありさま。口腔で濃縮させた吐息となれば、確実にこちらの骨までもとろかすだろう。

だが、自分の背後には師匠がいた。

回避すれば、確実に巻き込まれる。だが、どうすればいい。大盾にアッドを変化させるか? 毒の吐息を、すべて盾で防ぎきれるのか? あるいはイヴェットの魔眼の中に、対処しきれるものがあるか?

悩みつつ、アッドに魔力を回す。

そのときだった。

周囲の床から、突如壁がそそりたち、吐息を放ちかけた獣の顎を

突き上げたのだ。

当然吐息ブレスも途絶させられ、どうと倒れた獣の四方で、たちまち壁は強固な金属の檻と化した。動揺の直後、怒り任せで振るった獣の牙も爪も鎌も、その檻に撥ね返される。しかし、一撃ごとに檻も大きくたわみ、高く悲鳴をあげた。

印形を組んだまま、新たな魔術の使い手は、獣を睨みつけていた。

さきほどの、尻餅をついた解剖局の職員だった。

「ああクソ! 現役ならざる身にはこたえるぞ、アシェアラ!」

「少し待って、キャルグ」

返答は、獣が入ってきた扉からだった。

「一逆流せよFlow backward」

最後は、おそらく魔術の詠唱だ。一小節ワンカウントの短い呪文。

その響きとともに、突然、獣がよろけた。

まるで風船が破裂するかのように、その体中から緑の血を噴いたのである。それでもしばらくはしぶとく檻を殴りつけていたが、やがて大きくよろけて、横倒しになった。

それから、さきほどの呪文の主が、慎重に檻へと近づいて、

「……よかった。生きてるわね」

と、呟いたのだ。

黒い肌の女であった。

同じく、驚くほど黒い瞳が、こちらを真っ直ぐに射貫いた。きっとこの女性は、いつもそんな風に生きていたのだろうと思わせる、きっぱりとした仕草だった。

「無事だな。グレイ、イヴェット」

なんとか呼吸を落ち着かせた師匠が、こちらの安否を確認してから、新たな女性へと尋ねた。

「今のは、流動の魔術か」

「ええ。迷宮では、この手合いの変異した複キ合メ獣ラとよく戦ったものですから。彼とのコンビネーションも随分久しぶりです」

そう言って、丁寧に頭を下げた。

「資材部門、アシェアラ・ミストラスです。この度は失礼しました、ロード・エルメロイII世。私どものミスです」

ついで、さきほどの職員もぱんぱんと服の汚れを払ってから、頭を下げたのだ。

「こちらも挨拶が遅れ、失礼した。秘骸解剖局・管理部門、キャル グ・イスレッドだ。よろしく」

*

不思議な組み合わせの、ペアだった。

双方、年齢は三十代だろう。どちらも同じ職員服を着ている。

しかし、黒人の女性も、ふくよかな男性も、あまり時計塔では見かけないタイプに思えた。どこがというと言語化しにくいのだが、ふたりとも魔術師というより、民間のビジネスマンや科学者といった風情を漂わせている。

(アシェアラ・ミストラス.....)

黒人の女性の、冷ややかな横顔に、その名を思う。

(キャルグ・イスレッド.....)

男性職員は、ハンカチで汗を拭きながら、こちらを窺っていた。

だが、仮にも君主ロードたる師匠を前にして、さほどたじろぐ様

子もなかった。もちろん、師匠が名ばかりの君主ロードであり、権 威の足らない現代魔術科など恐るるに足りぬという事情もあるだろ うが、時計塔に比しても、かなり反応が薄い。

それもまた、秘骸解剖局の特性なのかもしれない。

「……このふたりが、アポイントメントを取っていた、ハートレスの弟子だよ」

師匠の耳打ちに、唾を飲み込む。

それから、師匠は檻に閉じ込められた怪物を見やり、呼吸を整えてから尋ねた。

「ひょっとして、幻想種の捕獲をしてらっしゃる?」

「ええ。限定的ですが、霊墓アルビオンの生物の生態観測をしております。地上でいまだ見かけられるような幻想種とは二枚も三枚も 違うでしょう」

嬉しそうな顔は、さきほどその生物が、こちらに襲いかかったことなどもう忘れ果てているかのようだった。ある意味で、大変魔術師らしいとも言える。今の戦いだって、有益なデータが取れたぐらいに思っているのかもしれない。

師匠の方も、それ以上責める気はないようだった。普通に考えれば、それなりに問い詰めるべき場面だろうが、師匠の感性も──少なくとも相手が魔術師の場合に限っては、魔術師の世界に調整されるのが常であった。イヴェットも似たような感想なのか、それとも交渉の舵取りは師匠に任せるということなのか、特に口を挟もうとはしなかった。

だから、自分も文句が出そうなのはぐっと堪える。

少しうつむき、フードの奥に表情を隠していると、資材部門の職員と名乗ったアシェアラが水を向けた。

「こちらのおふたりは」

「……し、師匠の弟子の、グレイです」

「イヴェット・L□レーマンです。先生の許可をいただいて、助手

として来ております」

隣から、イヴェットがはきはきと答える。

ちゃっかり助手の立場を獲得しておくあたり、実に彼女らしい。

アシェアラがうなずいて、無事な扉のひとつにすっと手を差し伸べた。

「どうぞ、こちらへ」

*

案内された応接室で、自分たちは地上と変わらぬ紅茶を出されていた。

至極、シンプルな部屋だった。

調度は長ソファがふたつに、ガラスのテーブルが置いてあるき り。空気をどこから取り入れているのかは疑問だったが、やはり魔 術によるものだろうか。

また、壁のあちこちには、どのような用途か分からないが、いくつかのランプが点灯している。さきほどのカードキーもそうだが、どうも秘骸解剖局は科学の導入を怖れていないらしい。

「少し、お話をお伺いしたくて」

と、師匠は切り出した。

テーブル越しのアシェアラが、それを受けて、ゆるりと口を開く。

「私たちの先生のことについて、と伺っていますが」

「残念ながら、ふたりとも十年前からハートレス先生には会ってい ない」

これは、隣で汗を拭きながら、キャルグが言った。どうやら汗掻

きらしい。

ドクター・ハートレスの弟子ふたり。

そう考えるだけで、鼓動が速くなるのを感じた。

「十年前というと、ドクター・ハートレスが現代魔術科を離れたと きですか?」

「ほかにないだろう? それからしばらくの間、現代魔術科は学部 長抜きで運営していたな。もちろん、あなたが君主ロードに収まる までということだが」

上目遣いに師匠を窺いつつ、キャルグが言う。

師匠がいなかった頃の、現ノ代ー魔リ術ッ科ジ。

当たり前のことなのに、こうして改めて言われると、ひどく不思議に思えた。自分が知っている現代魔術科の印象は、師匠とエルメロイ教室から成り立っている。しかし、当時はどちらも現代魔術科ではなかったのだ。

冠位決議グランド・ロールによってエルメロイ派が現代魔術科を 治めることとなり、師匠がライネスによって君主に仕立て上げられ る……というふたつの事実をもって、初めて今の現代魔術科は成立 している。

それまでは、どうだったのだろう。

「おふたりは、現代魔術科の先輩になるんですよね」

イヴェットの言葉に、不意に水を浴びせかけられた気持ちがした。

(......そうか。そうなるんだ)

自分たちの、先輩。

師匠よりもっと以前に、現代魔術科の生徒だったふたり。

「正直、迷宮の生還者サヴァイバーだった俺たちはそこまで時計塔 に馴染んでいたわけじゃないがね。……ああ、スラーは変わりない かな」

キャルグが微苦笑して、現代魔術科の街の名を口にした。

「多分、あまり変わってないと思います」

「学食のパンプキンドリアはいまでも一番人気かな?」

「三番目ぐらいですね。今はシュリンプチャウダーが評判です」

「んむ。君たちは舌が肥えすぎたんじゃないかな。俺たちの頃は、 あれが一番安くて腹一杯になれるというので、皆が殺到したものだ が」

ふくよかな腹を撫でて、キャルグは遠い目をした。

そこに差し込むように、師匠が問うた。

「ドクター・ハートレスは、どんな方でしたか」

「ああ、到底、俺たちがあの人のすべてを知っているわけではないがね。……ただ、そうだな。面倒見は良かったよ。俺たちのような生還者サヴァイバーも、従来からの生徒も別け隔てなく扱ってくれた」

「あなた方を含む生還者サヴァイバーの五人は、ドクター・ハート レスの弟子として厚遇されていたと聞きましたが」

「はは。厚遇は言いすぎだが、何しろ俺たちは異分子だからね。今 言ったように、別け隔てなく扱ってくれただけで、周囲にはそう見 えたかもしれない。……ああ、仮にも時計塔の学部長としては、不 思議なぐらい優しい人だったよ」

キャルグの述懐に、自分は密かに下唇を嚙んだ。

あの、ハートレスの一面。

こうして話を聞くと、やはり不思議な心持ちがした。知識としては、そういうこともあっただろうと受け容れられるのに、師匠や自分と同じく、あの魔術師もスラーの街で教鞭をとっていたのだと言われると、どうしても腰のあたりが落ち着かない気分になる。

まして、優しい人などと言われると、どうすればいいのか分からなくなった。

だって、自分も師匠も、そのハートレスに殺されかけたのに。

「……私は、結構利用されちゃったしなあ」

これは、ひそめた声で、イヴェットが呟いた。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの一幕だ。ドクター・ハートレスによって融資を受けた代わりに、彼女は正体を隠すための隠れ蓑として利用された。もちろんそれ自体は自業自得なのだから同情する余地とかはないのだが、共犯関係にあった彼女にさえ、ハートレスは己の正体や目的などはほぼ喋らなかったという。

今、かつての生徒たちが語る教師の像とはまるで異なる。

どちらが、本当のハートレスなのだろう。

「ハートレス先生は、十二科の中でもとりわけ教育に熱心でしたが……そうですね。ほかの講師とは、別のところを見ている気がしました」

アシェアラの囁きに、キャルグが同輩の方を向いた。

それから、こう口にしたのだ。

「君の人生を、最も輝かしいものに捧げたまえ」

「先生の口癖でしたね」

さきほどまであまり感情を浮かべなかったアシェアラの黒い顔かんばせが、くすぐったそうに揺れた。

「我々は繋いでいく生物だ。魔術師として過去にひた走る以上、常に繋いでくれた誰かに向かい合わねばならず、繋いでいく誰かを意識しなければならない。しかし、同時に君がただひとりの君であることも変わらない。ならば、せめて己が輝かしいと考えるものに、己を捧げ尽くさねばならない」

......その言葉に、自分は動けなくなってしまった。

隣でその話を聞いていた師匠でさえ、硬直していた。ああ、そうだろう。だって、その生き方は誰かにそっくりだ。あの聖杯戦争で出会ってしまった王の在り方に魅入られ、そこで規定された通りに生きていこうとしている誰かと、あまりに酷似している。

以前の、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでハートレスの残した言葉を思い出した。

- ──『調べれば調べるほど、聖杯戦争は興味深かった』
- ──『子供の頃に見た夕焼けみたいに、どこまでもいつまでも追いかけていきたいと、心の底から願った』

ならば、ハートレスにとって聖杯戦争がそうだったのだろうか?

それとも、聖杯戦争の中に、輝かしいものを見出したのだろうか?

「我々が追い求めるべきは、常に根源でしょう?」

師匠が、言った。

これまで、何度となく聞いた言葉だった。

根源。根源の渦。はたまた名状しがたきものとして『 』と も。

魔術師の魔術師たるべき理由であり、いつか辿り着かねばならない夢であり、真理そのもののカタチであると、時計塔の講義では語られていた。結局のところ、幾多の魔術師が人生を賭して魔術を練り上げ、子孫の魔力回路を一本でも増やすべく死力を尽くしているのも、いつか未来の誰かがその根源へと手をかけるためなのだと。

「もちろん、その通りだ。たとえ、俺を含む多くの魔術師が、時計 塔での抗争に溺れてその大義を見失っているとしても」

キャルグが苦く笑う。

迷宮よりの生還者サヴァイバーであり、秘骸解剖局の局員まで成り上がった彼にしたところで、時計塔の権力抗争からは逃れられないのかもしれない。

「しかし、あの人はもっと別のところを見てるような……そんな気がしたんだ」

「……なるほど」

と、師匠がうなずいた。

何かしら、得るところがあったのか。

自分には杳ようとして知れなかったが、ソファに少しだけ浅く座 り直してから、師匠はついにこう切り出した。

「ところで、ドクター・ハートレスの弟子──あなたたちと同じ生還者サヴァイバーが、失踪してるのはご存じですか」

一瞬、沈黙が落ちた。

それから、深く椅子に座り込んだ男が、もごもごと口を開いたの だ。

「……もちろんだ。最近失踪したジョレク・クルダイスは、単に同じチームだっただけではなく、俺の弟だからね」

「これは。失礼いたしました―」

「いや、無理もない。俺とは姓が違う。弟は、迷宮を出た後、開位 であるクルダイスの家に入ったんだ」

「そういうことでしたか。生還者サヴァイバーが、実力を買われて、後継者不在の家の養子となるのはままあることですからね」

「ああ。優秀な弟だったとも。アルビオンでも何度命を助けられたか、分からない」

「あなたとジョレクほど息が合うコンビは、ほかのどのチームでも いなかったわ」

「だったら、嬉しいがね」

ほころばせた唇は、ほんの少し寂しそうだった。

同時に、自分は脳裏のメモに筆を走らせる。

キャルグ・イスレッド──秘骸解剖局・管理部門に在籍。ジョレクの兄弟。

アシェアラ・ミストラス―秘骸解剖局・資材部門に在籍。

ジョレク・クルダイス──キャルグの弟。『失踪中』。

ゲセルツ・トールマン──魔術薬を得意としたフリーの魔術師。 『失踪中』。

人名と失踪の有無を書き留めていく。

ハートレス五人の弟子は、あともうひとり。最後に書かれたその 名前にも、橙子の証言から『失踪中』と振られている。

それから、もう十数分ほど会話が続き、おおよそ終わりかと思われたところで、

「ロード・エルメロイII世」

と、キャルグから名を呼んだのだ。

「ひとつ、俺からも伺いたいのだが、かまわないか?」

「もちろん」

快くうなずいた師匠に、男は腹のあたりで組み合わせた指を、二 度三度と閉じたり開いたりして、尋ねた。

「あなたは、極東の聖杯戦争とかいう魔術儀式で生き残り、名をあげたはずだ」

聖杯戦争!

突然、その単語が出てくるとは思わず、師匠が瞬きした。

「それが、何か」

「いや、俺たちのような生還者サヴァイバーとも、少し似てると思っただけだ。そう考えた場合、あなたは時計塔の新世代ニューエイジでも最大の成功者だろう。だったらどうだ? 今の立場はどんな風に思える? 君主ロードなんて成功者になったことで、世界は輝かしく思えたか?」

Г......

しばし黙り込み、真面目に師匠が考え込んだ。

それから、

「しんどいだけですよ」

と、肩をすくめた。

「......そうか。そういうものか」

短い答えだったが、何かしら感じるところはあったらしい。キャルグもそれ以上引っ張ることなく、ふくよかな腹部を撫でて、息をついた。

「答えらしい答えには、なってないかもしれませんが」

「いや、十分だ。ありがとう、エルメロイII世」

深々と、秘骸解剖局局員キャルグ・イスレッドは、頭を下げたのだった。

話は、意外と短く終わった。

エルメロイII世たちが去った後、秘骸解剖局のふたりは応接室に 戻っていた。

深刻そうに、キャルグは床を見つめている。それが癖なのか、何 度も指を組み直しつつ、呟いた。

「……ゲセルツたちが失踪したのは、先生の差し金だと思うか。ア シェアラ」

「関係ないわけないでしょう」

アシェアラが唇の端を吊り上げる。飾り気のない職員服を纏っていても、バランスよく盛り上がった肢体は、ひどく扇情的に映った。

「私たちが何をしたか、あの人はもう知ってるはず。十年ぶりに表舞台に姿を現したあげく、チームがこんな状況になっていて、なんの関係もない方がよほど奇跡よ」

「魔術師が軽々に口にしていい言葉じゃないな」

苦々しく言って、キャルグが問うた。

「だったら.....」

「……ええ。さよならね、キャルグ」

アシェアラが、あらかじめ用意していたアタッシェケースを持ち 上げる。

ぼんやりと見上げて、キャルグが言う。

「出ていくのかね? だが、ここがロンドンで一番安全だ。君も 知ってるだろう」

「それでもよ」

念を押すように、アシェアラは言った。

そのまま、高い靴音を鳴らして、扉を出て行った。

一度も、彼女が振り返ることはなかった。

──陽が、傾いていた。

もう二月間近ということもあり、夕暮れがずいぶんと早くなっていた。コンクリートビルも洋館も平等に、その赤色が塗りつぶしていく。道行く人々のコート姿も例外ではなく、長く伸びた影は石畳を洗うように交錯していた。

秘骸解剖局のビルを出て、しばらく通りを南に進んでから、師匠 が口を開いた。

「どうだった?」

「とりあえず、嘘はついてないですねー」

隣を歩くイヴェットが、周囲を確認してから、すっと眼帯を上にずらす。

「あ、感情視の魔眼」

磨き上げられた緑の孔雀石マラカイトが、少女の眼窩にはまっていた。自分も気づかなかったが、あの複キ合メ獣ラと戦った後、応接室に移動する間に瞳の宝石を入れ替えていたらしい。

その魔眼は、人の感情の動きを捉える。

だからこそ、イヴェットが本気でこちらを捜そうとするなら隠れられないと観念し、師匠も協力を仰いだのだった。

「ただ、ほかの弟子が失踪している理由について、心当たりはある みたいでしたよ。先生がそちらの質問をしているとき、明らかに オーラが揺れてましたから」

「そうだろうな」

と、師匠がうなずいた。

「だとすれば、隠している事象の性質が問題になる。どういう問題があって、私たちに隠さねばならないか、だ」

ホワイダニット。

何故、彼女たちは嘘をついたのか。つかねばならなかったのか。

しばし間をおいて、師匠がかぶりを振った。

「どのみち、現状では判断するだけの材料が足りない。当時のハートレスの人となりを窺えただけでも幸運とすべきだろう」

「弟子思いの人だったように……思えましたが」

「魔術師は弟子に優しいものだがね。ただ、たいていの場合、生徒はこれに含まれない。自分の魔術刻印ないし術式を継がせる後継者たちについてのみ、時に己の命以上に執着するのが魔術師という生物だ。その意味で、ハートレスという魔術師はずいぶん例外的だったらしい。それとも現代魔術科という場所が、そうさせるのか」

師匠はどうなんですか、とは訊けなかった。

普通に考えれば、内弟子という立場をいただいている自分が、それに該当するのだろうが、何しろ魔術師ですらない。成り行きから、たまたまこの立場に押し込められたのが、グレイという墓守だ。

ただ、師匠がエルメロイ教室に対して、どうでもいいなどと思っているはずもない。

巣立った卒業生については一人前の魔術師として扱い、干渉を最低限に控えている節はあったが、少なくとも在学生については甘いという印象すらあった。

どうして、師匠は普通の魔術師とは異なったのだろう。

そして、ハートレスはどうだったんだろう。

「一そういえば、ドクター・ハートレスには、幼い頃妖精に攫さらわれたとかいう出自があったな」

不意に、師匠が言った。

それに反応して、イヴェットも首をひねったのだ。

「それで、なんらかの異能を身につけたっぽいんですよね。信用されなかったのか、あたしにも詳しく教えてくれなかったですけ ど!」

妖精というと、あまりに御伽話めいたイメージだが、少なくとも そうした存在がいることは、すでに自分も知っていた。

また、今のイヴェットの発言通り、その能力によって魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでは、足止めさせられたのだが、いかなる『力』かは判然としなかった。虚数属性と似たことができる……みたいな言葉もあったが、具体的なところは分からないままである。

いまだ、謎だらけだ。

かつての生徒たちの証言によって、いくらか浮き彫りになりつつも、過去のハートレスと現在のハートレスはまるで繋がってこない。まるで、虫食いだらけのクロスワードパズルみたいだった。

「妖精によって何らかの恩恵を受け取ったという伝説は多い」

通りを歩きながら、師匠はいつもの講義のように、言葉を続けた。

「だが、現代に近づくほど、それは単なる恩恵だけではいられなくなる。もとより半妖精の出自だとか、座に刻まれるような古き時代の英雄ならともかく、人間と妖精の領域が離れた今となっては、たいていの場合恩恵と同等の―いいや、それ以上の代償を必要とする。近代になってさえ、西欧の多くの土地で取り替え児チェンジリングの伝説が聞かれるが、それはむしろ災いの印象の方が強いだろう」

取り替え児チェンジリング。

妖精の子供と入れ替えられて、育てられたという子供たち。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン……か」

「どうかしましたか、師匠?」

「いや……」

と、師匠がかぶりを振る。

「何か、私達はあの列車で、ひどく致命的な見落としをしていたような……」

そこまで言って、声は風に紛れた。

ちらほら、と雪が交じりはじめていた。

夕陽を追うように雲が広がり、肌を刺す冷風が吹いた。その風と雪にフードを押さえていると、いくつかのネオンが点灯し始め、多くの美しい絵の描かれた看板が晒された。

「劇場が、多いですね」

「このあたりは、もともと舞台劇なんかが盛んでね。もっとも、向 こうも楽しく観劇しようなんて腹じゃなかろう」

師匠の言葉は、これからの予定について触れたものだった。

「待ち合わせとは聞いていましたが、こちらだったんですか?」

「ああ。時間が来れば、案内をよこすと言っていたが……」

「先生?」

イヴェットが、声をあげた。

それで、自分も人通りが極端に減っていたことに気づいた。いや、極端なんてものじゃない。皆無であった。仮にも首都ロンドンの大通りで、夕暮れ時にそんなことがありえるはずもない。

やがて、イヴェットの視線が動き、師匠のそれも追随した。

近くの、喫茶のテラスだ。

オープンテラスの一席に、ひとりの老人が座っていたのだ。

長い白髪の、眼鏡の男であった。

胸元には大ぶりの宝石を用いた首飾り。枯れ枝のごとき指には幾

多の指輪を嵌めており、そのすべてをさまざまな色の宝石が彩っていた。それでいて、豪奢というよりは陰鬱とした影の世界からやってきたごとき老人だった。

舞い降る雪を割るように、その老人が手を挙げた。

「……久しいな……ロード・エルメロイ」

「できればII世をつけていただければ」

「前も聞いた……。だが……そんなお前のくだらないこだわりに……私の付き合う意味がない……。お前はロード・エルメロイであり……私はロード・ユリフィスだという事実は変わらぬ……」

嗄しわがれた声は、それ自体がひとつの呪文のごとく思えた。蛇が絡みつき、長い舌をしゅうしゅうと伸ばしているところを想像してしまった。

ロード・ユリフィス。

降霊科の君主ロード。時計塔に根ざす、十二人の王のひとり。

「──ルフレウス・ヌァザレ・ユリフィス **」**

ただならぬ緊張とともに囁いたのは、イヴェットの方だった。おそらくは、個人としてのロード・ユリフィスの名。後から知ったことなのだけど、降霊科の学部長は代々とある分家から選ばれ、正式に君主ロードの地位を得た際、改めて本家であるユリフィス家の養子に入るのだという。名前のひとつずつにさえ奇怪なルールが秘められているのが、いかにも時計塔らしくはあった。

ロード・バリュエレータとともに、師匠にもう一通の手紙を寄越 したのが、この老人だったのだ。

「どうやら……忘れずにいてもらえたらしいな……」

「ご冗談を。まさか、このような場所とは思いませんでしたが」

くつくつ、と老人の肩が震えた。

「都合よく……もうひとり招いておる……」

ルフレウスが瞳を動かす。

もうひとつ、通りに影が浮き上がった。

今この瞬間現れたのか、それとももっと前から現れていたのか も、自分には分からなかった。そうした時間概念の喪失も、魔術に は含まれているのかもしれない。降りしきる雪は、何もかもを騙し て、塗り込めてしまうかに思えた。

そして、そんな純白を切り裂くような、銀色の髪の少女だった。

自分たちよりも幼く、しかし場の異様な重圧に膝を屈さず、凜と 顔を上げている。琥珀色の瞳は、これから起きうる修羅場から、け して目を逸らさないと宣言しているようでもあった。

同時に、自分もイヴェットも──もちろん師匠も、見知っている相手だった。

「おひさしぶりね、ロード・エルメロイII世」

「オルガマリー……」

少女のお辞儀カーテシーに、低く師匠が名を呼んだ。

——十数年前。

大魔術回路・第一層。

足元の床が、明るかった。

(.....なんだか、夢の中みたいだ)

少年は、ふわふわとなりがちな意識を引き締めつつ、床の光を踏んでいく。

この迷宮特有の、壁や床を走る、巨大な魔術回路じょうみゃくだけではない。第一層に限っては採掘都市マギスフェアと隣接してることもあって、穴だらけの天蓋から、大結晶の光が届いているのだ。都市シティの安全が確保されている理由でもあるが、おおよその怪物は結晶光のもとには出てこないため、アルビオンの脅威に緊張するより、少しずつ気持ちを整えていく場という趣が強かった。

時折、獣の鳴き声などが聞こえるが、まあこれぐらいは愛嬌というものだ。もちろん、アルビオンの生態系は非常に短期間で変化していくため、思いがけない場所で襲撃されて全滅という例もあるのだが、人間ずっと意識を張り詰めていることはできないため、精鋭チームほど気を抜くときはきちんと抜く傾向がある。

「いよいよ、ここに潜るのも最後か!」

明るく言ったのは、キャルグの弟一ジョレクであった。

考えてみれば、このチームのムードメーカーは彼だった。戦闘用 メンバーとして兄と抜群のコンビネーションをこなす傍ら、年若い アシェアラや少年と、年長のゲセルツの間をうまく埋めてくれてい た。 彼がいなければ、とっくにアルビオンのどこかで全滅するか、あるいは反りが合わなくなって解散していただろう。感謝しかない。

肩を回したジョレクとキャルグが、口々に言う。

「まさか、全員ドクター・ハートレスの弟子になるなんてな」

「名義だけとはいっても、地上に出たら二年ほど、現代魔術科での 授業も受けられるんだろう? 生還者サヴァイバーとしての名誉も 受けて、卒業後は進路も選び放題だぜ。ああ、これ以上の条件はな いさ! ほんとよくやった小僧!」

「あはは……」

と、少年はぎこちなく笑う。

結局、数ヶ月ほどの間をおいて、全員にハートレスのことを打ち明ける運びとなったのだ。何度かハートレスと密会する内、ならばチームの全員を弟子として引き取ろうという向きとなり、あれよあれよという間にさきほどの話が固まったのである。

これが時計塔で院長と君主ロードに次ぐ権威を持つ、メイン学科 の学部長というものか、と空恐ろしくなったものだ。

まさか、人生にこんな転機があろうなんて、思いもしなかった。

もちろん、密会を重ねるうち、ハートレスと少年たちとの間で、 呪体の密輸ルートも確立され、そこで得た収入によって任期が短縮 できるようになったのも大きい。解剖局から不自然に思われないよ う、『実はもともとメンバーの一部が現代魔術科とつながりがあっ たのだ』とか、『ハートレスのとりなしで融資を受けた』とか、情 報工作にはずいぶん骨を折ったものだ。

そんな経緯を思い出しつつ、少年はふと話題を切り替えた。

「そういえば、みんなは、現ノ代ー魔リ術ッ科ジに入った後は、どんな進路を取るつもりなんです?」

「ずいぶん気の早いこったな」

「まあ、生徒やってる間に、コネクションを固める必要はあるしな」

再び、キャルグとジョレクの兄弟が答える。

時計塔では、そうしたコネクションの形成が、将来を大きく変化させるらしい。

まだ少年には実感がないのだが、ハートレスもそんなことは言っていた。だからこそ、どのように学び、将来どのような人間になりたいかを、考えておきなさいと。

将来。

このアルビオンで生まれ、育った少年には、いままでずっと関係なかった言葉。

「私は、秘骸解剖局を目指すつもりよ。ここでの経験を活かせるし」

と、アシェアラが言った。

黒い肌の少女は、つんと澄ました横顔で、迷宮の先を見据えている。

確かに、それは妙案に思えた。少年が知っているのは、霊墓アルビオンのことだけだ。これから学生生活とやらに挑むとして、彼女のやり方は参考になるだろう。近くで学ばせてもらうことを、密やかに決意する。

「はっ、今更時計塔の抗争に組み込まれるなんぞ御免だ。現代魔術 科の授業ぐらいはありがたく受けさせてもらうが、俺はそのままフ リーの魔術薬稼業に戻るつもりだ」

肩をすくめたのは、ゲセルツだった。

アルビオンに降りてくる以前は、フリーランスの魔術師だったということだから、もとに戻るということだろう。もちろん、ここで得た金銭や呪体、これから得るだろう時計塔での技術は、そうした生活でも大いに助けとなるだろうけど。

「で、そこの兄弟は」

「ああ、俺はアシェアラと同じで秘骸解剖局狙い」

キャルグが頭を掻き、ジョレクははにかむように頰をゆるませた。

「僕は兄さんが誘いを譲ってくれて、クルダイスとかいう家に入ることに。時計塔での成績によるだろうが、うまくすれば後継者候補 に滑り込めるかも」

よく似た兄弟だった。

少しばかりふくよかな体型は、もう十数年すると、いささか不健康の域に達してしまうかもしれない。それでも、頼もしさは変わらないだろうと思えた。

きっと、今後の学生生活でも互いに助け合い、少年の良き友と なってくれるだろう。

それから、こちらへと水を向けた。

「お前は、卒業した後もドクター・ハートレスのところに居座るんだっけか」

「そのつもりです」

「おいおい勿体無いだろ! どうせ研究畑の利権なんざ、偉ぶった 老害どもが持っていくんだから、どっかの家か組織かに身売りした ほうがマシじゃねえか!」

「いや待て。いくらクソ餓鬼みたいな新世代ニューエイジといって も、魔術師として目指すものは変わらない。世代を積み重ねていく ことでこそ、根源への道も開くというものだろうが」

これはゲセルツが反論し、兄弟たちと、またやいやい言い合いに なる。

いつもの三人のやりとりを聞くのもアルビオンでは最後なのだと、なんとなく少年は感慨深さを覚えていた。

いや、もちろん現代魔術科に行ってからも、しばらくは続くのだ ろうけど。

隣に並んだ少女が、そっと耳打ちする。

「一キミも、解剖局を目指してもいいんだからね」

「あ、あ、うん」

なぜだか拗すねたようなアシェアラの言葉に、小さくうなずい た。顔が熱くなったのを誤魔化して、ごしごしと少年は頰を擦る。

それぞれの夢が、それぞれにカタチを成そうとしていた。

多分、それは美しいことなのだろう。とても輝かしく、滅多にないほど幸運で、間違いなく喜ぶべきことだ。

なのに、どうしてだろう。

少年の胸には、ほんのかすかに、黒い靄もやがかかっているみたいだった。

おそらくそれは、生まれて初めて少年が感じた──未来に対しての、不安であった。

→ 第五章 →



雪風になびく銀髪を、忘れるはずもなかった。

オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア。

あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、生死をともにした少女。そして、今回の事件で現れることも想定するべきだった、と密やかに唇を嚙んだ。

だって、彼女は天体科の君主の娘でもある。

加えて、天体科の君主ロードは、滅多にその領地から降りてこないとも聞いていた。ならば、冠位決議グランド・ロールに際して、その代行に彼女が選ばれるのは極めて自然な流れではないか。

Г......

彼女は、こちらには一瞥したきりで、何も触れなかった。

貴族が相手の召使いに挨拶する必要はないということだろう。もしも、死んだアトラムがいれば、「ははは、相手の鞄に挨拶する道化がいるかね? それとも何か、君は靴を見たらキスしないと気が済まない変態か」などと言い出しそうだ。

傲慢というよりも、多分そういう価値観なのだろうと、今は思っている。

選ばれたものだけに開かれた魔術師という世界では、必然的に醸成され、引き継がれていくだろう価値観。

「これは。ルフレウス翁に、天体科アニムスフィアのご令嬢までい らっしゃるとは」

深々と、師匠が一礼する。

老人は、ただ眉間の皺を深くしたきりだった。

「……今のロード・エルメロイと話すのは……数年ぶりか」

「三度目になります。我が師は、長く翁の寵愛を受けておいででし たが」

「……ふむ。先代の事件は……私にとっても大変残念だった。…… ソラウはまだしも、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは……近 年で最高の弟子だったからな」

その言葉に、隣で聞いていた自分が、小さく息を止めた。

(先代ロード・エルメロイの......師匠......?)

これまでに、先代ロード・エルメロイのことは何度も聞いていた。

若くして月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムを代表とした幾多の魔術礼装をつくりあげ、時計塔においても神童の名をほしいままにしたという、色位の魔術師。そのケイネスの師が、この老人にあたるのだという。

つまり、師匠にしてみれば、師の師というわけか。

(……拙からは、師匠の師匠の師匠?)

語呂遊びみたいな言葉が脳裏をかすめて、すぐさま思考から追い やった。

到底、そんな吞気なことを考えていられる状況ではなかった。

ほかの通行人が残らず消え失せたロンドンの夕刻──などという異様な風景はもちろんのこと、老人の体には、あまりに濃厚な死の気配が張り詰めていたからだ。

(降霊科の、君主ロード.....)

降霊とは、文字通り死者の霊を降ろし、必要に応じて従わせる魔術のことだ。

死せる者、すべてユリフィスに頭を垂れる……以前、時計塔の誰かの講義でそんな言葉を聞いたのだったか。自分が死者を眠らせるための墓守ならば、この老人はその死者たちを使役し糧となさしめ

る魔道の徒だった。

薄く、老人が笑う。

指の一本が曲がるたび、ふたつずつ嵌められた指輪の宝石がぎらついた。

「……はは、だがよかった。……てっきり、もうトランベリオに口 説かれて、こんな老骨の招きには応じてくれないかと思っていたと も……」

老人の台詞に、脈が速くなった。

つい昨日のロード・トランベリオたちとの会談を、もちろん把握 していると、彼は言っているのだった。

「まさか。先代だけに限らず、エルメロイと降霊科ユリフィスとは 深い縁があります」

「ああ……もちろんそんなことを言おうものなら、この場でくびり 殺してもいい」

にたり、と老人の唇が歪む。

けして、ハッタリなどではないと、嫌でも悟らされた。この老人にはそれだけの『力』がある。時計塔は降霊科ユリフィスの長ーロード・ユリフィスとして、自分たちが束になってかかってもあっさりと殺し返すだけの『力』を保持しているはずだ。

あの蒼崎橙子にも劣らぬ、同時にまったく異質だとも予感させられる、その在り方。

師匠は、わずかに目を細めただけだった。

「ですが、てっきり以前の冠位決議グランド・ロール同様、今回も ブラム殿あたりが代行をされるのだと思ってましたが」

「……く、く。トランベリオからは、マグダネルが直接出てくるというなら、そうもいくまいよ。……で、もうトランベリオから…… 霊墓アルビオンを再開発したいとかいう戯言は……聞いたかな?」

「ええ。ルフレウス翁も人が悪い。先に教えていただければ、こち

らももう少し準備が整いましたものを」

「別に……黙っていたわけでは……ないがね」

ルフレウスの声が、空々しくテラスのテーブルを這った。

「……もちろん大うそつきですよ、あんなの」

イヴェットが、ぼそぼそとこちらに囁く。

彼女が言うからには、おそらくそうなのだろう。十二家でも最下格であるエルメロイに、わざと情報を流さなかったということだ。それがエルメロイを見くびっているからか、裏切り者になりうると見られているかは分からない。ただ、少なくとも、彼らには彼らなりの道理があるのだろうと思われた。

あまりにも、時計塔の社会は複雑だ。

練り込まれた陰謀や権謀術数はもちろんのこと、単なる因習や悪 習までもが渾然一体となって、外部からはまともに区別もできはし ない。

そこで、我慢しかねたように、オルガマリーが口を挟んだのだ。

「ルフレウス翁、別にこんな茶番を長々とやりたいわけではないで しょう?」

「もちろんだとも.....。状況を理解しているなら......こちらからの 話は単純だ」

そう言って、ルフレウスはこう明言したのだ。

「我は……ロード・ユリフィスの名において……霊墓アルビオンの 再開発に反対する」

やはり、と思った。

以前から、同じ提議はなされていると言った。その提議が通って ないならば、当然反対勢力がいることとなる。民主主義のトップで あるトランベリオが再開発推進派ならば、必然的に貴族主義のユリフィスは反対派となる道理だ。

一拍おいて、師匠が尋ねた。

「理由を、問うてもいいですか」

「……危険だから……では不十分かね」

「いえ、十分でしょう。君主ロードたるもの、魔術世界の安定を考えねばなりません。私ごとき若輩でなければなおさらです」

ルフレウスの方針にうなずき、師匠が言葉を紡ぐ。

「霊墓アルビオンを再開発し、採掘速度を無理に高めようとすれば、資源が枯渇する可能性は高いと思われます。いえ、そもそもアルビオン自体が危険極まりない土地です。再開発が成功するなどと、誰にも保証できるものではないでしょう」

「付け加えますと、天体科も同様の考えです」

と、オルガマリーは言葉を添えた。

さきほどから、口数は最低限にする戦略らしい。正式な君主ロードふたりに対して、己の立場は父の代行に過ぎぬから、ということだろうか。

「だが、もしも再開発の成功を保証できたなら?」

突然、真逆のことをロード・ユリフィス―ルフレウスが言い出した。

師匠が、軽く眉根を寄せる。

「どういうことでしょう?」

「トランベリオの坊主が言い出すからには……その程度の考えはあるう……。でなければ、この局面で……わざわざ持ち出すこともない……。無理に提議したあげく、結局却下されたのでは……自分の無能を晒すようなものだ……」

ルフレウスの言い分はわかる。

つまり、この老人はけしてロード・トランベリオを過小評価して はいないのだ。むしろ、己の地位も脅かしかねない大敵として認識 している。だからこそ、冠位決議グランド・ロールにも出ると言っ ている。

目を細めたまま、師匠も認めた。

「そうですね。なんらかの対策はあると考えた方がいいでしょう」

「おお……当然そうなろうさ。そして……わざわざトランベリオから招かれるほどに……お前はトランベリオと近しいらしい……」

嗄れ声が、不吉に石畳を這った。

そのまま、老人はこう続けたのである。

「ならば……お前がトランベリオの思惑を聞き出すことも……可能 ではないか……?」

眼鏡の内側の瞳は、光の反射で読み取れなかった。

しかし、その意味の恐ろしさに、隣で聞いているだけの自分も戦慄していた。

つまり、それは『スパイ行為を働いてこい』ということではないか。無論、イヴェットだって自称スパイを言い出すぐらいで、時計塔では誰が味方で誰が敵か分からないなんて状態は極めて普通のことなのだろう。

(.....だけど)

だけど、これは違う。

いくら自分の頭が貧しくても、これが通常の行為とまったく異なるぐらいは分かる。

だって、そうだ。仮にも君主ロードが、同じ君主ロードに、スパイ行為を促すなんていうのは、いくらなんでも重みが違いすぎる。時計塔を統べる王がそんな不逞を働いたと暴露されたら、エルメロイおよび現代魔術科の権威など一瞬で失墜するだろう。だからといって、検討もせずに撥ね付けては、ロード・ユリフィスに再び主導権イニシアティブを許す口実となってしまう。

受けても、拒否しても、致命傷となりかねない局面。

しばし間をおいて、師匠は口を開いた。

「利益は、あるのですか」

「ほう。一人前に、見返りを要求するか」

老人の問いかけに対して、師匠はかぶりを振り、ゆっくりと言ったのだ。

「いいえ、私ではありません。貴族主義が、アルビオンを再開発しないことによって受ける利益です」

一瞬、老人の顔が強張った。

「……こまっしゃくれたことを言うな。若造」

「失礼しました」

もう一度、師匠が頭を下げる。

「ですが、トランベリオに取り入れと言うのならば、そうした情報 は必要不可欠です。何の手土産も持たない相手を信用するほど、向 こうも甘くないでしょう」

(.....ん、ええと? 今のは?)

突然、自分は混乱に陥っていた。

師匠の言ってることが、分かるようで分からない。

貴族主義の利益について問うているのは分かるのだが、その切り返しで、師匠にスパイ行為などを勧めていた老人が、しかつめらしく息をついたのである。

「わかった。今の話は聞かなかったことでいい」

「ご期待に添えず、申しわけありません」

「……いいや、なるほどエルメロイが……あのまま時計塔から消えずに済んだ理由は……納得できたわ」

骨みたいな歯を剝いて、ルフレウスが笑う。

ついで、意外な単語が、その唇をついたのだ。

「思えば……ハートレスめも……似たところがあったか」

「ドクター・ハートレスの時代の現代魔術科は、貴族主義だったのですか?」

「いいや……。あれは派閥には……入っておらなんだ。あえていえば……中立主義だろうが……メルアステアに尻尾を振ったようでも……なかったな……」

師匠の質問に答えて、老人は最後の言葉を告げる。

「冠位決議グランド・ロールは三日後だ……。よく覚えておけ……」

そう言って、人差し指をあげると、宝石のひとつが奇怪に色づい た。

何らかの術式が、発動したらしかった。

瞬きした刹那、老人の姿が消えていたのだ。

残されたオルガマリーが、少しの間黙ってから、こちらに話しかけてきた。

「グレイ……だったわね」

と、呼びかける。

一応名前は覚えていたらしい。

「あ.....は、はい」

躊躇いがちに返事をすると、オルガマリーは二度ほど咳払いをして、居心地悪そうにテラスの椅子の背を撫でてから、続けた。

「ライネスによろしく。本当に、呆れるほどよくやるものね」

「……えっと、伝えます」

「ありがとう。お茶でもできたらよかったのにね」

そう言うと、オルガマリーの白い指がつうと動いた。

今度は、少女の姿も消え失せた。

ばかりか、そのときには、通りに多くの通行人が戻っていた。わいわいがやがやと喧騒が戻ってきて、自分たちがいる場所は、いつもどおりのロンドンへと回帰していた。

力が抜けたのか、師匠が半顔を押さえて、言う。

「ルフレウス翁にしろオルガマリーにしろ、どちらも実体じゃなかったんだろう。ほんの少し、この通りの位相をずらして、ほかの誰にも見られないように擬似的な『場』をつくりあげていただけだ。だったら、ずらした『場』にいるものが実体である必要はない。私ならともかく、ルフレウス翁にもオルガマリーにも児戯のごとき魔術だろうな」

「そういえば、今の切り返しって、先生が考えたんです?」

興味深そうに、イヴェットが小首をかしげる。

個人的な興味なのか、スパイ的な立場からの質問なのかは分からないが、師匠は努めて肺に新鮮な酸素を運ぼうとするように、深く息をついてから答えた。

「いいや、君の想像通り、ライネスからの入れ知恵だよ。向こうが 突然接触を取ってきた場合、高確率でトランベリオに取り入れとか 言ってくるだろうから、その場合、貴族主義側、もしくはユリフィ スのメリットは必ず言質を取っておけと。万が一、本当に民主主義 に鞍替えする場合、その情報が必要不可欠だし、そういう意味で 言ってると分かればロード・ユリフィスも加減するだろうからと。

ルフレウス翁にしてみれば、立場もあやふやで扱いづらい私など、いっそ民主主義派にいれてしまって、もろともに葬りたいと思ってるんだろうが、それで自分の手札まで開示するのは釣り合わないと考えたんだろう」

「……そう、だったんですか」

ほとほと感心してしまう。

時計塔の陰謀劇というのは、なるほどこのぐらいの手は互いに読みあってなければ成立しないらしい。正直、自分はさっきの場で交わされていた言葉を、半分も読み取れてなかったんじゃなかろうか。

(......あ、じゃあさっきのオルガマリーさんの言葉も)

つまり、今の師匠の言い分が、ライネスの入れ知恵と見極めたから、ということだろう。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの事件以降、時折ライネスとオルガマリーは接触していたようなので、ライネスの考えを見抜いてもおかしくない。

「ふん。正直に言えば、私もあんなやりとりにはついていけてない。 魔術はともかく、政治は専門じゃないからな」

少しやつれたようにも見える面持ちで、師匠は視線を通りの向こうにやった。

「イヴェット、君はここで帰りたまえ」

「ええっ?! なんか話の途中じゃないですか?! というか、可愛い 愛人を愉しいところに連れていくのはこれからじゃ!」

「帰りたまえ」

念を押すと、イヴェットはあだっぽく唇を尖らせた。

「......わかりました。でも先生、後で詳しいお話してください ね?」

未練げに可愛く舌打ちしていたイヴェットが遠ざかってから、自分は師匠に尋ねた。

「どうしたんですか、師匠」

「今の話だと、貴族主義の君主ロードについても例の可能性が残った」

何の可能性かは、こんな自分でも分かった。

「それって、君主ロードがハートレスの共犯者であるっていう―」

「ああ。ロード・ユリフィス─ルフレウス翁が、アルビオン再開発を拒む理由について掘りきれない。もちろん、さきほど言った表向きの理由がすべてという可能性も十分あるが、そこにハートレスが介在してる可能性も排除できんだろう。

オルガマリーについてはなおさらだ。彼女自身がハートレスと接触したかどうかはともかくとして、彼女の父である天体科の現君主マリスビリーは、そもそもハートレスに聖杯戦争の調査を依頼したことがある」

その通りだった。

ハートレスがフェイカーの召喚に成功したのは、そのときの調査 結果があってこそだ。マリスビリーがどのような意図をもって、聖 杯戦争を調査させたのかは謎のままだが、だからこそハートレスと いまだ接触している可能性は捨てきれない。

あまりにも多くの意図が絡んでいることに、気が遠くなりそうになった。

これが時計塔の日常ということだろうか。あるいは、その頂点である君主ロード同士のやりとりならではなのか。その区別も自分にはつかなかったが、ライネスが常に巻き込まれている事象の一部なのは間違いなかった。

自分のすぐ近くにありながら、ずっと見えていなかった世界。

「三日後と、言ってましたね」

早くも夜の気配に満たされつつあるロンドンの通りに、自分は呟いていた。

「二月二日。冠位決議グランド・ロールが、執り行われると……」

はたして、その相談は、ほかのメンバーと合流してから持ち上がった。

夜に、新しいホテルの部屋で、

「はい教授! 全然覚えられません!」

手を挙げたフラットが、堂々と言い放ったものだった。

一切躊躇なく、むしろにこにこと笑みを浮かべての態度は、授業中の彼とまったく変わらない。そのたびに師匠が鳩尾のあたりを撫でつつ、こめかみをひくつかせていたものだが──うん、こちらも一緒だ。

「今回は、ずいぶん関わっている人数が多いのは確かだが……」

「だったら、図にでもまとめてはいかがかな兄上」

師匠の苦痛がよほど嬉しいらしく、野花のように唇をほころばせていたライネスが、切り出した。

なお、背後にはスヴィンも控えている。最近はこちらをさほど嫌ってないのか、同じ部屋にいても、あまり威嚇しないでくれるのは嬉しい。師匠にそれだけ信頼されてるなら、たまに勉強でも付き合ってもらえれば本当に嬉しいのだけど、それは高望みというものだろう。

ふむ、と師匠が顎のあたりを撫でる。

「図解か。悪くないだろう。スヴィン、頼んでもいいか」

「わかりました」

素直にうなずいて、スヴィンが部屋のメモを破り、ボールペンを 手に取る。 そういえば、こうして筆記させることは、授業でも多かった。失踪したハートレスの弟子―ゲセルツの工房でも似たようにスヴィンが書いていたのだから、こういうとりまとめについて、師匠は彼を頼りにしているのだろう。

「じゃあ、まず冠位決議グランド・ロールのメンバーからいくか」「はい」

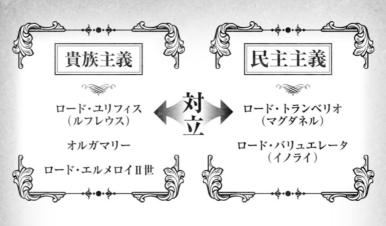
うなずいて、メモに、スヴィンが名前を書いていく。

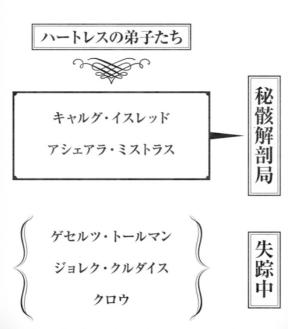
まず、民主主義派。

ロード・トランベリオ。

ロード・バリュエレータ。

昨日、メルヴィンの紹介で会食したふたりである。





ついで、貴族主義派。

ロード・ユリフィス。

ロード・アニムスフィア一の代行であるオルガマリー。

それから、ロード・エルメロイII世。一応、師匠はエルメロイの 伝統を考慮して、こちらの派閥ということになるらしい。

「現状だと、中立主義やバルトメロイが加わらなければ、十二家からはこの五家ということになるな。冠位決議グランド・ロールの出席率としては普通。ただし、うち四家で君主ロード本人が登壇しているあたりはいささか異例か」

「どういうことなんです、師匠?」

「つまり、本気度の高さだよ」

自分の質問に、師匠が答える。

「今回の冠位決議グランド・ロールで、トランベリオは本気で霊墓 アルビオンの再開発を取りに来てる。で、その本気度を感じたから こそ、ロード・ユリフィスも自ら出て来たというわけだ。いつもみ たいに代行にやらせてたら、格の違いであっさり飲み込まれる危険 もある」

実際、ロード・トランベリオ―マグダネルのカリスマ性というか、良きも悪しきも取り込んでしまいそうな器の大きさには特筆すべきものがあった。ルフレウスがそれを警戒していたとしても不思議はあるまい。

「で、中立主義が代行も出さない方向なのは、うっかり巻き込まれたくないからだろうな。本気度が高いほど、迂闊な行動が波紋を呼ぶし、恨みも買いかねない。貴族主義と民主主義が仲良く殺しあってるぐらいならいいけど、まじめに潰し合うなら距離を取りたい……というあたりだろう」

「なるほど……」

こうしてまとめられると、なんとかついていける。会議への出席だけでなく、欠席することにも意味があるのだと、妙なところで感心してしまっていた。

「これに、ハートレスと、その弟子五人だ。ただし三人は失踪中だ な」

再び、スヴィンが名前を書いていく。

さきほど、秘骸解剖局で出会った、ハートレスのふたりの弟子。

キャルグ・イスレッド。

アシェアラ・ミストラス。

ついで、失踪中の弟子たち。

ゲセルツ・トールマン。

ジョレク・クルダイス。

そして、

「この方が……最後のひとりですか?」

「ああ、彼はフリーランスであるという以外経歴が洗えなかったんだ。名前だけで、姓さえ不明。これだけ経歴が分からなくて、ほかのメンバーのことを考えると、元生還者だというのはほぼ間違いないだろうが」

クロウ。

最後に出てきた名前。橙子がいわく、すでに失踪していたという、ハートレスの弟子のひとり。

「だいたい、こんな感じだな」

「さすがル・シアンくん! 俺だとこんなのとっくに、芸術が爆発 しちゃってるよ!」 「いいから、お前は他人の読める論文にしろ! なんでそうなるのか、きちんと書け! ろくに読めないのに、ひょっとしたらトンデモない発見が隠れてるかもしれないからって、毎回シャルダン先生に通訳させられてる僕の身になれ!」

「なんだったら、共同執筆者になってくれてもいいよ!」

「絶対御免だ。そもそもお前、英雄史大戦のカードなら百枚でも一目で覚えるだろ!」

舌を出したスヴィンと、フラットがもつれあうのを無視して、師 匠はメモをじっくりと眺めた。

こつこつ、とテーブルを人差し指で叩く。

「問題は、ハートレスの弟子が失踪している理由だ」

「ふむ。兄上にも想像がつかないかい? 得意なホワイダニットの 領域だろう?」

「材料が少なすぎる。ここまで頻繁にキーワードとして浮上する以上、霊墓アルビオンは何らかのカタチで関係してはいるだろうが」

冠位決議グランド・ロールにせよ、ハートレスの弟子たちの出身にせよ、アルビオンの名前は何度となく持ち上がっている。師匠の言う通り、これで無関係なんて線は考えにくい。

だけど、どうつながってるのか、自分の頭ではまったく想像もつかなかった。

見つめるライネスが、片目をつむる。

「当面の謎だったら、もうひとつあるだろう? はたしてハートレスが昔の弟子を呼び集めているのか。あるいは──」

「―ライネス」

師匠が、名を呼んで止めたのだ。

厳しい面持ちだった。どうしても、それだけは認められないというような。

すぐにかぶりを振って、言葉を続けた。

「ひとまず、失踪したハートレスの弟子について、もう一度情報収 集が必要だろう。ライネス、悪いが一度スラーに戻って、弟子たち のことを調べ直してもらえないか」

「やれやれ。我が兄には、もう少し妹使いを考えていただきたいの だがね。で、兄はどうするつもりだね」

「生徒たちに見つかると厄介だが、私も同行するとしよう」

師匠が言うと、もみあってたフラットが、ひょいと視線を動かした。

「わ! それはことですよ教授! いまのうちに隠身の魔術を考えておかないと!」

「お前は、先に自分が目立たないように、口を縫う魔術でも考えて おけ」

「おお、それって名案だね! 赤ずきんが食べられないように狼のお口をロック! パックマンもたちまちアイデンティティ喪失! あれ、ル・シアンくんとパックマンって案外似てる? つるっとしたところとか」

「断じて似てない!」

嚙みつくように、スヴィンが言う。

しかし、その計画通りとはならなかった。

翌朝すぐに発覚した事件で、師匠が呼び出されたからだった。

急遽呼ばれたものの、出入りが許可されたのは、自分と師匠だけだった。

ライネスたちは予定通り調査に行くことになり、ふたりで解剖局 の門をくぐって、昨日と同じようにエレベーターへと乗った。

そう、秘骸解剖局だった。

ただし、地下四十五階の現場には、先んじて見覚えのある相手が 待っていた。

「.....え?」

「ミス化野」

自分は瞬きし、師匠が名を呼んだ。

地下四十五階とかいう場所にあっても、彼女の佇まいは変わらなかった。日本の民族衣装だという振り袖の艶あでやかさはもちろん、夜を漉すいたかのごとき黒髪も、彼女の周囲数メートルだけを静けさで隔離するようだった。

優美に眼鏡の蔓を持ち上げ、化野菱理は唇に淡い笑みを浮かべた。

「こちらで殺人事件があったということで、法政科として立ち会い に参りました」

考えてみれば、初めて彼女に出会った事件からしても、似た立場であった。それこそ法政科の仕事ということだろう。ひとつ間違えれば、簡単に無法地帯となるだろう魔術世界において、監視と刑事機能を受け持つ機関。

自分が納得したところで、師匠は唇をへの字に歪めた。

「好きにしてくれ」

「では、そのように」

と、菱理はうなずいた。

すぐ、職員に連れられて、現場の研究室に入ったところで、

「.....んっ!」

たちこめた臭気に、思わず自分は鼻のあたりを覆った。

師匠も同じように、口元に手をやった。あらかじめ調べていたからか、菱理だけはいつものままだった。

広い部屋だった。

面積だけなら、最初のホールと同じぐらいだが、今回は用途も分からぬさまざまな設備がいくつも配置されていた。魔術のものなのか科学のものなのかも、自分の浅はかな知識では判然としない。ただ、幾多のケーブルを吐き出した装置や、割れたポッドなどは、病院で使われそうな装備だとか、そんな感想を抱いていた。

もっとも、それも部屋を見回すまでの、数秒のこと。

現実のものと思われない……というより、現実と非現実が混じり合ってるという意味で、いままで見てきた光景の中でも突出していた。

研究所らしき金属の床に、何頭もの怪物が倒れ伏していたのだ。

昨日の、アルビオンの複キ合メ獣ラも、それとはまったく違うカタチの怪物もいた。あるいはねじくれた角を生やした巨大な甲虫であり、あるいはびっしりと鋼の鱗で身を纏う大蜥蜴とかげだったりした。

そのことごとくが、死んでいた。

撒き散らされた体液ひとつとっても、さまざまであった。青や緑はまだしも、白い血液など想像もしない。後の師匠の話によれば、科学の人工血液でも白いそれが模索されてるらしいのだが、すでに神秘の生物が実現しているなどと知れば、科学者たちはどんな顔をするだろうか。

師匠が、少しだけ身をかがめた。

怪物たちの身体にも研究室のあちこちにも、いくつもの爪痕や酸で溶かされたような跡が残っていた。どうやら、この場で戦いがあったらしい。自分とイヴェットとで協力しても、たった一頭であれだけ手こずった怪物が、この場ではざっと見て七体以上、殺戮されていたのである。

そして、自分たちが呼ばれた理由は、この研究室の一番奥だっ た。

返り血は、当然のことだが真っ赤であった。背後の壁も床も、驚くほどの範囲で血にまみれていた。

そこでは、キャルグが死んでいたのである。

いや。

キャルグだったもの、と言う方がふさわしいか。

死体の損壊が、あまりにも酷かったからだ。バラバラ死体などというレベルではない。あたかも赤子に鋏を渡し、一時間もぬいぐるみを好きに切り裂かせたごとくに、滅茶苦茶だった。かろうじて頭部らしきものは窺えるが、これでは身体のパーツを繋ぎ合わせることさえ困難だろう。正式な警察の解剖でも受ければ別かもしれないが、この解剖局にまともな司法の手が及ぶとも思えない。

骨も肉も、内臓も脂肪も筋肉も、何もかもが撹かく拌はんされていた。

「なぜ……こんな殺し方を……」

「……分からん」

師匠が、かぶりを振った。

これまでの事件で、さまざまな死体を見てきた。しかし、これほどに無残な死体を見たのは初めてだった。

それでも師匠は変わらぬ表情で、少しだけ、下唇を嚙んだのみ。

代わりに、隣の菱理が、入り口で控えた職員には届かぬ程度の声で、囁きかけた。

「兄だと、お思いですか?」

「ほかにいまい。いかに強大な魔術師でも、この数のアルビオンの怪物を相手取るのは困難極まる。だが、あのサーヴァント―フェイカーならやってのけるだろう」

「そうですね。彼女なら、たとえ宝具を使わずとも」

菱理の声音には、冷え冷えとした緊張感が宿っていた。

彼女もまた、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでフェイカーの戦いを目の当たりにしたのだった。かの恐るべき宝具―イスカンダルの戦車を借り受けたという魔天の車輪へカティック・ホイールを使わずとも、フェイカーが恐るべき魔術師であるという事実を知っている。

「神代の魔術師は、最終的な魔術の作用そのものは同じでも、術式 も強度もまるで違ってしまっている。アルビオンの怪物は魔力を弾 くものも多いというが、よほど高位の能力でなければ、フェイカー のそれには役に立たないだろう」

「私たち現代の魔術師と違って、神代の魔術師は神秘そのものに近かったですからね」

「ああ。だからこそ、彼らは根源を目指す必要もなかった。私たちにとっては手の届かない、遥か彼方の真理でも、彼らにしてみれば 至極身近なものだったから」

師匠の言葉は、何万光年も離れた星を語るのに似ていた。

「彼女にしてみれば、私たちの衝動の方が謎かもしれません」

同時に、しみじみとした菱理の言葉は、法政科たる彼女にも現代の魔術師として根源を希求する情熱がある―もしくはあったということか。

生前のキャルグと師匠も、その大義について話していたのを、覚えている。フェイカーと現代の魔術師の隔たりは、それほどということだろう。

「いずれにせよ」

と、菱理が続けた。

「ドクター・ハートレスは、弟子を殺しているということかし ら?」

師匠はすぐに返さなかった。

だが、それが師匠の想像と一致していることは、一瞬強張った肩からも明白だった。

「それが……ライネスさんが、昨夜言いかけていたことですか」

「.....ああ」

認めて、師匠がうなずいた。

「魔術師において、弟子殺しはタブーの一種だ」

この人にとっては、なおさらだろうと思った。けして、生徒の誰 もを無差別に愛しているというわけではない。熱血教師なんて言葉 は縁遠いだろう。

だけど―

「事例として、弟子殺しが皆無というわけではない。逆に、師匠殺しの例だっていくつかあるからな。だが、比較して言えば、師匠殺し以上に弟子殺しはタブー視される。それは魔術師の本能に反した行為だからだ」

そう、以前、師匠は言っていた。

魔術師は弟子を守り抜くものなのだと。

それは、魔術師が次代に託す生物だからだ。己の代だけではかなわない、根源への到達という悲願を、子孫や弟子の世代に託すからだ。

ああ、師匠はこの本能に、多分誰よりも忠実なのだ。

たとえ才能は欠けているとしても、どんな魔術師よりも魔術師たらんとしている。それはきっと、多くの生徒に夢を見るということ

だ。フラットにせよスヴィンにせよ、ルヴィアやイヴェットやほかの多くの生徒たちにせよ、師匠はその未来に夢を託している。

「それに……なぜ、いままでと違って、キャルグだけこんな殺し方 を?」

ほかの弟子は失踪したのだという。

仮に見えないところで殺したのだとしても、露見しないように、 という配慮が垣間見えていた。どうして、こんな派手な殺し方をこ の場で行う必要があったのか。

師匠も菱理も、その答えを持たないらしかった。

しばらく黙り込み、死体を観察しながら、

「だが、いくつか分かったことはある」

と、師匠が言う。

「昨日、ここでアルビオンの怪物が解放されて、私たちに襲いかかったのは事故なんかじゃない」

突然、話が自分の戦いに舞い戻って、面食らってしまった。

「……どういうことです?」

「キャルグはどういう経路でかはともかく、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、私たちとフェイカーが戦ったことを知っていたのだろう。経緯はともかくとして、私たちが撃退に成功したとか、そんな結末も聞いていたかもしれない」

言葉は、血まみれの研究室の床を這った。

「そこから、フェイカーと戦うための目安として、この怪物が使われたんだろう。フェイカーといい勝負をした私たちと張り合えるなら、フェイカーにも対抗できるだろうと。ああ、イヴェットの入局許可をあっさり出したわけだ。その方が魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの場合と近いデータが取れるからな。……実際のところ、目安としては役に立たなかったらしいが」

......それは、当然だ。

だって、あのとき自分たちがフェイカーを撃退できたのは、さまざまな幸運が重なったがゆえの結果にすぎない。宝石の魔眼を覚醒させた代行者、オルガマリーの大魔術による支援など、どれひとつが欠けても自分たちはこの場にいられなかっただろう。

だから、自分たちでは防戦が手一杯だったアルビオンの怪物でさえ、フェイカーはいともたやすく殺戮したに違いない。かほどにサーヴァントの戦闘能力は人間と隔絶している。あるいは、それこそあの蒼崎橙子や恐るべき君主ロードたちならば、異なるのかもしれないが.....。

「……でも、それだとキャルグさんは」

「ハートレスとフェイカーに襲われる可能性を、十分把握していた はずだ」

断言した師匠を、自分は見返した。

ならば、キャルグはひとりで迎え撃つために用意を整えていたのだろう。秘骸解剖局を利用して怪物を揃えて、戦いのための場をつくりあげて、それでも敗北したのか。

しばらくしゃがみ込み、死体を調べていた師匠が、立ち上がる。

「それに、この現場の異常性もだ」

「異常性、ですか」

「ああ。これじゃ、密室だろう」

と、師匠が述べたのだ。

密室、という定義自体はもちろん分かる。以前の事件でも、似た 出来事はあった。犯人が出入り不可能な──つまり犯行不能な現場の こと。幾多のミステリ小説で使われてきた言葉が、ここに来て、ま た立ち現れるとは。

「もとより地下四十五階。行き来の方法はさきほどのエレベーター ぐらいだ。職員以外の出入りが極めて難しいのは、私たちが入って きたときのカードキーなどで証明されている。いくらハートレスや フェイカーといえど、あそこを気付かれずに侵入するのは難しいだ ろう」 「魔術師なら、瞬間移動とかできるんじゃないですか? 壁をくぐ りぬけたりとか」

自分の問いに、師匠はかぶりを振った。

「空間移動は、ほぼ魔法の領域だ。神代の魔術師であるフェイカーなら、ひょっとするとこなすかもしれないが、それでもこの場には厳重な結界が張ってある。いかに彼女といえど、それを破らずに魔術で侵入することは不可能だろう。壁をくぐりぬけるのも同様の理由で、結界を破ることになる」

なんとなく、理屈はわかる。

神代の理屈は規格外だが、まったく理屈が異なっているわけではない。弓矢と銃ほどに違いがあるとしても、結局相手の身体を貫いて殺害するのが目的には違いあるまい。そして、身体を貫いたのなら、矢だろうが弾丸だろうが、痕跡は残るということだ。

「……一体、どうやって?」

師匠は、すぐに答えを出そうとはしなかった。

それから、背後へと振り返った。

「いくつか質問させていただきたいが、かまいませんか」

「もちろんです」

うなずいた職員に、ではと前置きしてから、

「何故、私を呼んだのです?」

と、訊いたのだ。

「秘骸解剖局は、時計塔でありながら時計塔ではない。たとえ死者が出ようとも、いやむしろそれほどの事態だからこそ、組織の内側だけで解決しようとするのが普通だろう。法政科であるミス化野はともかくとして、君主である私を呼ぶ必要などない」

「キャルグさまのお申し付けでした」

「……キャルグさん?」

それは、まさに死者の名ではないか。

「はい。自分に万が一のことがあれば、エルメロイII世を呼び出すように、と以前から言われていました」

「待て。それはいつから言われていた?」

奇妙な言い方に気づいて、師匠が片眉をあげた。

すると、職員は平然と答えたものだった。

「二ヶ月ほど前になります」

「......師匠」

「ああ、非合理だ。私と彼が初めて出会ったのは、昨日のことだ ぞ」

間違いない。

だとしたら、キャルグはずっと前から、師匠に注目していたことになる。もちろん、新しい君主として、師匠は何かと目立つ立ち位置だが、だからといって事件があったら呼べと伝えるなんて、普通考えるものではないだろう。

それこそ、師匠がベーカー街の名探偵というのなら話も別だが、 そんなことはない。あくまで師匠の本職は君主であり、時計塔の講 師なのだ。

一旦沈黙して、師匠は周囲を見回した。

「.....アシェアラ・ミストラスはどうした?」

「連絡が不行き届きとなっております」

^г.....! т

自分の血流が、何割か速くなったように感じた。

「失踪の可能性は?」

「ございますね。こちらは現在確認中です」

緊張の度合いがさらに一段増して、肩にのしかかるようだった。 こちらがまごついている間に、相手がチェスの手をいくつも進めて いた感覚。それによって、戦局がどれほど悪化しているかさえ、今 の自分たちには分からない。

改めて、師匠が現場を確認する。

とりわけ、無残なキャルグの死体を見つめて、今度は菱理に尋ねた。

「降霊はしたのか」

「もちろん。残念ながら、死後情報はロックされていました。秘骸解剖局の重鎮ならば当然ですね。でなければ、死体から、重要な機密情報を抜かれる可能性がありますから」

どうやら、魔術師ならではの、セキュリティロックみたいなものらしい。

魔術とは他人に知られてはならないものだ。とりわけ、その流派の奥義ともなれば、同じ魔術師相手でさえ必死にひた隠しにする。それゆえ、死体から不用意な情報が搾取されないよう、高位の魔術師ほどそうした魔術への防御策を生前から打っておくのが普通だそうだ。

とはいえ、この状況では単に手がかりが減ったというだけでもある。

そこで、師匠が、ふと呟いたのだ。

「......ほかの弟子は、降霊魔術に対してロックされていなかった?」

「どうして、そう思うんですか」

「もともと、迷宮の生還者サヴァイバーは何らかの要職にでもついていなければ、この手のセキュリティをまじめにやる必要は薄い。なにしろ、アルビオンへ挑む者の多くが、魔術師でなく魔術使いだ。彼らの目的は魔術を使って成功することであって、魔術によって根源に挑むことじゃない」

確か、魔術使いとは魔術を手段としてのみ用いる人間のことだ。

魔術師は根源を目指すため、ありとあらゆる犠牲を払い、次世代にまでそれを託す―強いる生物である。だからこそ魔術師と魔術使いは、同じ魔術を使うとしても、厳格に区別されるのだとか、以前師匠は言っていた。ある種の魔術師にとって、魔術使いという言葉は最大級の侮辱ですらあると。

でも、今の言葉からすると、

「……つまり、誰かに死体が見つかれば、情報が漏れる可能性がある?」

だから、いままでの被害者はすべて死体ごと処理されていた? いや、殺されたと限ったものではないが、どうしてもそういう風に 思考が進むのは止められなかった。

師匠は服が汚れるのも構わず、グチャグチャになった死体に触れている。墓守の自分もそうだが、師匠はこの手の死体や状況に不思議と耐性がある。無論魔術師たるもの、少々のグロテスクさには怯ひるんだりしないものだろうが、師匠の場合はそうした魔術師の規範とも少し異なっている気がした。

かつて、遥かに酷いものを見たからこの程度は気にならない、みたいな。

そこで、一瞬、師匠の指が止まった。

「どうしましたか、エルメロイII世?」

「いえ、何も」

と、かぶりを振って手を引き戻し、ハンカチで拭く。

菱理は、キャルグの死体を改めて見つめ、吐息をこぼすみたいに 言った。

「兄の、生徒ですか」

「そうなりますね。私も聞きそびれてましたが、あなたにとって兄 ──ハートレスはどんな方でしたか」 師匠が尋ねると、菱理は美しい眉宇をかすかに寄せた。

「さほど接触があったわけではありません。義理の兄妹とはいって も、そもそもノーリッジはそうした子供を大量に抱えてますから ね」

以前、その話を師匠に聞いた。

現代魔術科を打ち立てた貴族──いまのノーリッジ卿には、不思議な人徳があった。

いわく、時計塔の足長おじさん。見込んだ子弟には惜しみなく援助を与え、とりわけ気に入った相手は養子に引き込んでしまうのだとか。

菱理もハートレスも、そのようにして見出され、義理の兄妹となったのだという。

「ただ、学部長として、多くの生徒たちとよく話していたように思います」

それは今ここで死んでいる生徒──キャルグやアシェアラの証言と 一致する。

弟子思いの先生だったという、かつてのハートレス。

だが、それは今こうして弟子を殺したハートレスの像と、あまりに乖離している。一体どんなピースを嵌めれば、その溝を埋められるのか。

師匠は、数秒ほどおいて、こう尋ねる。

「ミス化野。あまりに馬鹿げた失礼な質問ではありますが……ドクター・ハートレスは、魔術使いというわけではなかったですね?」

「ええ、もちろんです。そもそも魔術使いが学部長に選ばれる道理 がありません」

師匠の問いに、菱理が首を傾げた。

それはそうだろう。時計塔は学問の府だ。いかにハートレスが変わり種といっても、そこに魔術使いの交じる余地はなさそうに思え

る。

「……なるほど。……古い家だと冠位指定グランド・オーダーによってはありえるが、ハートレスの場合この線もない」

「何か、気づきましたか」

「いえ、今のはちょっとした確認だけです。何らかの仮説まで組み立てられれば、また報告させていただきます。ひとまず、これで失礼する。──行くぞ、グレイ」

突然踵を返して、師匠が足早に立ち去り、あわてて自分も菱理と 職員に一礼してから、その後を追ったのであった。 屋敷では、何人ものメイドや従僕たちが忙しく行き来していた。

彼らにしても、特別な客が訪れているためだった。ロード・バリュエレータの従僕たちとなれば、いずれも彼らに古くより仕えてきた魔術師の家系ばかりだが、やはり同じ格の君主ロードが客となれば、緊張するのはいかんともしがたい。

はたして、青空を丸く切り取った窓際で、その主人はワインを嗜んでいた。

「まあ、悪くはないがね。マグダネル坊や」

「その呼び方はやめてほしいな。レディ・イノライ」

鷹揚に手を広げて、ロード・トランベリオ─マグダネルが言う。

ばちんと大袈裟なウィンクを伴っていたが、イノライは興味の薄 そうな顔で続ける。

「霊墓アルビオンの再開発はいい。君の手札もおおよそは理解したさ。もうひとつふたつは隠してるだろうが、それはオレだって他人のことを言えたガラじゃない。だから、バリュエレータとしては君に票を投じよう」

「ははは、さすがロード・バリュエレータ! 寛大でいてくれてあ りがたい」

快笑して、マグダネルは客室のもうひとりを向いた。

「僕としては、メルヴィンくんの気持ちも気になってるんだが。なにしろ、場合によっては、君の親友にいささかのペナルティを加えなければならない。一族の長としては、分家のそういう心持ちも配慮しなければならないだろう?」

「もちろんウェイバーは私の大親友です」

メルヴィンが断言する。

こちらは、少し離れたテーブルで、同じく赤ワインを飲んでいた。

なお彼の吐血癖がすでに理解されているためか、テーブルにはシルクのハンカチが数枚ほど載せられている。赤ワインを選んだのも、吐血を目立たせないためなのかもしれない。君主ロードのふたりともがそこに触れないあたり、魔術師ならば奇矯な癖のひとつやふたつは当然だろう、ぐらいの構えだった。

「ですが、トランベリオ本家の命とあれば、いかに大親友の身代がかかっているとはいえ、協力せざるを得ないでしょう」

「へえ、本当か?」

と、これはイノライが口を挟んだ。

「オレはかまわんがね。君のようなタイプは時々見かける。つまるところ、自分の趣味のためなら、他人をいくら巻き込んでも罪悪感のかけらも感じないタイプだ。本家ぐらい、必要なら自爆に巻き込んでしまえとか、思ってないか?」

「いやいやまさか」

メルヴィンは、にこやかに笑った。さきほどのマグダネルとこういう凌ぎ方が似てるあたり、トランベリオの血かもしれない。

「ところで、ひとつ質問していいですか」

と、マグダネルに向かって、手をあげた。

「本当に、時計塔にとって、再開発が必須だと思ってます?」

「もちろんだよ」

マグダネルの太い首が、上下に揺れた。

「私たちは根源に辿り着くことこそを、第一命題にすべきだ。そして、それを第一命題にする以上、少しでも有利な条件があるならば、妥協すべきじゃない。現代に生きる魔術師として、霊墓アルビオンからの呪体供給を増やすことは、絶対欠かせぬ条件だ」

マグダネルの声音に、ただならぬ情熱がこもっていることは疑う 余地もなかった。

そこには大義がある。

そこには道義がある。

単なる権力抗争の手段ではなく、多くの魔術師を率いる者として、自らの選択に確かな誇りと責任を持っているのだと感じさせるだけの何かを、マグダネルは備えていた。

あるいは、歴史だったかもしれない。

本来、百歳に至るのも難しい人間ごときでは得られぬ境地。

しかし、年月を重ねた家系は、そういう生まれながらの『王』を 時折輩出する。

マグダネルは、まさしく『王』のひとりであった。

「ともあれ大舞台だ! 我々も精一杯楽しもうじゃないか!」

*

その砦は、テムズ川を見下ろす沿岸にあった。

かつては、戦に備えた砦だったものが、やがて武器庫や銀行など 幾多の用途に用いられるようになり、ついには身分の高い貴族など への監獄としても使われるようになった場だ。だからこそ、この城 塞では王族などの処刑も執り行われ、その無念や嘆きを想像して、 さまざまな伝説が生まれた。

古き王妃の幽霊が出るだとか、飼育されているワタリガラスは アーサー王が魔法で姿を変えられたものだとか……そういったもの だ。

城塞の名を、ロンドン塔。

この街でも有数の観光地となった場所だが、今は清掃のためとい

う名目で閉鎖されており、不思議なことに清掃人は誰ひとりおらず、代わりにひとりの老人が闊歩していた。

長い白髪を撫でつけ、眼鏡をかけた老人だ。

ロード・ユリフィス―ルフレウス・ヌァザレ・ユリフィス。

彼がロンドン塔を定期的に訪れるのは、もちろん遊覧のためではない。

閉鎖されたこの城塞を、老人が一歩ずつ踏みしめるたび、何かが 吸い込まれるような奇妙な圧が生じたのだ。ある種の魔術師であれ ば、無形のエネルギーが老人に吸収されていくのを感じ取れただろ う。

つまり、死者の魔力である。

これは、必ずしも死者そのものが放つ魔力とは限らない。

死者という『概念』を核として、土地の霊脈レイラインから滲出する大マ源ナ、はたまた多くの観光客が無意識に漏出する精才気ド、こうしたものを総合して、時計塔では死者の魔力とみなしているのだ。

降霊科ユリフィスの君主ロードであるルフレウスは、古くよりの 契約や政治的な駆け引きによって、こうした魔力を回収するための 土地を、いくつか確保しているのだった。

ゆっくりとした歩みが、中央のホワイト・タワーのあたりで止まった。

「……待たせたかな……」

「いいえ、こんな観光地に来ること、滅多にありませんから」

銀の髪を押さえて、オルガマリーは片足を斜め後ろに引くことで、老人に敬意を表した。

「あなたの、思い通りに進んでるのですか?」

ちら、と少女はルフレウスの様子を窺った。

多くの宝石を、老人は纏っている。

指輪にも首飾りにも、思わず目を剝くほどの大ぶりな宝石がは まっているが、けして下品な印象とはなっていない。しかし、それ でいて老人を飾り立てるというよりは、死者の副葬品というべき、 暗いイメージが強かった。

降霊科の君主ロードとはこういうものかもしれない。

いずれの宝石も、強力極まりない魔術礼装の類であると、その筋の者ならば瞬時に見抜くだろう。さきほど回収した、莫大な死者の魔力も、その宝石ひとつに遠く及ばない。身ひとつに備えた装飾品だけで、この老人は頑強なる要塞にも等しかった。

「……さて」

と、老人は肯定も否定もせず、ただ目を細めた。

深い皺に、瞳が埋もれたようにも見えた。

「結局のところ……こんなのは領地の取り合いと一緒だ……。トランベリオめが……どれほど、この会議のために理を詰め……根まわしを終わらせたか……だ」

本質的に、戦争が開戦前に決着をつけているのと同様、こうした 会議も始まる前に決着はついていると、老人は言っている。

「いずれにせよ……我々は常に秩序を保たねばならない。……この 魔術世界の秩序を」

かの老人にしてみれば、それはもうもはや尋ねることも虚しくなるほどの時間、その魂に刻んできた事柄であった。いつかユリフィスの家に与えられた課題を解くためにも、魔術世界の安寧を保ち続けねばならぬと、長く長く、永久ほどに長く、言い聞かせてきたのだから。

黄色い歯を剝き出しにして、老人は嗤う。

「今代のロード・エルメロイは……どこまでそれを分かっているかな……」

解剖局から十分距離を取って、師匠はコートのポケットに隠して いたものを見せた。

「キャルグの死体には、これが隠れていた」

「石? いえ、金属ですか」

ごく薄くて、小さな金属片だった。

表面に、文字らしき刻みが見て取れた。顔を近づげてようやく読める程度のうっすらとした文字だが、どうやらアルファベットと数字らしい。

「昨夜の戦いで、キャルグは金属の檻をつくってみせた。おそらく、同様の魔術で、死の間際に自分の体内にメッセージを書いた金属片を発生させたのだろう。最も魔術が働きやすいのは、自分の身の内だからな」

なるほど、魔術師ならばそんなダイイングメッセージもありえるのか。

自分は詳しくないけれど、確か簡素な魔術ならば一小節ワンカウントや一工程シングルアクション──後者は詠唱すらなく、魔力を通すだけで発現したはずだ。キャルグがやった魔術も、そうしたひとつだったのだろう。

「おそらく、あれは私に向けてのメッセージだ。降霊もろくにできぬのに、死体を弄いじり回すような魔術師は私ぐらいだからな」

「でも、これって」

「……ああ、住所だな」

イギリスの住所は、建物ごとに七桁ほどのポストコードで表される。師匠の手のひらに載った金属片の文字列は、そうしたひとつに

思えた。

唾を吞み込み、気になったことを尋ねる。

「菱理さんには伝えないんですか」

「必ずしも、法政科が信用できるとは限らない」

師匠の言葉は、これまでの流れを考えれば、嫌というほどよく分かった。

冠位決議グランド・ロールにまつわる誰かが、ハートレスとつながっている可能性が高い以上、情報を漏らすことは危険すぎる。

「また、私に向けたメッセージだとしても、どういう意味で残した のかはわからない。最悪、ハートレスはおろか、フェイカーとも遭 遇する可能性がある。フラットやスヴィンを連れて行くには、見逃 せない危険だ」

その言葉に、ほんの少し意外な心持ちがした。

「てっきり、今回については、師匠は生徒たちを巻き込んでしまうことを諦めたのかと」

「そんなわけないだろう。死の危機に晒すことが仕方ないこともあるが、あくまでそれは結果の話だ。回避できるなら回避するとも」

「でも、拙は連れて行ってくださるのですね」

少し遅れて、師匠は困ったように眉をひそめた。

ため息をつき、いかにも居心地悪そうに、口にした。

「君がいないと、死ぬ」

前も、同じことを聞いた。

なぜ、同じ言葉が、今こんなにも誇らしいのだろう。じんわりと、胸元に染み込む何かがあった。とてもそれは温かくて、指先で触れると、力強い鼓動になって返ってきた。

右肩の固定具で、小さく笑い声があがった。

「イッヒヒヒヒ、頼りにされるのは悪くないな!」

「……はい、悪く、ないです」

自分の返事に、アッドが一瞬黙りこくり、すぐにまた笑い出した。

「ああ、そうだ! 悪くない! 悪くないとも! ヒヒヒ、いい返事をしやがるようになりやがったな泣き虫グレイ!」

*

黴かびくさい書庫で、私は携帯電話を耳にあてていた。

「ふむ。やっぱりかからないな」

携帯を耳から離して、通話ボタンを切る。

興味深そうに覗き込んでいたフラットが、ことりと小首をかしげた。

「教授、まだ連絡取れないんですか」

「残念ながら」

フラットの言葉に、肩をすくめる。

「なにしろ解剖局は秘密主義だ。昨日イヴェットの出入りが認められただけで、私としては意外に思ったぐらいでね。あそこのセキュリティは電波なんかも対応してる。そもそも地下に潜ってる間は届くはずもないしな」

もっとも、電話がかからないのが解剖局のせいか、何かしら都合が悪いと見た兄が電源を切っているからかは、私にも見当がつかないのだが。

現代魔術科の街・スラー。

その書庫であった。

ただし、こちらの書庫に収められているのは学術用の魔術書ではなく、現代魔術科における有象無象の保存記録である。生徒や講師の経歴、呪体の購入や消費の帳簿、教室の霊脈レイラインの活性記録など、さまざまな書類がここには積み重なっている。

もちろん、通常は出入り禁止の場なのだが、そこは私もエルメロイ派の次期後継者なのだから、フリーパスの魔術鍵ぐらいは持ち合わせているわけだ。

その上で、こそこそしているのは、休講中の兄を捜すためと、わりと過激派になってる一団から身を隠すためであった。うっかり発見されれば、先生はどうしているのか、お前たちが隠しているのではないかと、そこら中から質問攻めにあいかねない。

結果積み上がった書類を、片端から処理しているわけなのだが、 三人 + 一体で極めて地味な調査を続けながら、私はひとつの結論を 導きつつあった。

「……やっぱり、抜けがあるな」

+ 一体──つまり我が水銀メイドであるトリムマウの差し出した計算結果に、私は顎をさする。

「でも、ハートレスについては一通り調べてましたよね?! 前も、俺とル・シアンくんで片っ端から。クッキングファイターみたいに書類を投げたりぶつけたりしつつ、この書庫を漁あさったでしょ!」

「うん、なぜクッキングとか言いながら投げたりぶつけたりするのは分からないが、ゲームの話はともかく、ハートレス本人は調べたな」

マニアックな話題は無視しつつ、話を続ける。

「だけど、弟子はその限りじゃない。そもそも迷宮の生還者サヴァイバーだったなんて情報も、あの蒼崎橙子に会わなければ分からなかった」

なにしろ、記録が削除されまくっていて、弟子の名前を探り出すだけでも一苦労だったのだ。

「ここまで情報が出てくると、またいくつか調べ方が出てくるって

わけだ。そもそも、きちんと物事を記録する現代社会において、人間の痕跡を消すってのは困難だ。たとえそれが、魔術師の世界であってもね。弟子の人数やその後が分かれば、あれこれ辿りようが出てくる寸法さ」

「五人組のチームで、ひとりが不明、ふたりがフリーランス、ふたりが秘骸解剖局に行ったとかですか」

「それだ」

スヴィンの指摘に、私は控えめに指を鳴らす。なにしろ生徒に見つけられるのは怖いからね。

「おおよそ十数年前、当時の生還者サヴァイバーのチームはハートレスの弟子になったんだが、そのあたりの時期を特定すると、現代 魔術科の帳簿にちょっとしたブレが見られる。てっきりノーリッジ 卿の裏金か何かかと思っていたんだが、それだとあの爺さんはもう少しおおっぴらにばらまくしな」

「……それって、ひょっとしてアルビオンの密輸ですか」

あのとき、ロード・トランベリオとの会話に出てきた事項。

その発端がそもそも現代魔術科だとしたら―

(一うん、わりとアウトすぎるな!)

この場で回れ右して、見なかったフリをしたい。先代社長がやらかしていた汚職みたいなものだ。どこからどうつついても、私たちに不利な材料しか出てきそうにない。

しかし、弱みだからこそ調べておかねば、なおさら致命傷という のも真実だ。

「まあ、そのへんから、もうちょっと時期と呪体と金の流れを特定 したい。細かい論理の整合はともかく、フラットも直感は得意だろ う。数字扱いの得意なスヴィンとのタッグに期待させてほしい」

「……なるっほど! よくわかりました! じゃあル・シアンくん、今週はイースターエッグでレッツフュージョンだね!」

無駄にガッツポーズを取ったところで、不意にスヴィンが天窓を

向いたのだ。

「ん、どうしたの、ル・シアンくん」

「……いま、外で妙な臭いがあった気がしたけど」

すんすんと、鼻をうごめかせる。

「気のせい、だったか?」

獲物を取り逃がした猟犬のように、少年は不機嫌そうに眉根を寄せたのだった。

*

「一おっと、危ない」

電灯にもたれかかった女が、小さく声をあげた。

一見キャリアウーマン風の、東洋人の女である。

少しして、その手元に、蜉かげ蝣ろうのごときカタチが舞い降り たのだ。

絡から繰くりじかけの、蜉蝣だった。

水晶か何かでつくられているらしく、その身体はすべてが透き

通っていた。折りたたんだ はほのかな輝きを孕はらみ、妖しい美しさに満ちている。子供の手のひらにだって収まるだろうサイズの内側で、糸も撥ば条ねも歯車も完璧なバランスで組み合わさっていた。

そのすべてが水晶片と摩擦とほんのわずかな魔力のやりとりでできあがっているのだと知れば、これは高位の魔術師ですら、嫉妬と驚愕に値する超絶技巧の礼装であった。

しかし。

通行人の誰も、その水晶蜉蝣に反応しない。そもそも見えてない のだ。認識阻害の魔術の効用だった。

「無音無臭は徹底していたはずなんだがね。ふむ、彼の嗅いでいるのは、つまるところ臭いではないな。まったく、あそこの生徒は一筋縄ではいかない。あまり愉しくしてくれるなと文句をつけたくなるな」

蒼崎橙子が、愉しげに唇の端をつりあげる。

あの工房で別れた時から、密やかに使い魔をつけていたのだった。獣性魔術の少年の鋭さは分かっていたから十分距離を取っていたはずなのだが、スラーの結界の内側に入ったところで、かすかな違和感を抱かれてしまったらしい。

「常道だと、一旦引くラインだが」

つい、と視線をあげる。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジの街─スラーの通りはその先であった。

「とはいえ、やはりここが始まりだ。冠位決議グランド・ロールまでの時間もない。エルメロイII世には悪いが、私ももう少し調べさせてもらおうか」

正体を窺いしれぬ鋭い光を瞳に宿し、女は歩き始める。

手作りの水晶蜉蝣もまた、冬の魔都の陽光を受けて、一切の音を立てず舞い上がった。

キャルグの金属片に従って、師匠とタクシーに乗った。

ロンドン北部のリージェンツ・パークから、さらに北上。

ベルサイズ・パーク近辺で降りて、そこからは徒歩で進んだ。

このあたりまで来ると、首都の一部というよりも、単に郊外の落ち着いた住宅地という雰囲気が強い。赤い煉瓦の建物が長く軒を連ね、まるで行儀よく並んだロシア人形みたいな趣を湛えていた。

冬のしんとした光が、ここでは停止しているように思える。

何十年も、きっとこのままだったろう景色。そこかしこの住宅の 塀から、ウィンタージャスミンの枝がしなり、黄色くて可愛い花を 色づかせているのも、きっと毎年おなじみの光景なのだろう。

۲.....

師匠は、無言だ。

迷いなく、やや足早に進んでいく。

煉瓦づくりの建物と塀と、枝垂れた花と、そして冬の光。

いついつまでも変わらなそうなその狭間を辿る内、やがて通行人が減っていることに気づいた。

昨日、ロード・ユリフィスが現れたときとは異なる。不自然に世界から人が消え去った──むしろ、自分たちの場所がずれていったかのようなあのときとは違って、ぽつりぽつりと、ひどく自然に減少していったのだ。

「師匠」

「……ある種の結界だな」

と、師匠が呟いた。

「ただし、魔力は一切働いてない。あくまで人間の心理にのみ訴えかけた、現代魔術的な結界だ。なるほど、さすがは先代の現代魔術科学部長。私がドルイドストリートでやっているのと本質的には同じだが、よほど洗練された術式だな」

「どういうことですか」

答えるより先に、師匠はシガーケースから葉巻を取り出し、炎を 灯した。

その香りを嗅ぐと、頭のどこかがすっと楽になったような気がした。いや、いつのまにこれほど疲れていたのかと、いまさら思い立ったみたいだった。

「以前の講義でもやった。つまり、気分の問題だ」

と、師匠は葉巻を咥くわえたまま喋る。

「魔術師には有用だろう。魔力を使ってない以上、よほど高位の魔術師にも発見される可能性は低い。逆に言えば、ただの人間でも突破することは可能だが、一般人がこうした心理的結界をわざわざ踏み越える知識があることなどまずないからな」

つまりは、師匠のような特殊な相手でなければ、ということか。

なのに、妙な恐れが、背中を辿った。

本当に、それはハートレスの手落ちなんだろうか、と思ってしまったのだ。師匠が敵に回ったと知っているのに、そんな失敗をするだろうか?

数分ほどして、いくつも煉瓦の建物が折り重なった小道の奥に、 古ぼけた木造の小屋が見つかった。

「これが、キャルグの残した住所?」

扉を開くと、小屋は凡庸な内側を晒した。

汚れたソファとテーブル、クローゼットが置かれ、とっくに廃刊になったパルプ雑誌が乱雑に放り投げられている。

ただし、その床には、これ見よがしな地下への階段があった。

師匠とうなずきあって、その階段を降りていく。

暗がりから、濃密な酒の香りがした。

「……どうやら、酒蔵を改造した場所らしい」

近くにスヴィンがいたら、たちまち酔ってしまいそうだ。

濃密な葡萄の香りに、再び頭に淡く霞がかかるのを感じながら、 用心深く歩を進めていく。石でできた階段はぬめっている上、とこ ろどころが磨り減って、欠けており、ちょっと気を抜いただけで足 を滑らせてしまいそうだった。

意外と、階段が長い。

「少し、分かってきた」

途中で、師匠が呟いた。

「前の──アーサー王を再現しようとした墓は、グレイにとっての迷宮だった」

最初に、そんな話をしていた。

迷宮の歴史的な講義として、迷宮と迷路は異なるものだとか。

「ならばここは、私にとっての迷宮だ」

何かを耐えるみたいに歯嚙みしつつ、師匠が言う。

「ハートレスは、もうひとりの私にほかならない」

もうひとりの、師匠。

迷宮とは元来が一本道であり、己の内側に潜っていくようなものなのだと、師匠は語っていた。そして、その最後には怪物が――もうひとりの己が立ち塞がるのだと。

「師匠は、生徒を傷つけたりしません」

「だからこそだ」

と、師匠が低く言う。

「そうした方が良かったのではないか、と思ったことはある」

どきり、とした。

師匠の口から出てくる、師匠とはかけはなれた台詞。なのに、確かにこの人の中から生まれたに違いないと思わせる言葉。

「自分が高みにあがりたいのならば、本来生徒を鍛え上げる必要などない。遥かな高みへ伸びてゆく才能を手助けするよりも、その才能を追い抜くための努力にこそ、すべてを捧げるべきではないか。 私は最初から道を間違っていて、今あるすべてを打ち捨ててでも、本道に立ち戻るべきなんじゃないか。

ああ、本来私が育てるべきはベルベット家の魔術であり、そのためにこそ魔術刻印を取り戻さなければならない。ウェイバー・ベルベット、本当にお前が魔術師だと胸を張りたいのなら、今からでもくだらない教師の仮面を打ち捨てて、冷徹で残酷たる魔術師の本質を取り戻せ。そんな幻聴を、何度聞いたかなんて覚えてない」

- 一『君たちは、本当に卑怯だ』
- ──『ただ天才であるというだけで、あっさりと高みへ飛翔していく。私がただ思い描いているだけの空を、自由に飛び回る』

師匠の口から、その言葉を聞いたのは剝離城アドラだったか。

ほんの少しのアドバイスで、何段階も上の魔術に至ったルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトに嫉妬して、こぼれ出た師匠の本音。 卑小で卑屈な、だけど師匠の芯に触れられたと思ったとき。

そして、もうひとつ。

──『ベルベット家の魔術刻印も、私が預かってるんだ』

― 『この世界でウェイバー・ベルベットに対応する魔術刻印はこれしかない。魔術師を裏切らせないという意味では、最高の担保だよ。最初から生き甲斐を奪っておくようなものなんだから』

それは、メルヴィンから聞いた言葉だ。

担保として、師匠の一ウェイバー・ベルベットの魔術刻印は、彼が保持している。

多分、魔術刻印とは次代に伝えていくノートみたいなものなんだろう。だから、今の師匠はそのノートを奪われている状態だ。己の魔術を書き込んでいく刻印ノートを持たず、無為に費やされていく年月は、魔術師として純粋すぎる師匠にどれほどの痛みを強いただろう。

「……拙は、師匠をくだらないなんて、思いません」

「ありがとう」

階段を、降り切った。

もう一度、もっと慎重に扉を開いた。開ききると同時に、素早く中へ入り込み、いつでもアッドを展開できるよう備えつつ、周囲を 観察する。

誰も、いない。

いくつも酒樽が並べられており、近くの床には、この数日内に開けたと思われる瓶も転がっていた。

その背後には、フラスコや試験管のほか、奇怪な器具が据えられている。あるいは幾何学的に捻じ曲がってつながった金属の天秤、はたまた銀の五芒星や、七大惑星の意匠がなされた合金製のベル、明らかに現存生物ではありえぬ剝製や、毛むくじゃらの干物も放置してあった。

魔術の実験道具だと、直感的に分かった。

「……まさか、ハートレスの工房か?」

師匠が囁き、葉巻を持ち上げる。

先端の炎がつかのま大きく燃え上がり、奥の壁に掲げられた、おびただしい紙と糸とで複雑に構築されたカタチを露わとした。

「ウェビング……」

半月ほど前、自分の故郷にもあったものだった。

やはりハートレスが住まいとしていた小屋で、こうした紙片と糸による図形を発見したのだ。結果、その術式を解読したことにより、師匠はアトラスの七大兵器の絡んだあの事件を解決するに至ったのであった。

ウェビングの横合いには、羊皮紙の地図もかかっている。

ロンドンを斜めに描いたと思しいその構図には、星を丸吞みにし そうなほど巨大な竜が、さらに奥深くへと潜ろうとしていた。おそ らく霊墓アルビオンを表現した地図であろうことは、自分にも理解 できた。

「……今回は、わざとだな」

と、師匠が呟いた。

「私たちに発見されないよう、処理するだけの時間は十分あったはずだ。.....つまり、あえてここに残している。解けるなら解いてみる、と私に言っている」

そうだろうか、と自分は思った。

解けるなら解いてみる。師匠はそう言っている。だけど、もっと 別の意図がそこに秘められている気がしてならなかった。

たとえば.....

.....解いたら、お前は終わりだぞ、とでも言うような。

「待っていてくれ。これだけはっきりと残っているなら、解読の手間はかからない」

ウェビングに向かい合って、師匠が懐から手帳と万年筆を引き抜

いた。

*─*それが。

誰かの脳髄に溶け込むような行為に見えたのは、本当に錯覚だったろうか。

*

「……フーダニットの楽しみようがないだろうな」

ボトルを手にしたまま、彼女が口にした。

半分ほど注がれた大容量のマグナムボトル。すでにそれを三本空けているのだが、かすかに頰が赤らむ以外の変化はないあたり、凄まじい酒豪ぶりではあった。サーヴァントゆえというよりも、おそらくこの女は生前よりそうだっただろう……という雰囲気が、とろりとした瞳から窺える。

ついとしなやかな指が動き、自らのマスターへと向いた。

「なにしろ、あの陰気臭い君主ロードにとって、どうやっても犯人 はお前だ。これじゃあミステリになりようがない」

「倒叙法は、現界時に世界からもたらされた知識にはなかったですか。刑事コロンボなんかでは有名な手法なんですが」

「どうでもいいね。イリアスだって好きじゃないし、私は酒があればいい」

と、フェイカーはまたワインを呷あおって言う。

「だが、お前はあれだ。現代でいう機械かなにかみたいだな」

フェイカーの言葉に、ハートレスが尋ね返す。

「機械、ですか」

「中身がない。夢がない。なのに、やるべき目的を入力された結果、そのための最適解に邁進している。これを人間的とは言い難いだろう」

あまりと言えばあまりの言い草だが、ハートレスは表情ひとつ変えない。

「不快なマスターを持ちましたか?」

「いいや。実を言うと、居心地がいい」

唇を歪めて、女は獰どう猛もうに笑ったのだ。

一口、赤ワインを含むと、その唇はなおさら妖艶に濡れた。古代、食卓を囲んだ戦士たちもまた、彼女のその微笑を見ただろうか。

「我が王は拗ねるかもしれないがね。私もそうあれかしとつくられ た人間だ。うん、今となっては、人間だったというべきか」

苦笑が、郷愁を滲ませて深まった。

王母オリュンピアスにつくられた人間。覇者となるべく運命づけられたイスカンダルを、ありとあらゆる呪いや災いから守護するため、設けられた二者。

かたわれは将軍となり。

かたわれは魔術師となった。

しかし、将軍たる兄と違って、魔術師の彼女は本来英霊というに は遠い存在だ。ヘファイスティオンという名前さえ、兄から時々借 り受けていただけの幻である。

だからこそ、彼女にはずっと世界が眩しかった。

征服王イスカンダルはもちろんのこと、彼の下もとに群れ集う幾 多の英雄英傑のすべてが美しく、到底正視していられぬほどだっ た。

「ああ、彼らは眩しすぎた。私が一緒にいるには、いささか立派過ぎた」

ワインのボトルを傾けて、フェイカーは述懐する。

「だから、お前ぐらいの薄暗がりがちょうどいい。とっくに死んでいるのに、初めて自由になっていいと言われた気がする。酒はずいぶん美味くなったしな」

「おかしなものですね」

「おかしなものさ」

と、フェイカーも認めた。

「だけど、それぐらいの方が、壊れても悔やまずに済むだろう」

それは、つまり今は悔やんでいると認めるようなものだ。

一度は王に忠誠を誓い、しかしその王が死に際して、「最も強い者が治めよ」などと言い放ったがために生じた、後継者ディアドコイ戦争。かつての夢も憧れも砕け散り、信頼した将軍が命を預けた仲間を殺し、彼女をつくりだした王母オリュンピアスまでも巻き込んで、裏切りに裏切りを繰り返し、その悲愴な結果だけが歴史に刻まれた。

夢の最果て。

あまりにも無残な、砕けた思い出の欠片。

隣で、マスターの赤毛が、強い風に揺れている。

その色合いだけが、かつての主君イスカンダルに似ていた。無論、かりそめのマスターと、この魂を捧げた主君を比べること自体が馬鹿げているのだが、とりとめもなくそんな連想をしてしまったのは事実だった。

どうしてだろう。

何ひとつ、似たところのないふたりなのに。

「なにか?」



振り返られて、フェイカーはつい視線を逸らした。

「別に。お前だって、妙なサーヴァントを引いたな」

「まさか。私にとっては、あなたでなければならない。そんなことより、あなたが案外素直に従ってくれていることに驚いています」

「それだって、奇妙な考え方だろう」

と、フェイカーは返した。

「私はサーヴァントだ。マスターに従うべく召喚されたもので、互 いに辿り着くべき願いも一致した。だったら、お前の命令を受け容 れるのは当たり前だ」

「過去の聖杯戦争では、けしてそうではなかったですね」

「ろくに知りもしない戦いを言われても」

彼女はかぶりを振る。

極東で、何度かその儀式は行われたという。

いかなる願いもかなうという聖杯を求めて、七騎の英霊と七人の マスターが相争うという、野蛮なる儀式。

今の彼女は、そうした儀式を利用して生み出された、かりそめの 存在だ。

かりそめの英霊。

かりそめの霊基。

かりそめのクうラつスわ。

いずれにしても、真っ当ではない。だからこそ自分にはふさわしいだろうと思う。イスカンダルに従ったほかの兵士たちのような―歴史に刻まれた英雄ではなく、はたまた反英雄ですらなく、名前すら持たずに朽ち果てた亡骸に。

「冬木の聖杯戦争で、また召喚されたぞ」

「分かりますか」

「霊脈がつながってるからな。それとなく分かる。あと一騎だか二 騎だかで、冬木の第五次聖杯戦争はスタートだ。そうなれば、いつ 終わるか知れたものじゃない」

「なら、急ぐ必要がありますね。彼も、そろそろ最初のホワイダ ニットは解けた頃でしょうから」

それから、ハートレスは不意に別のことを問うた。

「エルメロイII世が、お嫌いですか」

「ああ、嫌いだね。あんなうらなりの頭でっかち、本に塗まみれて 圧死するがいい。あの列車で殺せなかったことだけは、召喚されて からずっと恥じ入ってる」

「無理もありません。ですが、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは、実に有意義でした」

ふわりと笑って、ハートレスが言う。

「おかげで、僕は彼を理解した。どのようにモノを見て、どのように魔術を視て、どのように人を観ているか知った。どのような概念を愛し、どのような在り方に依存し、どのような夢想に焦がれているか悟った。同様に、彼も僕を理解したでしょう。おそらくホワイダニットをひとつかふたつは詰めてくるはず。だけど、そこから先を解いてしまえば……そこで、彼は詰む」

「は、苦しむ顔は見たかったな。さあ着いたぞ」

と、フェイカーが顎でしゃくる。

彼らのいる場所から、下方であった。

「懐かしいですね。とはいっても、この前忍び込んだとき以来になりますが、こんな角度で見下ろすことは一度もなかった」

そこまで言って、ハートレスはこう付け加えた。

「我が愛しのスラー」

そうだ。

ハートレスとフェイカーが見下ろしているのは、時計塔・第十二 科──わずかに通りひとつかふたつぐらいでしかない、現代魔術科の つつましき学術都市であった。

彼らは、空にいた。

もちろん、彼女の宝具によるものだ。

勇壮な戦車を牽いているのは、骨の竜であった。

虚空を蹄が打つたびに魔力の紫電が走り、世界を揺すり上げる。 もはや現実からは失われた魔力の脈動が、今このときだけ蒼穹に響 き渡る。

「じゃあ、頼みますよフェイカー」

「任せろ、マスター」

ボトルを足元に転がして、嬉しそうにフェイカーが笑った。

新たなる戦いの猛りに、彼女の霊しん核ぞうが力強く鳴っていた。

「ひとつ、礼を言う」

「ん、なんです?」

「お前は、私に戦う場と意義をくれた。感謝する、マスター」 それきりで、彼女は高らかに叫ぶ。

「我が名はヘファイスティオン!」

大嘘だ。

この戦車を使うための、偽りの口上。

フェイカーたる彼女は、宝具の真名解放ですら、真実を口にすることはかなわない。どんな英霊だって、自らの本質たる宝具を開帳するときは一抹の誇らしさがあるだろうに、彼女にあるのはただ主人を守るための偽りだけだ。

「史上最も偉大なる征服王、イスカンダル第一の腹心なり!」

また、嘘。

それも兄の誉れだ。

何ひとつ、本当などない。彼女にはない。

しかし、今だけは、彼女の胸に新たなる戦いに向けての炎が燃えていた。

その内なる炎に合わせて、戦車の魔力が倍加する。フェイカーが 魔術で編んだ手綱を握ると、さらに魔力の膨張速度が勢いを増す。 ああ、最初は太陽に向かって突き進み、そこから弧を描いた獰猛な る戦車が、偏西風に漂う大マ源ナを根こそぎ喰らい、文字通りの彗 星と化していく。

眼下の魔術通り―スラーへと!

「いざ駆けよ、魔天の車輪へカティック・ホイール!」

*

しばらくして、師匠が唸りをあげた。

おびただしい書類を読み進み、手帳に走り書きを続けた結果だった。

「ここにあるのは、封印指定の術式ばかりだ……」

「封印指定……?」

確か、蒼崎橙子がかつて指定されたとかいう、時計塔の古き制度 だ。

単なる学問や研鑽では修得できない、一代限りの魔術保有者を惜しんで、協会が手ずから永久に保存してしまおうとする令状だとか。

その対象に指定されることは、魔術師にとって最大の栄誉であり、同時に最大の災難でもあるらしい。

「書類の隅に秘儀裁示局の紋章が捺されている。かの施設も、霊墓 アルビオンの内側にあるんだ」

書類の上を彷徨う師匠の人差し指が、論文の執筆者の名前で止まった。

「術式の発明者は……Emiya」

「師匠?」

様子の不自然さに名を呼ぶと、師匠は同じ名前を舌で転がした。

「衛宮……だと……?」

「聞き覚えのある、名前なんですか?」

「第四次聖杯戦争の、参加者のひとりだ」

「.....つ」

まさか、こんなところでそんな名前が出てくるとは思わず、自分 は息を止めた。

「いずれにせよ、もう少しだ。メインの術式そのものは、君の故郷にあったものと酷似している。おそらくはその応用だろうが、読み解くのはさほど難しくない」

工房に、師匠の万年筆と紙の擦れる音が続いた。

以前ハートレスの小屋で術式を解体したときにはトリムマウの手を借りていたが、すでに一度解いた術式が根本にあるからか、それ

とも前回と違ってひととおり資料が揃っているためか、今回は必要 ないらしい。

しかし、わずか数分ほどで、思いがけない声音がこぼれた。

「そんな……」

「師匠?」

万年筆を支える手が、わなわな、と震えた。

細長い指が、いまにもガラスみたいに砕けてしまいそうだった。

「解けたん、ですか?」

ハートレスの術式を、解体したのか。

しかし、だとしたら、どうしてこんな絶望的な顔をしているのか。手元の書類を、爪を立てて握りしめ、そのことにも気づかぬように、師匠の身体全体が細かく震えだしていた。

「そんな……なぜ……なぜこんなことを……」

呻きが、こぼれた。

まるで、光を失った画家のような。

あるいは、父の恩恵を失った救世主のような。

主よ、主よ、どうして私を見捨てたもうたのかエリ・エリ・レマ・サバクタニ。

「いや……それだけはわかる……ハートレスは……私にこれを解かせるために、わざと残していった……そうすれば、私は二度と邪魔できなくなると踏んだから……」

息ができない。

ひどく、どうしようもない何かが、自分の胸に巣くっていた。最初に生じた悪い予感が、的中してしまった──そんな居心地の悪さと、それ以上の恐怖が、じわじわと内臓を侵食していくようだった。

「だったら……私は……どうすればいい……」

「師匠、一体どうしたんですか」

こんなにも弱々しい師匠を見るのは初めてだった。

フェイカーの宝具によって重傷を負い、倒れた時でさえ、これほどではなかった。いかに弱音を吐いたところで、常に師匠は挑戦的だった。いっそまるで敵わない相手の方が、挑発的にさえなれた。

だけど、今だけは。

「オイオイ。どうしちまったよ! いよいよ魔術に生っちろい脳み そ漬けすぎて、おかしくなっちまったか?!」

右肩に固定されたアッドでさえ不安になったのか、師匠に声をかけ始めた。

それでも、師匠は茫然と書類を見つめているきりだ。

ぶつぶつと、呟きがこぼれた。

「これは……召喚対象を利用して、本命の霊基を成立させる術式だ。そうだ、フェイカーという影を用いて、この現実に真なる英霊を確立させる。不可能じゃない。不可能なはずはない。私たちは見てきた。だからこそ、グレイの故郷では、アーサー王の肉体と精神と魂をそれぞれに模倣し、アーサー王そのものを再現しようとしたじゃないか……」

その通りだ。

自分の身体こそは証明だ。

アーサー王をもう一度呼び戻そうとした、とある一族のはかない 夢の結晶。そうした術式が成立しうることを、もはや自分たちは否 定できない。

ああ、だから。

続く師匠の言葉こそは、自分にとっても、悪夢そのものだった。

「真正の英霊……征服王イスカンダルを……ハートレスとフェイカーは召喚しようとしている……」

〈上巻・了〉

あとがき

─それは、まるで星の密談。

夜毎に人の知り得ぬ言葉を交わし、

朝毎に人の見通せぬ領域へと潜む。

その結実は、我らすべてが骨と化した夢の果てか。

お待たせしました。

『ロード・エルメロイII世の事件簿』、ついにラストエピソードとなる『冠位決議グランド・ロール』の開始です。

サブタイトルにもありますが、シリーズが決まった時点から、最後は君主ロードたちの会議をメインにしようと考えていました。これは時計塔という舞台が、魔術師たちにとって自らの学術を突き詰める象牙の塔であると同時に、いっそ陰惨とさえ表現すべき権謀術数の張り巡らされた宮廷であると、さまざまなキャラクターや各種設定に語られていたからです。

*

本編において、学術の側面を表現するのがエルメロイII世ならば、こうした陰謀の側面を表現するのがライネスでしょう。しかし、いずれは彼らを取り巻く君主ロードたちとの、丁々発止のやりとりや周到な根回しを描かねば、時計塔を書いたことにはなるまい一そして、書くならば、この物語のキャラや舞台に、読者の皆さんが十分馴染んだラストエピソードであろう、と機会を窺っていたのです。

なぜなら、陰謀とはそれ自体が複雑な魔術儀式であり、さまざま

なホワイダニットを内包した事件だからです。魔術とミステリを扱う『ロード・エルメロイII世の事件簿』のフィナーレとして、これ以上の題材はないでしょう。

初めてロンドンそのものを舞台としたのも、そういう理由です。 古き都の佇まいは、きっとこの終幕をより魅力的に飾ってくれると 考えたのです。

また、会議ともうひとつ、シリーズ初期から使おうと決めていた ガジェットとして、長らく存在のみ囁かれていた時計塔ダンジョン 一霊墓アルビオンについて、今回は大きく踏み込むことになりまし た。

今回のグレイの反応は、奈須さんからダンジョンの設定を聞かされた時の僕自身の反応をモデルにしています。いや、いくらなんでもこんな代物だとは思わないでしょ! まさか F G O 第四章のあれが違ってただなんて......

*

新たに現れる君主ロードたち。

はたまた、姿を現さずとも、そのこと自体が陰謀のキーとなりえる者。

事件の因果を握るハートレスとフェイカー。

そして、今回の事件に大きく関わることとなる、ドクター・ハートレスの弟子たち。

幾多の思惑を交錯させ、エルメロイII世とその助手を巡る物語は、ついに最終コーナーを曲がり、これより結末に向けて加速し続けます。彼らが遭遇してしまった謎と魔術の闇は、いかなる形で解体され、ふたりにいかなる結末を与えるのか。

*

この本が出る頃には、ついにコミック版『ロード・エルメロイII 世の事件簿』も二巻まで発売されているはずです。東冬さんの手になる美麗極まる漫画化は、僕も毎回驚かされました。こちらはタイプムーンブックスと異なり、通常の書店で購入できるかと思いますので、ぜひ手にとってみてください。

最後になりましたが、ラストエピソードにふさわしい華麗なイラストをあげてくださった坂本みねぢさん、どうしてもラストエピソード前にロンドンを取材したいという僕の申し出に応えて一緒に旅をしてくださった考証の三輪清宗さん、お忙しい中原稿のチェックをしてくださった奈須きのこさん、OKSGさんなどタイプムーンの皆様にお礼申し上げます。

ラストエピソード下巻、つまり最終巻はこの冬の予定です。

どうぞ、終劇のそのときまで、皆様お付き合いくださいますよ う。

二〇一八年六月

『Detroit: Become Human』を遊びながら

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

8「case.冠位決議グランド・ロール(上)」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2018年8月12日 発行

ver.002

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 8 「case.冠位決議(上)」』

2018年8月10日 初版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社 ΚΑ D O ΚΑ W A

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

%Japanese text only

